



アメリカ南部文学における遺伝をめぐる社会文化的言説の研究 —エレン・グラスゴウの小説を中心に— して

本橋, 香

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2018-03-25

(Date of Publication)

2019-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7057号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007057>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

平成 29 年 12 月 1 日

アメリカ南部文学における遺伝をめぐる

社会文化的言説の研究

—エレン・グラスゴウの小説を中心に—

神戸大学大学院人文学研究科博士課程
後期課程文化構造専攻

本 橋 香
(旧姓 種子田)

目次

序論	1
第I部 エレン・グラスゴウと遺伝	12
第I部の目的	13
第1章 エレン・グラスゴウとダーウィニズム—『ヴァージニア』を中心に	15
第2章 不幸な結婚は遺伝するのか?—『人生とガブリエラ』より	26
第3章 女たちの狂気は遺伝か環境か—『不毛の大地』より	37
第4章 〈ニュー・ウーマン〉へと進化する農園主夫人像	45
第II部 混血神話の破壊と再構築	58
第II部の目的	59
第5章 『クローテル 大統領の娘』における二重変装	61
第6章 人種を越境する女性社会改革者 —フランシス・ハーパーの『アイオラ・リロイ』	70
第7章 グラスゴウの『この世の中で』における混じることのない血	81
第III部 南部白人女性と病魔	88
第III部の目的	89
第8章 モンスター化された南部白人女性像 —ラングストン・ヒューズとリチャード・ライトの比較研究	91
第9章 アメリカ南部白人女性像の変化 —エレン・グラスゴウとリチャード・ライトの対照的アプローチから	99
第10章 エレン・グラスゴウの戦略的シスターフッド —アレン・テイトとH.L.メンケンとの書簡から	113
結論	123
注	131
引用・参考文献	137

序論

アメリカ南部の批評家アレン・テイト(Allen Tate, 1899-1979)は 1945 年の“The New Provincialism”で、「第一次世界大戦後、現代に差し掛かる少し手前で南部は立ち止まって振り返り、現在や未来を過去と比較するために過去がどのようなであったかを見ようとした」(Prenshaw 78)と、南部ルネサンスがいかなる現象であったのかを述べている。ペギー・ホイットマン・プレんショウ(Peggy Whitman Prenshaw)によれば、このテイトの論文に依拠して、南部ルネサンスは第一次世界大戦後に南部の伝統的価値観と近代産業化で発展した新しい価値観とのせめぎあいのうちに起こったという論が定説となっていた。しかし、フェミニスト批評家キャロル・マニング(Carol Manning)は、第一次世界大戦や農本主義者たちの創作活動が直接の引き金になったというより、むしろもっと早い時期、世紀転換期に女性作家たちの活躍によって南部ルネサンスは引き起こされたのだと主張している(Manning 52)。そして、その先駆的な役割を担った一人がエレン・グラスゴウ(Ellen Glasgow, 1873-1945)であると、グラスゴウの功績を高く評価した。

エレン・グラスゴウはアメリカ南部の因習に縛られた女性を客観的に描くことで旧南部文学のロマンティズムから脱却しようと、南部の伝統的な価値観と格闘し続けた作家であった。リアリズムや自然主義といったヨーロッパを発祥とする文学技巧を南部作家の中でもいち早く取り入れたことで、南部ルネサンスの先駆けと評価されており、ウィリアム・フォークナー(William Faulkner, 1897-1962)へとつながる近代南部作家の系譜の起源とみなされている。彼女は現実の社会がどれほど生きづらい世界であったとしても、そこに生活する人々の姿をありのままに描き出そうとし、南部文学のみならず、アメリカ文学史上において大きな足跡を残した。

また、グラスゴウ研究家マリオン・K・リチャーズ(Marion K. Richards)もグラスゴウの小説は 1897 年から 1941 年までの間、定期的には出版されているため時代の変化が読み取れる資料として非常に興味深いと述べている(Richards 10)。これは、スティーブン・クレイン(Stephen Crane, 1871-1900)、フランク・ノリス(Frank Norris, 1870-1902)、セオドア・ドライサー(Theodore Dreiser, 1871-1945)などアメリカ自然主義作家たちと同時期に活躍していた一方で、1920 年代には F・スコット・フィッツジェラルド(F. Scott Fitzgerald, 1896-1940)、アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)、シンクレア・ルイス(Sinclair Lewis, 1885-1951)とともに文壇で活躍し、グラスゴウ作品が時代とともに

に変化しつつ常に一定の評価を得ていたことを物語っている。

グラスゴウは南部の教育機関で教育を受けなかったために、南部の外の人びとの意見を抵抗なく受け入れられた。彼女はヴァージニア州リッチモンドで裕福な家庭に生まれた。幼少時から病弱で学校に通うことができなかつたため、学校教育の代わりに自宅の蔵書を読み、独学でさまざまな思想を吸収していき、南部の学校の常識を植え付けられずに成長した。哲学、政治、古典など幅広いジャンルからの読書で知識を得たが、なかでもチャールズ・ダーウィン(Charles Darwin, 1809-1882)の『種の起源』(*On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*, 1859)は彼女の最もお気に入りの本であった。グラスゴウが保守的な価値観が根強いアメリカ南部で生まれ育つたにもかかわらず、南部の伝統的な社会規範に疑問を抱き、小説のプロット、人物描写、背景など、至るところにダーウィニズムを取り入れ、南部に近代思想と科学的合理性を根付かせようと作品を創作し続けた背景には、彼女が南部の学校教育を受けなかったという生い立ちが深く関係している。

グラスゴウは生涯、病床に伏すことが多かったが、思春期に入ると難聴にも苦しみ、徐々に聴力を失っていく恐怖を感じながら創作活動を続けていた。聴力を失ったことでグラスゴウは人との交わりを避けるようになり、憧れていた一人旅に出ることは難しくなった(Ekman 138)。マリオン・K・リチャーズは、グラスゴウは耳が聞こえないために、「このような呪われた病を子供が引き継ぐといけないので、自分には結婚する資格がない」(Richards 65)と自らの身体を媒介して病気が遺伝することを悩み、22歳で結婚を断念したと伝記に書いている。グラスゴウ自身だけではなく彼女の家族も多くの者が夭折したことから、自分の家系に流れる心身の弱さを気に病んでいた。ウィル・ブラントリー(Will Brantly)によれば、母親の精神的な不安定さ、父親の不寛容さ、兄の自殺、姉妹たちの夭折など、不幸が立て続けにグラスゴウ家を襲った(Brantly 106)。

このように、自分の家系に流れる血に対する不安があったこともグラスゴウが遺伝に固執して物語を創作しつづけた理由の一つである。相次ぐ肉親の自殺や病死、狂気など、家族の中で不幸が次々に起こることで、自分の家系の血に恐れや不安を抱いていった。どのように親から子へ、子から孫へ性質が伝わるのか、遺伝の仕組みが解明されていなかった時代に、人間や生物の形質が親から子へ伝わる遺伝の謎に、グラスゴウを含めた当時の作家たちは興味や畏怖の念を抱いた。とりわけ自然主義作家たちは想像力を駆使して遺伝の概念を文学作品に取り込み、当時の科学(または疑似科学)の知識を文学に

融合させる試みに魅了されていった。グラスゴウも自然主義の基本理論を学ぶためダーウィンやハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)の著書を熱心に読み、遺伝に関する科学的知識を取り入れる努力をしていた。それらの知識は現代の我々には真理とは言えない社会的言説にすぎないものがあったとしても、新しい分野を開拓しようとした彼女の勇氣ある挑戦は評価されるべきであろう。

グラスゴウとダーウィニズムの影響というテーマは、J.R.レイパー(J. R. Raper) がノースウエスタン大学 (Northwestern University) へ提出した博士論文「エレン・グラスゴウとダーウィニズム、1873-1906」(“Ellen Glasgow and Darwinism, 1873-1906”) や『保護されず』(*Without Shelter*) においてすでに検証済みである。レイパーによれば、グラスゴウは遺伝の概念を作品に受容した結果、「南部性」や「南部レディ」に生涯こだわり続けることになった(Raper ix)。しかしレイパーの著書における研究対象は、リチャード・ホフスタッター(Richard Hofstadter)が『アメリカの社会進化思想』(*Social Darwinism in American Thought*)で指摘している社会ダーウィニズムが流行していた時期のみを研究範囲としており、グラスゴウが作家としての成熟期である中後期に書かれた作品に関しては分析されていない。本論ではグラスゴウの中後期の作品に焦点をあて、当時の遺伝に関する言説に理論的根拠を与えた(疑似)科学がいかにグラスゴウ作品に影響し続けていたかについて検証する。

グラスゴウは『種の起源』を暗記するほど何度も読んだと述べているが、批評家が指摘するように彼女のダーウィニズム理解にはヴィクトリア朝的なバイアスがかかっていた。本来、ダーウィニズムにおける進化は木の枝分かれ状に無目的に進んでいくのに対し(長谷川 51-4)、ヴィクトリア朝の人々は人類が創造の最高点に達したものだという進歩主義的価値観を証明する道具としてダーウィニズムを支持していた(ボウラー 252-8)。ヴィクトリア朝の人びとが歓迎した進歩主義はグラスゴウの作品にも散見する。しかしながら、本論では彼女が当時、ダーウィニズムという南部では受け入れがたい思想を取り入れ、南部の近代化を図ったことに注目しており、同時代の作家同様に進化と進歩の混同が認められるとしても、そのような時代的な制約の下、限られた知識で想像力を駆使して新しい女性像、人間像を築き上げようとした彼女の気概を評価したい。

スーザン・グッドマン(Susan Goodman)も「グラスゴウは遺伝や環境が性格形成にどのように影響するかを理解しようと努めて」(Goodman 48)おり、家族が進化論的な人種の退化現象によって狂気や神経症などを引き起こすのではないかという世紀末的な

不安を抱えていたと分析している。また、ハワード・マンフォード・ジョーンズ(Howard Mumford Jones)が 1938 年にニューヨーク・ヘラルド・トリビューン・ブックスに寄稿した“Ellen Glasgow, Witty, Wise and Civilized”でも以下のようにグラスゴウと遺伝の概念についての関係を指摘している。

She has been haunted by heredity. The young novelist, suffering a severe case of evolutionary measles, accepted heredity in the Darwinian sense; the Virginian was inevitably interested in family. As a Virginian she has mirrored the distinction among good families, good people, poor whites and servants; as an evolutionist she believes that heredity is a profound force in character. In *Barren Ground* Dorinda succeeds because of a strain of innate fortitude in her inheritance; . . . (402)

ここではグラスゴウが遺伝の概念に熱中したことをまるで麻疹にかかったようであるとし、同様に、19 世紀後半にアメリカの人びとが一時的に進化論思想に熱狂した様子はあたかも熱病に感染したようだったと指摘している。またヴィクトリア朝時代の意識の名残りであるが、グラスゴウ作品の登場人物たちは家柄や血筋で性質が決定づけられる傾向があり、グラスゴウ作品において遺伝的要素は登場人物の性格を決定づける重大な影響力を持っている。例えば『不毛の大地』(*Barren Ground*, 1925)のヒロイン、ドリнда(Dorinda)も曾祖父から譲り受けた勤勉な性格によってビジネスで成功することになり、人物たちは先天的な遺伝的性質から逃れられない設定になっている。

グラスゴウはリアリズムや自然主義を小説に取り入れようとヨーロッパの作品から技巧を学んでいたが、アメリカ南部というジェンダー規範の厳しい土地柄で裕福な白人女性がそれらの技法を取り入れることは精神的な葛藤を伴った。フレデリック・マクダウエル(Frederick P. W. McDowell)は、グラスゴウの自然主義の理論はエミール・ゾラ(Emile Zola, 1840-1902)と似ているが、グラスゴウがダーウィニズムを社会的場面に適用したやり方はゾラ作品とは違って、もう少し柔軟性があると述べている(McDowell 22)。

Still, her fiction illustrates many naturalistic tendencies: a frequently inclusive

rendition of milieu, a conviction that social laws operate like biological and physical laws, a sense that primitive and eruptive forces are part of human nature, and insistence that Darwinian premises underlie any “modern” world view, a belief that ethics are inductively derived from experience, a feeling that individualistic force is needed to break through inhibiting social conventions, and a recognition that heredity and environment are the main factors which limit mankind’s effectiveness as a free agent. Like many of the other American realists contemporary with her, she accepted only a modified determinism, feeling that the individual is in part capable of directing his activity, even if heredity and environment restrict him. As she explained in 1939, the determinism of her philosophy is mitigated by a recognition that the freedom of the will, as a concept, serves a useful moral and social purpose (McDowell 22).

社会的な法則は生物学や物理学の法則と同様に機能し、人間の性質には原始的で突発的な力が現在でも続いているという感覚、遺伝と環境は人間が自由に生きることを妨げる主な要因であるという信念など、グラスゴウの小説は自然主義の要素が盛り込まれているが、マクダウエルによればグラスゴウの決定論は限定的に使用されているだけで、個人は部分的には自由意志を行使することができると考えられている。ジョーンズやマクダウエルが指摘するように、グラスゴウは社会進化論的な思想を取り入れながらも、自分の作品に適合するように修正を重ね、独自の作風に仕上げている。ここからは、小説を書くことに対するグラスゴウの強いこだわりがうかがえる。

グラスゴウは後年、イギリスへ遊行し、ウェストミンスター寺院へ敬愛するダーウィンの墓参りに訪れている。さらにはトマス・ハーディ(Thomas Hardy, 1840-1928)やジョゼフ・コンラッド(Joseph Conrad, 1857-1924)など当時活躍していた文豪を訪ね、直接言葉を交わす機会を得て、作品創作の意欲を高めた¹。

しかし、加藤和人が指摘するように 20 世紀前半は、遺伝学研究が負の面で大きな影響を社会に与えた時代であり、優生学の根拠として各国の政策に用いられ、ナチス・ドイツ政権下ではユダヤ人大虐殺へと展開していった(加藤 216)。自然主義に傾倒したグラスゴウも遺伝に囚われており、自分自身が「病を抱える血筋」で、子孫に災いをもたらすかもしれないという不安から逃れられなくなっていた。

そもそもアメリカ南部、特にヴァージニア州はその始まりから血統にこだわる歴史があった。ウィリアム・R・テイラー(William R. Taylor)によると、南部にはイギリスから王党派が大勢移住したため、南部白人は貴族階級の子孫だと主張し、イギリス貴族の価値観を基盤にして社会を築いていった(Taylor 15)。貴族など社会的地位の高い階級が存在するところには、相互補完的に低い社会的地位が求められ、これによって南部では奴隷制を受容する社会的な合意が形成されていった。南部白人エリート層が黒人奴隷の労働力を搾取する奴隷制の仕組みは、南部白人はイギリス貴族の末裔であるという建国神話にすでに芽生えていたのだ²。

裕福な白人エリート層であったグラスゴウ家も厳格な父親の下、一家の血脈を重んじており、グラスゴウは自分の血筋にプライドと不安の両方を抱いていた。このアンビバレントな感情は彼女が自分の家系には病の血が流れているのではないかという不安感と、社会的な序列階梯の上層にいるという優越感の両方を感じていたことを意味しており、彼女の作品の遺伝表象には常に不安と慢心の入り混じった複雑な感情が表現されている。グラスゴウが文学作品にダーウィニズムなど生物科学の知識を援用して南部の近代化を促しながらも、伝統主義の束縛から完全には抜け出せなかった理由はこの遺伝に対する両価的な感情にある。

遺伝にまつわる人種や性の概念については近年、学際的研究が進んでいる。文化人類学者の竹沢泰子は、「人種概念は、政治的・経済的・社会的制度や資源等の利害が絡んだ序列階梯と不可分な関係をもっており、そこに、身体を媒介として遺伝するといった言説が接合することにより、人種概念が構築されている」(『人種の表象と社会的リアリティ』6)と人種概念にまつわる誤謬の言説を指摘し、人種とは「生物学的現象というよりむしろ社会的な神話」(『人種概念の普遍性を問う 西洋的パラダイムを超えて』60)であるという1951年のユネスコ声明を紹介し、人種差別、性差別などを複層的に生み出してきた人種主義を痛烈に批判している。人種主義は生物学的な差異や血統、性差別などと結びついて発露するため、集団間の明白な序列階梯ができて利害関係が創出されやすく、多くの人びとが自由や平等を享受する権利を阻害しているという指摘は示唆に富む。

グラスゴウの作品でも(疑似)科学の知識や、血統に関する言説、伝統的な性的役割分担などが遺伝の概念とからみあって表出され、作者が当時、先祖から受け継いだ生来的な資質は変えることができないという遺伝決定論に囚われていたことは明らかである。

しかし他方では、そのような血の呪縛に抵抗し、そこから解放されることを求めている。南部という人種主義が根強く蔓延していた土地でグラスゴウが遺伝の概念にこだわり続け、努力では変えることができないとされるものに苦しむ人物を描き続けたことは、自由へのあこがれが根底にあるからとも言える。血脈への無力感は自由や平等の希求と表裏一体の関係にあり、グラスゴウ作品のヒロインが遺伝の束縛から逃れようとあがけばあがくほど獲物に鋭く食い込む罌のように彼女を責めさいなみ、自由を奪っているのだ。

グラスゴウが遺伝にまつわる社会的言説を取り入れる傾向は後期まで続くが、生前の最晩年作『この世の中で』ではアフリカ系アメリカ人を凶暴な獣でもお気楽で幸せな人物でもなく、普遍的な苦しみを背負った人間として描こうとしている³。『この世の中で』ではグラスゴウが南部の人種問題を批判的に描写しており、人種主義批判を主題として新しい混血の人物像を生み出そうとした。これによって後進的と揶揄されていた南部社会に変化の一步をもたらそうとしており、グラスゴウの作品群は社会の移り変わりを映し出す歴史的資料としての価値も高いといえる。

以下、本論を構成する3つの部と10の章の概要を示しておく。

第1部「エレン・グラスゴウと遺伝」ではグラスゴウの中後期の作品について遺伝の概念がどのように用いられているのかを、進化論思想との関連から分析する。また、遺伝の概念はイギリス社会との家系のつながりを確認できるという優越感と、グラスゴウ家に病の血が流れているのではないかという不安感の両方をグラスゴウにもたらしたことを指摘する。

第1章では1913年に出版されたグラスゴウ中期の作品『ヴァージニア』(*Virginia*)におけるダーウィニズムの影響を指摘することから、グラスゴウが具体的に社会進化論に関わる思想をどのように作品に取り入れたのかを例示する。ダーウィニズムから派生した思想的広がりを確認することによって、グラスゴウが意識的に南部に新しい考え方を取り入れ、近代化を促そうとしていたという作家の試みを明らかにする。

第2章では『ヴァージニア』に続いて1916年に出版された『人生とガブリエラ』(*Life and Gabriella—The Story of a Woman's Courage*)を自然主義的決定論と自由意志の力関係から読み解く。また、作品の全体的なトーンが明るいののは、1914年に第一次世界大戦が開戦し、アメリカが未曾有の軍需景気に沸いたため、その高揚感が作品に表現されているからである。南部、北部といった国内の分断を越えて外国との戦争に挑もうとする

アメリカのナショナリズムの台頭が、ヒロインの自己信頼に反映していることを指摘する。

第3章では1925年の『不毛の大地』に現れるヒロインの母が神経症を病むときに見るヴィジョンを分析することから、そこに潜む南部の人種主義や性差別をあきらかにする。1925年はテネシー州デイトンで起こった州立高校における進化論教育の是非をめぐるスコープス裁判(Scopes trial)が全国の注目を集めた。これによってH.L.メンケンを始めとするジャーナリストは手厳しく南部の後進性を批判し、アレン・テイトなどの南部批評家は南部擁護のために保守化した。このような中で、グラスゴウが社会進化論から派生した思想を利用して作品を創作したことは南部非難に対する中傷への応戦でもあり、また伝統主義から抜け出せない南部への挑発でもあったことを論証する。

第4章でもグラスゴウの代表作『不毛の大地』を取り上げ、イギリス人作家トマス・ハーディとの関連について考察する。グラスゴウはハーディを最も尊敬する作家であると思われ、作品創作の手本としており、自然主義的傾向もハーディ作品から学んだと言われている。女性のセクシュアリティを描き、結婚と男女のあり方を問題にしているニュー・ウーマン・ノヴェル(New Woman novel)と呼ばれる一連の当時の作品群とハーディは関連付けられていることから、グラスゴウの描いたヒロインもニュー・ウーマンの系譜から読み解く試みをする。

第II部「混血神話の破壊と再構築」ではまず、奴隷制下の旧南部を舞台として肌の白い混血を描いた作品を取り上げた。混血の登場人物は存在そのものが、一滴でも黒人の血が入っていれば白人ではないという南部の純血主義的な人種概念を鋭く攻撃する装置として機能し、人種主義のカテゴリを突き崩そうとする作者たちが注目した存在であった。実態をとまなわない想像の産物であるにもかかわらず、南部文学において純血、混血という人種にまつわる「血」の概念のおよぼす威力は大きい。この血統に関する虚構性を可視化するために、「悲劇の混血」とも呼ばれた文学上の肌の白い混血の登場人物を分析し、彼らが人種の境界を行き来することを描くことによって、マイノリティ作家たちは人種や性による優劣に異議を申し立てていることを明らかにする。それらの議論を踏まえたうえで、エレン・グラスゴウが悲劇の混血像に影響を受けつつも、20世紀の読者に受け入れられる新しい混血像を描いたことを指摘する。

第5章ではウィリアム・ウェルズ・ブラウン(William Wells Brown, circa1814-1884)の『クローテル 大統領の娘』(Clotel; or, The President's Daughter, 1853)において、トマス・ジ

ェファソン(Thomas Jefferson, 1743-1826)と混血奴隷との間に生まれたヒロインが、大統領の娘でありながら奴隷の扱いをうけて売買され、大きく翻弄される人生を歩む姿を描いている。本章では混血のヒロイン、クローテルが奴隷制から逃れるために変装をして人種や性、階級といったカテゴリを飛び越えていく場面を分析する。彼らは変えることができないと考えられていた人種や性に付随する分類を、衣服を替えるだけでいとも簡単に乗り越えることができる。この変装のモチーフを介して、人種や性の境界線を侵犯していくブラウンの文学的挑戦を見ていきたい。

第6章ではフランシス・ハーパー(Frances E. W. Harper, 1825-1911)の『アイオラ・リロイまたは取り払われた影』(*Iola Leroy, or Shadows Uplifted*, 1892)を中心にして、第5章と同様に肌の白い混血のヒロイン像を分析した。南北戦争前の南部で上流階級の家庭で何不自由なく育てられた娘が、実は混血だったことが露呈し、奴隷として売買されることになるが、最後にはアフリカ系アメリカ人として生きる道をつかみ取って生き抜いていくという力強いヒロインが描かれている。アイオラもクローテル同様に白い肌の混血奴隷であるが、白人と黒人のどちらとして生きていくのか問われたときに、黒人として生きることを選び、社会改革に自らが生きる意味を見出していく。

第7章ではグラスゴウの最晩年作『この世の中で』(*In This Our Life*, 1941)における混血の登場人物の分析をとおして、グラスゴウが南部の人種主義に異議を唱えたことを指摘する。藤井仁子によれば、この作品は小説出版直後にワーナーブラザーズによって映画化され、ハリウッド映画で初めてアフリカ系アメリカ人が普通の人間として描かれた作品と評されている。混血の登場人物パリーの体内に流れる黒人と白人の二種類の血が交じり合わずに対立して体内に流れているといったグラスゴウの遺伝をめぐる言説を分析することとおして、ブラウン、ハーパーから続く混血像がグラスゴウによってどのように変化したのか、グラスゴウの人種主義に対する先駆的見解と時代的な限界の両面を読み取り考察する。

第III部では、血脈を重んじる南部の伝統主義に異論を唱えた作家たちがどのように当時の価値観に抵抗していたのか、またその痕跡がいかに文学作品に表象されているのかを白人女性と病魔という視点から考察したい。グラスゴウと同様、ラングストン・ヒューズ(Langston Hughes, 1902-1967)、リチャード・ライト(Richard Wright, 1908-1960)といったアフリカ系アメリカ人作家たちは、個人の努力では変えることができないとされる血の呪縛によってアフリカ系アメリカ人の心身の自由が奪われていると作品中で指

摘し、人種主義の偏見によっていかに彼らの人生が破滅に追い込まれていくのかを描き続けた。彼らの作品をとおして、アメリカのマイノリティ作家にとって自由と平等を手に入れるためには血脈という遺伝決定論から自由になることが命題であったことを明らかにしたい。従来、アメリカ自然主義文学は環境を軸にして論じられることが多かったが、本論では遺伝に注目して論じることによって、旧南部の人種差別を支えていた古典的な人種や性に関する序列階梯がいかに文学に表象され、そこから脱却するためにどれほど激しくマイノリティの作家たちが格闘しつづけたのかを、ヒューズ、ライト、そしてグラスゴウなどの作品から例示する。

第8章ではラングストン・ヒューズの南部をうたった詩「シルエット」(“*Silhouette*,” 1936)と「南部」(“*The South*,” 1922)、リチャード・ライトの短編「影を殺した男」(“*The Man Who Killed a Shadow*,” 1949)の分析をとおして、彼らが南部白人女性像の神々しいイメージを不道徳で狂気に満ちた人物に変えたことを指摘した。これは、彼らが従来の人種や性に関する序列を叩き壊そうとしたことを物語っており、彼らの作品に登場する南部女性は現実の女性を描いたのではなく、人種主義が引き起こす狂気を具現化する人物として生み出されたことを指摘する。

第9章では、1932年に出版されたグラスゴウの代表作の一つ『保護された生活』(*The Sheltered Life*, 1932)とリチャード・ライトの『アメリカの息子』(*Native Son*, 1940)の分析をとおして、ライトの女性像とグラスゴウの女性像が従来の人種や性の概念を崩そうとしていた点で通底していることを指摘する。『保護された生活』では、「将軍」と呼ばれる旧南部の価値観を体現する老人の回顧談から、一族に流れる狂気の血の源が将軍の祖母であることが明らかになる。そして座敷牢に閉じ込められて死んでいった彼女の呪いが遺伝として子孫に受け継がれていることを読み解くことから、グラスゴウが遺伝を家父長制への意趣返しとして利用していることに着目し、恣意的に受け継がれていく人間の資質のあり方へのグラスゴウの複雑な思いを考察する。

第10章ではグラスゴウと南部の批評家アレン・テイト、ボルティモアのジャーナリスト H. L. メンケン (H. L. Mencken, 1880-1956) との往復書簡の分析からグラスゴウとテイトの妻キャロライン・ゴードン(Caroline Gordon, 1895-1981)、メンケンの妻サラ・ハート(Sara Haardt, 1898-1935)とのシスターフッド(女性同士の友情)について考察する。そして、その女性同士の親密な感情が作品にも表れていることを『不毛の大地』の例を用いて考察する。また、メンケンの妻サラの病死によってメンケンとグラスゴウが

友情を育むにいたった経緯も書簡から分析する。

アメリカ南部文学における遺伝に関する文学表象を研究対象とする本論は、グラスゴウを中心として、作家たちが南部奴隷制イデオロギーから脱却するためには性や人種の序列化を解体する必要があるという社会的総意の変革を作品に反映させたことを明らかにする一方で、個々の人間が課せられた古典的な社会的役割から抜け出すことの難しさも改めて確認することになった。文学表象を社会文化史的コンテクストの視座から分析する本論は、グラスゴウが描く女性間の親密さが人種や性、階級のカテゴリを侵犯する可能性を示唆するだけでなく、アメリカ南部文学における遺伝にまつわる社会文化的言説がアメリカの実社会と双方向に影響を与え合い、変化を遂げてきたことを指摘したい。

第 I 部 エレン・グラスゴウと遺伝

第 I 部の目的

グラスゴウの作品は南北戦争後の価値観の変換期に南部の人びとが覚えたとまどいを映し出しており、南部ルネサンスに先駆けて新しい女性像が登場する。グラスゴウは当時、後進的と揶揄されていた南部に近代思想と科学的合理性を取り入れ、文学の力によって新しい時代の風を吹かせようとしていたことを明らかにしたい。グラスゴウはリアリズムや自然主義を取り入れて、自然淘汰の法則や、人間が動物であった頃から受け継いでいるとされていた獣性など、社会進化論に関する思想にこだわった。イギリスのトマス・ハーディを手本として作家としての先駆性を示そうとしており、遺伝の概念を用いて(疑似)科学と文学を融合させる試みを実行していた。しかし当時、遺伝学はまだ遺伝子の存在すら解明されておらず、真偽がわからないままに作家たちは利用しており、現代の我々の目からみれば科学的真理ではなく想像力の産物と思われる言説も多い。

グラスゴウはチャールズ・ダーウィンの『種の起源』を暗記するほど何度も読んだと述べているが、ダーウィニズムはキリスト教の聖書の教えと相容れないことから、ダーウィンの祖国イギリスでも大論争を引き起こした(ボウラー 226)。しかし、グラスゴウは保守的なアメリカ南部に変革をもたらす思想として強い思い入れがあり、作品中に積極的に取り入れた。ダーウィンが『種の起源』を執筆した後、20年も発表をためらったのも、彼の論が「神がすべての生き物をつくって、その後は変化してこなかった」というキリスト教的世界観が誤りであることを指摘しており、科学と宗教の対立を引き起こすことが予想されたからであったと言われている¹。彼の推測どおり、その後ダーウィニズムは、宗教学、生物学、地理学、医学のみならず、哲学や文学などあらゆる分野に広い影響を及ぼしたが、とくにキリスト教信仰の熱心なアメリカ南部では強い抵抗を引き起こした(池上 38-41)。

歴史的にもアメリカ南部は、南北戦争の敗北によってダーウィニズムを受容することに困難が伴った。アメリカ北部の産業主義と南部の農本主義の対立によって引き起こされた南北戦争(1861-5)は、アメリカ史上最悪の死者を出す凄惨な戦争であった(バーダマン 118)。南北戦争中にリンカーンの奴隷解放宣言がなされたにもかかわらず、敗北後も奴隷制を基盤としていた南部社会のありようはすぐには変わるものではなかった(バーダマン 126)。そのような社会で、南部作家たちが淘汰されていく人々を自然主義の手法で描くことは、自らの敗北の体験と向き合わなければならず、精神的な葛藤を伴う作業であった。つまり、南部作家たちが自然主義を取り入れることは自己批判を前提とす

る自虐的な行為で、自己を客観的に判断する中立的な視座が要求される。病弱で南部の学校教育を受けなかったグラスゴウには、この南部を外側から見る視点が備わっていたのである。

第Ⅰ部の目的は、グラスゴウが近代思想や科学的合理性によって南部近代化を促すために、(疑似) 科学から派生する遺伝の概念を作品に取り入れ、南部に新しい価値観を取り入れようとしていたことを指摘することにある。封建的な因習が残る南部で、遺伝の謎にグラスゴウが強く興味を持っていた形跡を検証し、グラスゴウの中期以降の作品における遺伝表象を中心に作品を分析したい。

第1章 エレン・グラスゴウとダーウィニズム—『ヴァージニア』を中心に

はじめに

エレン・グラスゴウは19世紀末から20世紀前半にかけて活躍したアメリカ南部の女性作家で、伝統的な南部の価値観に疑問を抱き、新しい南部女性像を探ることを小説のテーマにし続けた。1913年に出版された『ヴァージニア』の時代背景は南北戦争後19年経った1884年から1912年までであり、藤野早苗が指摘するように（藤野 180）、因習的な南部社会といえども、確実に近代化に向けて変化していく時代であった。この社会変革期に、旧南部社会の滅びゆく価値観と一人の女性の人生を重ね合わせており、作者が現実から目をそらさずに真実をありのままに描こうとしている意欲が感じられる作品となっている。また、作者自身、初めて自分で満足できる小説が書けたと述べている(*The Woman Within* 188)。

主人公のヴァージニア・ペンデルトン(Virginia Pendleton)はヴァージニア州の小さな町で牧師の娘として育てられ、ヴィクトリア朝時代の価値観の下、従順で自己犠牲を惜しまない女性に育てられる。その町にオリヴァー・トレッドウェル(Oliver Treadwell)という若者が帰ってきて、すぐにヴァージニアと恋に落ちる。オリヴァーの叔父はこの町でタバコ会社と鉄道会社を経営し、南北戦争後に台頭する物質主義を体現する人物である。オリヴァーは両親と共にオーストラリアで成長したが、ドイツの大学を中退して、劇作家になることを夢見ていた。しかし、ヴァージニアと結婚するために夢を後回しにして、意に沿わない職につかなければならなくなり、家族を養いながら芝居を書き続ける道を選択する。その後、失敗を乗り越え、ついにオリヴァーが劇作家として成功を収めた時、ヴァージニアは生活に追われ、色あせた面白味のない人間になっていた。最後には、夫は恋に落ちた女優のもとへ去り、ヴァージニアは夫と別れると同時に、自分自身の生きがいもすべて無くし、虚しさのあまり精神的に不安定な状態に陥る。

この作品にはプロット、人物描写、背景など、至るところにダーウィニズムの影響を見ることができる。作者グラスゴウは幼少期より病弱であったため学校に通うことなく、小説の題材にする知識は主に読書から得ていた。南部の学校教育を受けなかったこともダーウィニズムに抵抗がなかった理由の一つであると思われる。1954年、グラスゴウの死後に出版された自伝『内なる女』(*The Woman Within*)にはダーウィンやジークムント・フロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)に関する記述もあり、伝統的な価値観を持

つ南部人には受け入れ難いような新しい知識を積極的に取り入れていた様子がわかる¹。また、この自伝の中でグラスゴウは、ロマンティックな物語には興味がなく、真実を忠実に描きたいと次のように語っている。

I would write, I resolved, as no Southerner had ever written, of the universal human chords beneath the superficial variations of scene and character. I would write of all the harsher realities beneath manners, beneath social customs, beneath the poetry of the past, and the romantic nostalgia of the present. I would write of an outcast, of an illegitimate “poor white,” of a thinker, and a radical socialist. I would take as my theme those ugly aspects of life the sentimentalists passed over. (*The Woman Within* 98)

このような現実を直視しようとする姿勢、リアリズムの手法を小説に取り入れようという意気込みは『ヴァージニア』の中でも随所に見ることができる。相本資子が『エレン・グラスゴウの小説群』で指摘しているように、『ヴァージニア』によって、グラスゴウは南部ロマンスと決別し、リアリストとしての作家の立場を固めたと考えられている。そして、グラスゴウがダーウィニズムを積極的に取り入れた理由も、現実がいかに残酷であったとしても真実を伝えたいという気持ちの表れであったと考えられる。

さらに、小説が書かれた当時の社会的背景に目を向けると、アメリカ史の研究者リチャード・ホフスタッターが述べるとおり、1859年『種の起源』の出版によってダーウィンの進化論が世界中の人々に衝撃を与えており、19世紀末から20世紀初頭にかけては特にアメリカで強い影響を及ぼした。ダーウィニズムは旧来の信仰や哲学をも粉砕するほど重大な影響を与えた科学上の発見であり、当然、当時の小説家にも多大な影響を与えた。グラスゴウにとっても、ダーウィニズムは自然の法則の作用にもてあそばれる人間の悲劇を描くために格好の道具であった。つまり、南部が戦争に負けた理由は、南部人の能力が劣っていたからというよりも、古くからの慣習に縛られすぎて新しい考えを受け入れられない体質になっていたため、変化する社会環境に適応できなかったのだという考え方が表れている。

本章では、ダーウィニズムに関連する思想が『ヴァージニア』にどのように表象されているか具体的に考察していきたい。グラスゴウとダーウィニズムの影響というテーマでは、すでにJ.R.レイパーの先行研究において、グラスゴウの初期の作品について研究

されている。本章では、ダーウィニズムの影響は初期の作品だけでなく、中期の作品である『ヴァージニア』にも明白に表れていることを指摘したい。

結婚と野生の本能

まずダーウィンの『種の起源』がテキストで直接、紹介されている場面から見ていきたい。“It was a quarter of a century since ‘The Origin of Species’ had changed the course of the world’s thought, yet it had never reached them (11).” ここでは、ディンウィッディーの町の人々が進化論を知らないという点から、時代に取り残されている様子を読者に伝えようとしている。グラスゴウがこの町について語る時には必ずと言っていいほど、このような皮肉を交えた表現が使用される。また、小説の中の人々の態度と同様に、敬虔なクリスチャンであったグラスゴウの父親は、進化論は聖書の教えに背く考え方であるとして、『種の起源』を厳しく批判していた。もともとグラスゴウは父親とそりが合わず、自伝でも折に触れて非難していたので、ダーウィニズムを援用した理由には父親に対する反発もあったようである²。

さらに、ヴァージニアとオリヴァーの知的レベルに大きな差があることを述べるためにも、『種の起源』が使われている。二人の本棚にどういった本が並んでいるかを描写している場面を以下に引用する。まず、ヴァージニアの部屋にある本棚から見てみたい。

The poems of Mrs. Hemans and of Adelaide Anne Procter, a carefully expurgated edition of Shakespeare, with an inscription in the rector’s handwriting on the flyleaf; Miss Strickland’s “Lives of the Queens of England”; and several works of fiction belonging to the class which Mrs. Pendleton vaguely characterized as “sweet stories.” . . . “Thaddeus of Warsaw,” . . . “The Heir of Redclyffe,” and a romance or two by obscure but innocuous authors. . . . The sacred shelves of that bookcase . . . had never suffered the contaminating presence of realism. (*Virginia* 40)

ヴァージニアの本棚には両親から読むことを許可されたロマンティックな本ばかりが並んでいて、「リアリズムで毒されることはない」という作者の皮肉がきいている。ここで言及されている作家達の幾人かについて少し触れたい。アデレイド・アン・プロクター(Adelaide Anne Procter)は19世紀中葉に活躍した英国女性詩人で社会活動家であっ

た。当時、大変な人気を博し、ヴィクトリア女王のお気に入りの詩人であった。ホームレスの救済など、社会活動をテーマとし、センチメンタルなトーンの詩を書いている。アグネス・ストリックランド(Agnes Strickland)の『イギリス女王物語』(“Lives of the Queens of England”)は、1066年のノルマン征服以降のイギリスの女王を、姉のエリザベスと共に歴史風に綴った読み物である。これらの作家の手による読み物はセンチメンタルなトーンで書かれており、読んでも人生を変えるほどの影響力や洞察力を養うことができないとグラスゴウは考えている。

一方、オリヴァーの本棚については、次のように描かれている。“It was while he stood still undecided whether to place ‘The Origin of Species’ or ‘Critique of Pure Reason’ on the end nearest his bed, that a knock came at his door, . . . (102)” ここでは、ダーウィンの進化論とカントの哲学書『純粋理性批判』を挙げることで、オリヴァーが幅広い分野から新しい知識を取り入れつつ、自分の生き方に大きく影響するような思想を読書から吸収していることがわかる。どちらをより自分のベッドに近いところに配置するか迷う場面は、どちらの思想により共感しているかというオリヴァーの態度の現れである。

オリヴァーとヴァージニアの本棚を観察してみると、二人の間の知的な溝は大きく、興味の対象も全く異なることが見えてくる。ヴァージニアの本棚は両親によってコントロールされ、娘は両親の価値観を疑うことなく受け継ぐように育てられていたのに対し、オリヴァーは世間で論争を巻き起こす危険な知識とも言うべき進化論に触れることができ、芸術家として大成するための重要な基盤を構築する読書を重ねていたのである。

オーストラリアで育った彼にとっては、自己の体験を通して、有袋類などのその地方独特の進化を遂げた生き物には馴染みがあり進化論を受け入れやすい背景があったのかもしれない。また、当時、最先端の学問研究の場であったドイツで大学生活を送ったことも、彼の見識を広げたにちがいない。『種の起源』がオリヴァーの愛読書として用いられているということは、オリヴァーは南部の田舎町にいても周囲の人々に影響されず、良いと信じるものを取り入れることができる芯の強い性格であり、また自分の見識眼に自信を持っていることを意味している。

このように育ってきた環境が全く違う二人が、ほとんど一目ぼれで恋に落ち、結婚を決めてしまうところに読者は疑問を感じるかもしれない。しかし、時に理性よりも動物の本能の方が人間を強力に支配することがあり、そういった本能によって自分ではどうしようもないところへと向かうことになる人間の無力さが、この結婚には表現されてい

るのではないだろうか。動物の本能によって自分の意志とは違うところへ導かれてしまうという自然主義的な展開は、人間は動物から進化したのであり、動物と人間は繋がっているという進化論に根差しており、しばしばこの作品で見ることができる。

He felt it like a hot wind blowing over him, and it seemed to him that he was as helpless as a leaf in the current of this wind which was sweeping him onward. Something older than his will was driving him; and this something had come to him from out the twilight, where the mimosa-tree dropped like a veil against the afterglow. (*Virginia* 136-7)

ヴァージニアに対する気持ちを、オリヴァーはどうすることもできず、ただ木の葉のように風の流に身をゆだねるしかないと感じている。その理性を失った姿は、恋愛という甘美で懐かしい夕闇に抱かれながら、オリヴァーが動物へ先祖返りしていることを示唆している。

貧しい生活をしようとも劇作家としての創作活動を優先したいと考えていたオリヴァーであったが、ヴァージニアとの出会いによって理性的な判断ができなくなってしまった。ヴァージニアと結婚することは、理想とする自分の姿から遠ざかることを意味しているが、自分の意志よりももっと古くから人間に備わっているもの、つまり野生の本能が理性的な自己コントロールを不能にしているという状態にオリヴァーが陥っているのである。

『ヴァージニア』の中で、野生の本能によって理性が失われる状況は、このように恋愛に関して激しい感情を抱く時にしばしば現われる。ヴァージニアが理性を失う場合は、オリヴァーと女友達仲良くしていることを目撃し、嫉妬する際に見ることができる。

A pain as sharp as if the teeth of a beast had fastened in her heart, pierced Virginia while she stood there, barring the door with her hands. Her peace, which had seemed indestructible a moment ago, was shattered by a sensation of violent anger—not against Abby, not against Oliver, not even against the gossiping old women of Dinwiddie—but against her own blindness, her own inconceivable folly! At the moment the civilization of centuries was stripped from her, and she was as simple and as primitive as a female of the jungle. . . . Not Virginia, but the primitive woman in her blood, shrieked out in

protest as she saw her hold on her mate threatened. (*Virginia* 234-5)

人間は何世紀も文明を築いてきたのにもかかわらず、嫉妬によって単純で原始的なジャングルの雌猿のような動物に逆戻りしてしまい、感情がコントロールできなくなる状態になる。先ほどのオリヴァーの場合同様、激しい感情を抱く時、人は動物に先祖返りするという考え方には、人間の祖先は動物であるという進化論の影響を見ることができ、人間は動物の本能も受け継いでいるという考え方が表れている。

このように、祖先から子孫へ性質が受け継がれていくという遺伝の描写については、動物的本能だけでなく、人間の外見的な特徴も含まれている。グラスゴウは登場人物の外見はその人物の内面を暗示していると設定しているが、そのアイディアの根源はやはりダーウィニズムである。この点に関して、J.R. レイパーは *Without Shelter* の中で、1897年に出版されたグラスゴウの処女作『後裔』(*The Descendant: A Novel*)などからいくつかの例を提示している。

例えば額の広い人物は、天才の素質を持つように設定されているが、これは人間と動物の頭蓋骨の大きさの違いは、思考力の違いを表しているというダーウィンの説から援用されたと考えられる(Raper 68)。また、登場人物の顎が短い人は禁欲的であることを示唆し、逆に顎が大きい人は快楽を追い求めるタイプのように描かれているが、これもまたダーウィンの、人間は直立歩行に至った際に犬歯を喪失し、動物よりも顎が小さくなったという説から来ているとレイパーは考えている(69)。グラスゴウの小説の中で、顎の小ささは人間がどれだけ動物から進化したかを物語るバロメーターとなっているのである。

これは19世紀後半、人体測定学という人類学の一領域が熱心に研究されていたことに影響されている。米本昌平は当時の人類学者たちが注目したのは脳の大きさと並行関係にある顔面角であり、顔面角の立ち上がりが進化の基準であり、それぞれの人種の知能発達の程度を示す科学的根拠とみなされたと指摘している(米本 21)。また、丹治愛は特にこのような頭部の測定に関して頭蓋計測学が人体測定学から派生し、19世紀の科学として認知されていたと述べている(『神を殺した男』 203-5)。

同様に、生まれつきの外見的特徴を一族の徴とみなす場面も『ヴァージニア』に登場する。オリヴァーはトレッドウェル家の特徴として高くて少し曲がった鼻をしている。また、金持ちで打算的なサイラスに嫁いだ妻にとっては、自分の唇が薄いことがプライ

ドのよりどころとなっている。

And she who had been a Bolingbroke set her thin lips together with the only consciousness of superiority to her husband that she had ever known—the secret consciousness that she was better born (*Virginia* 71).

彼女にとっては昔、実家が裕福であったことを示すものは、今となっては一族の薄い唇しか残されていない。遺伝によって身体に刻まれた特徴にしかプライドを持ってない彼女は、南部没落貴族のノスタルジーを体現している人物と言えるであろう。

遺伝としての伝統的価値観

グラスゴウは遺伝に関して、身体的な特徴だけでなく考え方や価値観も先祖から受け継がれていることを強調している。例えば、オリヴァーがヴァージニアを結婚相手として選んだのは先祖代々受け継がれてきた価値観の影響によるもので、オリヴァー自身その選択が間違っていたと気がついた時にはすでに手遅れであった。

His ideal woman still corresponded to the type which he had chosen for his mate; for true womanliness was inseparably associated in his mind with those qualities which had awakened for generations the impulse of sexual selection in the men of his race. Though he enjoyed Abby, he refused stubbornly to admire her, since evolution, which moves rapidly in the development of the social activities, had left his imagination still sacredly cherishing the convention of the jungle in the matter of sex. (*Virginia* 230-1)

従順で忍耐強い女性を妻にしたいという価値基準は、トレッドウェル家の男性に何世代にもわたって受け継がれており、進化論を受け入れたオリヴァーでさえその伝統的価値観から逃れることができなかった。ここでは、オリヴァーとヴァージニアの関係は、彼らの個人的な事柄として表現されているものの、同時に祖先からの考え方も映し出していると作者はとらえているのである。ジャングルというのは文明が築かれる前の野生状態の総称として使われていて、こと性に関してはオリヴァーの考え方も動物から進化していないことが揶揄されている。何世代にもわたって理想的女性像が受け継がれてきた

中で、オリヴァーはヴァージニアの中にその理想像を重ね、不思議なほどすぐに結婚を決めてしまう。しかし、オリヴァーとヴァージニアの結婚という個人的な事象は、実は祖先からの考えが受け継がれて表れてきた一つの例にすぎないことを作者は暗に述べている。そして、身体的な遺伝同様、昔から受け継がれてきた価値基準が現在の人間を支配しているとグラスゴウは考えているのである。

とりわけ、時代にそぐわなくなった慣習が忠実に受け継がれていった場合、個人の努力ではどうしようもなく、思わぬ方向へ流されていくことが強調されている。

... a capacity for self-sacrifice which had made the South a nation of political martyrs; complacency, exaltation, narrowness of vision, and uncompromising devotion to an ideal—these were the qualities which had passed from the race in to the individual and through the individual again back into the very blood and the fibre of the race. (*Virginia* 99-100)

自己犠牲が美化され、見識の狭さや理想への固執といった性質が何世代にも渡って増幅され、南部は競争力を失い、戦争に敗北したのであると作者は語っている。ここでも、個人的な判断というのは実は先祖から受け継がれてきた思想に起因する。ヴァージニアが南部で理想とされてきた女性像に自らを近づけようと努力すればするほど、彼女の見識が狭くなり、夫の気持ちが離れていくという皮肉な状態に陥る。このような負のスパイラルに飲み込まれてしまった個人は、自助努力だけではそこから抜け出せない。

ヴァージニアも限りなく自己犠牲を己に課した結果、破滅への道をたどることになる。これは、ヴァージニアが夫の芝居を見物するためにニューヨークに滞在し、ホテルの窓から人々の往来を見ている時の一場面である。街を行きかう人々が楽しげに見え、思わず自分の質素な身なりを恥ずかしく思っているところに、有名になったオリヴァーが向こうからやって来る。

Then a voice beyond the palm spoke as distinctly as if the words were uttered into her ear. “That’s Treadwell over there—a good-looking man, isn’t he?—but have you seen the dowdy, middle-aged woman he is married to? It’s a pity that all great men marry young; and now they say, you know, that he is madly in love with Margaret

Oldcastle—” (Virginia 356)

ここで、オリヴァーに愛人がいるという衝撃的な噂が耳に入るが、本人にその真相を確かめることすらできないヴァージニアであった。結局、その噂は真実であり、ヴァージニアはニューヨークで活躍する女優に夫をとられてしまう。これはヴァージニアが南部を体現した女性であり、南部が北部に敗北したことを暗示している。そして、旧南部の価値観同様に、これからの時代、ヴァージニアのような女性像は消えゆく運命にあることを示唆している。何世代にもわたって受け継がれてきた価値観は、ヴァージニアの、そして旧南部の敗北によって決定的に無意味なものにされてしまったという悲劇がここには描かれているのである。

グラスゴウは自分の小説につけた序論をまとめて『ある尺度』(*A Certain Measure*)を出版しているが、『ヴァージニア』については南部女性やヴィクトリア朝の伝統に皮肉を込めて書こうと思っていたようだが、書き進むうちにヴァージニアの純粋な善良さに共感を覚え、皮肉のトーンが薄らいでいったと語っている(79)。

この小説では、ヴァージニアという一人の女性の結婚生活が崩壊していく様子を詳細に叙述しながら、ヴァージニアを旧南部の価値観を体現する者として描き、旧南部の敗北は南部的価値観が時代に合わなくなったためであるという作者の考えが根底に流れている。ヴァージニアの結婚生活が破綻した原因は、彼女の人柄や努力不足のためではなく、古い伝統や慣習に縛られていたため新しい社会環境の不適合者となってしまったのである。時間の経過とともに生ずる環境の変化についていけない者は、自然に淘汰されるというダーウィニズムの考え方は、ヴァージニアや旧南部が敗北に至った理由に当てはまるようにグラスゴウには感じられた。グラスゴウはダーウィニズムを取り入れることで、小説に科学的客観性を持たせることができ、ヴァージニアの悲劇は来るべくして来たのであるという因果律を当時の読者が納得できるような仕組みを作り出した。

フランチェスカ・サワヤ(Francesca Sawaya)が指摘するように、『ヴァージニア』にはセンチメンタリズムと自然主義の相克が見られるが、これはちょうどグラスゴウが従来手法から脱却しようとする過渡期を映し出しているからであろう。最終的にサワヤが『ヴァージニア』は自然主義文学であると認めたように、自然やその法則の作用、遺伝と社会環境の影響下にある人間の真実を描こうとしたグラスゴウは、『ヴァージニア』によって自然主義の作家の地位を確立したのである。

おわりに

『ヴァージニア』はグラスゴウの19作品中12番目に出版された作品なので、中期の作品と考えることができるが、前述のJ.R.レイパーが指摘する初期の作品同様、中期の作品にもダーウィニズムの影響がはっきりと表れている。

このように、グラスゴウがダーウィンを敬愛していた様子は作品からもよく理解できるが、実生活においてもその傾倒ぶりを見ることができる。イギリスを観光していたときには、グラスゴウはダーウィンの墓参りをしている。その時のエピソードが前述の彼女の自伝に見ることができる。

... “I suppose, like all other Americans, you have been to Westminster Abbey, to lay a rose on Chaucer’s tomb?” When I replied, innocently, that I had taken a rose to Westminster Abbey, but it was for the grave of Charles Darwin, he appeared interested, and before leaving, he came back to talk to me once again. (*The Woman Within* 120)

「他のアメリカ人同様、チョーサーの墓にバラを供えるためにウェストミンスター寺院に行ったのでしょう」と尋ねてきたこの男性は、ダーウィンの長男であることが後からわかり、グラスゴウは自分の認識不足を恥じたと誇らしげに自伝に書いている(*The Woman Within* 120)。

グラスゴウにとってダーウィニズムは家庭小説から自然主義的社会小説へ展開するための基本概念であると同時に、新しい考え方を広めようとした勇氣ある行動の象徴でもあった。論争を巻き起こすような思想を世間に知らしめる勇氣をグラスゴウは高く評価し、作家として自分もそのような勇氣を持ちたいと思っていたことが、彼女の作品から読み取れる。

しかし、汎用性の高いダーウィニズムは、人間社会にも広く適用できる法則であると考えられ、社会ダーウィニズムとして人種差別や帝国主義の論拠として用いられるようになったことから、当時、作家の中でも賛否両論あった。社会運動家として有名な『黄色い壁紙』(*The Yellow Wall-Paper*)の作者シャーロット・パーキンス・ギルマン(Charlotte Perkins Gilman, 1860-1935)は、ダーウィニズムを家事労働の産業化に援用しつつも(ラセット 24)、社会的不適合者を排除することは人道主義的立場から反対していた(Hofstadter

254)。このように当時からダーウィニズム、ひいては社会ダーウィニズムは、どのように持論の展開に利用するかによって広く援用され議論を巻き起こしていたが、グラスゴウは新しい時代に合った小説の形を創造するためにダーウィニズムを利用し、作家としての先駆性を示した。

環境に適応できる個体が生き残り、不適合者の子孫は死に絶えていくというダーウィニズムは、敗者にとっては冷徹な自然の法則であった。そのダーウィニズムをあえて敗者である南部の文学に取り入れる試みは、南部作家にとって自虐的ともいえるほどの重い決断であったに違いない。それでもグラスゴウがダーウィニズムを取り込んだことは、グラスゴウの父親のように古い価値観に囚われている人々に対する挑発であったばかりではなく、家庭小説の領域に閉じ込められがちだった女性作家の立場を解放する試みでもあったのである。

富山太佳夫によると、ヴィクトリア朝時代の「家庭の天使」といった文化のイデオロギーと同様に、人体測定学、頭蓋計測学などの当時の最先端の生物科学も性差を強調することで女性を囲い込む役割を果たしたが、やがて内部崩壊をしてゆくことになったと論じている(『おサル系の系譜学』281)。しかしながら、グラスゴウは当初から生物科学的な決定論の枠の中に囚われることに抵抗し、作家として自己をそこから解放するための装置として逆にダーウィニズムを利用し、生物科学を根拠として広まっていた女性像の内部崩壊を促し続けたのである。

第2章 不幸な結婚は遺伝するのか？—『人生とガブリエラ』より

はじめに

1913年に出版された『ヴァージニア』はエレン・グラスゴウの長編小説の中で自然主義文学の傾向の強い小説として評価が高い作品であるが、その次に出版された『人生とガブリエラ』はそれほど注目されてこなかった作品である。1916年に出版されたこの作品にも『ヴァージニア』同様、自然主義的決定論の影がヒロインを苦境に陥れているが、『ヴァージニア』に比べると全体的に明るい色調の小説に仕上がっている。その主な原因は、自由意思が決定論を覆そうとするアメリカ的な自己信頼の息吹を感じることができるからであろう。

20世紀初頭のアメリカではダーウィンの進化論を直接社会に適用した社会進化論が広まっており、強者、社会に適合した者が勝ち残っていくのは、社会進化の当然の結果で、富める者と貧しい者が生じるのも自然の摂理であるという考え方が広く浸透していた(猿谷 153)。このような資本主義が爛熟した時代に、グラスゴウのように社会進化論を取り入れながら敗者の苦しみに脚光を当てつつも、自由意思によって人生を切り開いていく展開の小説を書いたことは、市井の人びとの生活に寄り添いたいという気持ちの表れであろう。本章では、グラスゴウが『人生とガブリエラ』において社会進化論を取り入れながらも、自然主義的決定論と自由意思の力関係のバランスを取ろうと配慮した点に注目して小説の分析を行いたい。

遺伝という呪縛

ヴァージニア州の田舎町でガブリエラ・カー(Gabriella Carr)は、父を早くに亡くした後、母や近所に住む姉らとつましい暮らしをしている。しかし、親戚から施しをうける生活を疎ましく思い始め、ガブリエラは経済的自立をすべく仕事に就く決断をする。そういった彼女の思いは、「レディらしくない」と非難され、周囲の人々から受け入れられず、結婚まで考えていたアーサー・ペイトン(Arthur Payton)にも理解されない。このことからアーサーとは溝ができ、別離を決心する。そのような時、ニューヨークから来たジョージ・ファウラー(George Fowler)と出会い、恋に落ちてすぐに結婚する。新婚生活はジョージの両親が住むニューヨークで始まるが、ガブリエラはすぐにジョージはい加減な性格で、金銭面でも親に頼りっきりのわがままで頼りにならない伴侶だと気づ

く。子供が2人生まれた後も、ジョージには生活感がなく、ついにはガブリエラの知り合いの女性フローリィと駆け落ちしてしまい、ガブリエラは27歳で離婚を余儀なくされる。その後の孤独な努力の末、ガブリエラは帽子屋の事業を成功させ、同じアパートの1階に住んでいる西部で事業を成功させたベン・オハラ(Ben O'Hara)と出会い、38歳で彼と共に生きていくことを決意するところで物語は終わっている。

前述の通り、この物語が描かれた時代にはすでに社会進化論がアメリカに浸透した後であったため、小説にも進化論的な社会文化的言説を随所に見ることができる。まず、この小説で唯一、ダーウィンの名前が直接引用されている箇所を見てみたい。グラスゴウが古いタイプの南部人のことを、ダーウィンを無理解であり文明に背を向けていると批判しているが、これはダーウィンを小説で登場させるときのグラスゴウの常套手段である。例えば、バフィントンという南北戦争で活躍した老大佐のことを以下のように説明している。

Social movements and the development of civilization interested him as little as did art or science—for which he entertained a chronic suspicion due to the indiscretions of Darwin. Change of any kind was repugnant to his deeper instincts, and of all changes the ones relating to the habits of women appeared to him to interfere most unwarrantably with the Creator's original plan (*Life and Gabriella* 84).

バフィントン大佐にとってダーウィンの進化論は軽はずみな考え方にすぎず、芸術や科学といった文明の発展には興味がなかった。そればかりか彼の本能はいかなる変化も受け入れられず、特に女性の変化は最も神の教えに背くことだと考えていると、グラスゴウは皮肉を込めて書いている。彼は伝統的価値観から逃れることのできない古いタイプの人間であり、やがては淘汰され消えゆく運命にあることが暗示されている。グラスゴウにとって、ダーウィニズムは、その人物が新しい価値観を受け入れられる柔軟性を持つ性質か否かを判断する試金石になっているのである。

ダーウィンの名前が直接言及されない場合でも、ダーウィニズム、またダーウィニズムまたは社会ダーウィニズムの思想はこの小説の基底に流れている。何度も繰り返されるガブリエラの母親、カー夫人の嘆きの言葉はそれを例証している。

... “I am tempted to hope Gabriella will never marry. The Carrs all marry so badly!”
Why had those words come back to her to-night? She had not remembered them for months, she had even forgotten that she had heard them, and now they floated to her as clearly as if they had been spoken aloud. (*Life and Gabriella* 89)

カー家の人間は不幸な結婚をすることが運命づけられているので、ガブリエラには結婚してほしくないとカー夫人は叫ぶが、彼女にとってはそう信じるに足る証拠がいくつもあった。ガブリエラの兄トムが結婚して6カ月後、彼の新妻が精神錯乱に陥った。また、ガブリエラの姉ジョハンナは恋に破れて死んでしまった。さらに、二人目の姉ジェーンもチャーリーという冷たい男と結婚したストレスから喘息の発作を頻発し、命の危機に直面することさえあった。このような身内におこる不幸を、カー夫人はカー家の遺伝的な弱さと考えるようになったが、彼女の呪文のようなこの嘆きを毎日聞かされて育ったガブリエラは、ジョージと結婚した後も常に母の言葉が脳裏をよぎった。

Remembering Jane, remembering the hereditary weakness of the Carrs, who had all married badly, she [Gabriella] told herself that in hardness lay her solitary refuge from despair. After all, it was better to be hard than to break. (*Life and Gabriella* 100)

結婚がうまくいかない宿命は、容姿の特徴と同じようにカー家の人間に遺伝しており、その絶望から逃れるには感情を持たないことだとガブリエラは自分に言い聞かせる。遺伝によって受け継がれた資質は変えることができないという無力感がにじみ出ている。ジョージとの間に二人の子供を産んだガブリエラであったが、二人の関係はますます冷え込み、夫は他の女性と遊び歩いて、酒に酔って深夜に帰宅することが多くなった。このような娘夫婦を見て、カー夫人の嘆きは続く。

Yes, the Carrs had all married badly, reflected Mrs. Carr, with the grief of a mother and the pride of a philosopher whose favorite theory has been substantially verified—every one of them, with, of course, the solitary exception of poor Gabriel himself. (*Life and Gabriella* 121)

不幸な結婚はカー家の遺伝的な弱さに起因するものなので、血縁者はこの呪縛から逃れることのできない定めを背負っているとカー夫人は考えるが、この遺伝決定論を受け入れることは、カー夫人にとってある意味、精神的な救済になっていた。カー夫人が母親として子供達の人生に責任があるということ、しかしその責任を果たすことができなかつたという非難をそらすことができるばかりでなく、自分もまた「血」の犠牲者という立場に逃げ込むことができたからである。

しかし、彼女がこのように考えるようになったのは、人間は体格や容姿だけではなく、考え方や価値観までも遺伝によって先祖から受け継がれていっているという社会文化的な言説が背景にあった。富山太佳夫がオスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)の「想像力というのは遺伝の産物なんだ」という言葉を紹介しているが(『ダーウィンの世紀末』 153)、想像力といった個人的と思われる能力でさえ祖先の経験が伝達されてきたものであると信じられるほど、欧米でのダーウィニズムの影響力はすさまじいものがあつた。イギリスで「想像力を遺伝の問題としてとらえるということは決して奇異ではなかつた」(『ダーウィンの世紀末』 154)というほど、生理学的な心身一元論が力を得ていた。想像力が遺伝するのであれば、不幸な結婚が遺伝するとカー夫人が考えることにも当時の読者には信憑性があつたのである¹。

生来性犯罪者説の文学への影響

身体と精神の相関関係を探るべく、19世紀前半の学者たちはフランツ・ヨーゼフ・ガル(Franz Joseph Gall, 1758-1828)の骨相学をきっかけにして、歴史的人物の頭蓋骨を様々な角度から測定し、数多くの脳髓を蒐集し、重さを測った。また、犯罪者になりうる性向までが遺伝的に決定されているというイタリアのチェーザレ・ロンブローゾ(Cesare Lombroso, 1835-1909)による生来性犯罪者説も19世紀末に盛んに議論されていた(ダルモン 1-4)。このように、生物学的な決定論が個人の努力など後天的要素よりも重要視される傾向にあつた時代の根源には進化論から派生した疑似科学が影響しており、汎用性の高さからあらゆる方面に重大な影響力を与えていたのである。現在の視点から見ると違和感を覚えるような遺伝にまつわる言説も、当時としては最新科学を取り入れた斬新な手法として作家たちに受け入れられていた。

グラスゴウも容姿がその人物の内面を表すという心身一元論的考え方を小説に取り込んでおり、『人生とガブリエラ』に登場する初老の男性クロウボロー判事を次のよう

に描写している。

He was a tall, florid man with an immense paunch flattened by artificial devices, and a vitality so excessive that it overflowed in numberless directions—in his hearty animal appetites, in his love of sports, in his delight in the theatre and literature, particularly in novels of the sentimental and romantic school, in his fondness for the lighter operas, and in his irrepressible admiration for pretty women. His face, large, ruddy, with a hooked nose, where the red was thickly veined with purple, and protruding lips over square yellow teeth that gripped like the teeth of a bulldog, aroused in Gabriella a quick repulsion which only the genial humour of his smile overcame. (*Life and Gabriella* 86)

赤紫のかぎ鼻、黄色いブルドッグのような歯が並んだ顔つき、内面的にも動物的で肉体的欲望が強い反面、愛想の良いユーモアのある人物として描かれている。ここでは彼の外見描写から、内面の性質を判断することができるように仕組みられている。『人生とガブリエラ』のこの後の展開で、クロウボロー判事は資金を援助する見返りをガブリエラに求めるが、ガブリエラは彼の手を振り払って申し出を断る。動物的な欲望の強い人物ながらも、困っている人を助けようという善意も併せ持つ性格ということであろうか。このように、クロウボロー判事の容姿の描写自体が、物語の展開を予兆する伏線の役割を果たしている。

ロンブローゾは、自分の論が小説の分野にインスピレーションを与えていて、バルザック(Balzac)、ドーテ(Daudet)、ゾラ(Zola)、ドストエフスキー(Dostoevsky)、イブセン(Ibsen)も犯罪者の性格を描くにあたって生来性犯罪者説を取り入れていると書いている(ダルモン 94)。また、河内清の解説によれば、自然主義の定義者と考えられているフランス人作家エミール・ゾラはロンブローゾの『犯罪的人間』を1888年頃に参照しており(ゾラ 494)、1890年に出版された『獣人』の主人公ジャック・ランチエは、ロンブローゾの生来性犯罪者論から抜け出したように見えるとダルモンは述べている(95-6)。彼は隔世遺伝の結果、破滅する運命を背負って生まれてきた人物として、生来性犯罪者説を人物描写にそのまま適用した人物として設定されている。反社会的な性質が遺伝するという設定には時代的な限界を感じざるを得ないが、遺伝の解明が進んでいなかった当時、作家たちが想像力を駆使して作品の創作にあたっていたことを物語るエピソード

としては意味がある。

不道德な性格が受け継がれていく例として、『人生とガブリエラ』ではガブリエラの夫ジョージと駆け落ちしたフローリィ (Florrie) をあげることができる。ゾラの『獣人』にはフロール(Flore)という似た名前の踏切番の娘が登場するが、それぞれの小説で与えられた役割は全く異なる。フローリィは母親から性的に奔放な性格を受け継いでおり、動物から人間への進化がうまくいかなかった例として描かれている。

... she could not deny that Florrie was vulgar. As a matter of fact, Florrie's mother had been vulgar before her, and the thin strain of refinement inherited from her father's stock had obviously been overborne by the torrential vulgarity of the maternal blood. (*Life and Gabriella* 125)

この引用からわかることは、母親から受け継いだ性質によって、フローリィは悪女になる傾向を生来的に受け継いでいたと性格付けされていることだ。

フローリィと一緒に駆け落ちした元夫のジョージは、結局、戻る家もなくなり、ひとりで街をさまよい歩き、惨めな状態でガブリエラに庇護を求めて死んでいった。それに対し、フローリィは若々しいまま、次々とパートナーを換えてさまよい歩く。ジョージが後天的に不道德な性質を身に付けた一方で、フローリィは悪事を恥じることができないという性格付けがなされていると考えられるであろう。以下の引用は、ジョージが自然淘汰によって病死し、男性が女性よりも弱い場合もあると指摘している。

... tradition was not always the mirror of life. For in this one case at least, the man, not the woman, had been the victim of natural law, and Florrie, fool though she was, had shown herself at the hour of requital to be stronger than fate. (*Life and Gabriella* 268)

夫であったジョージが失意の底で死んでいったのにもかかわらず、フローリィは何の報いも受けずに若々しく美しいまま、再びガブリエラの前に現れ、ガブリエラはやり切れない思いをする。フローリィの悪気のなさや鈍感な性質には、フローリィ自身もコントロールできずに振り回されている。

つまり、ジョージがアルコール中毒に苦しみ、雨でずぶ濡れになって街をさまよい歩

いた揚句、肺炎で惨めに死んでいったのは、彼に人間的な良心が宿っていたからであり、心の弱さのために転落の人生を送ってしまったとはいえ、悔悛の余地のある人物であったということであり、それに対しフローリィは周囲へ配慮する能力に欠け、それを反省し後悔する道徳観が育っていない先祖が動物であったところからの非理性的感覚がいまだに強く残っている人物として設定されている。

ナショナルリズムの萌芽

ジョージとの死別を乗り越え、ガブリエラは最初の恋人アーサーと人生を共に過ごしていればどうなっていたらと思うを巡らせる。彼とならヴァージニアで心穏やかに過ごせたに違いないと思い、18年ぶりにアーサーと対面する決意をする。穏やかなアーサーを思い出す時、ガブリエラは常にヒヤシンスの香りに包まれている。甘い花の香りはアーサーの面影と一体化し、彼との思い出は次の引用のように、ますます美化されていった。

Only on soft spring days, coming home in the dusk, she would sometimes pass carts filled with hyacinths, and in a wave the memory of Arthur and of her first love would rush over her. Then she would see Arthur's face, gentle, protective, tender, as it had looked on that last evening, and for an instant her lost girlhood and her girlhood's dream would envelop her like the fragrance of flowers. (*Life and Gabriella* 162)

ヒヤシンスはギリシャ神話の美青年の逸話で知られているかぐわしい花をつける植物であり、アーサーとの今後の恋愛がうまくいかない展開を暗示している。久しぶりにアーサーと2人の時間を過ごしたガブリエラは、初恋の思いは今となっては友愛に変わっていたことに気付き、過去の思い出と決別してアーサーは美しい思い出としてのみガブリエラの心に残り、それぞれが自分の道を歩むことになる。

結局、ガブリエラがこれからの人生を共に生きていこうと決める伴侶は、西部で事業を成功させたベン・オハラであった。カリフォルニアで金鉱が発見された後、1869年には最初の大陸横断鉄道が開通し、1890年の国勢調査でフロンティアは消滅したと宣言されるといったように、西部には一攫千金を狙って大勢の人々が詰めかけていた(猿谷 144)。オハラもその中の一人であり、鉱山と鉄道で成功した後、裕福な生活をニュ

ーヨークで送っている。“... he embodied, ... the triumphs and the failures of American democracy (*Life and Gabriella* 262)”と語られる通り、オハラはアメリカ民主主義の光と影を体現している。貧しい移民の子が一代で成功を成し遂げるというアメリカン・ドリームを実現させる一方、貧しい両親と早く死に別れ、家族に恵まれず孤独に闘ってきたという点で競争社会の犠牲者という一面も併せ持つ。

鉄道というモチーフは、ゾラの『獣人』の中でもまるで生きた動物のように躍動感を伴って描かれているが、科学技術の粋を集めて建設された鉄道は人間の知性や文明を象徴しており、当時の作家達のインスピレーションを刺激した。『人生とガブリエラ』では、鉄道事業成功の一角をオハラが担ってきたことは彼の度胸の良さや知性、また西部という未開の土地で頭角を現すことができる生命力の強さを物語っている。“Now for pure constructive imagination the North and South don't hold a candle—they simply don't hold a candle—to the West (*Life and Gabriella* 86).”とクロウボロー判事も認めるほど、西部は今や、北部や南部がとても及ばないほどの発展を遂げている。これは、北部で成長したジョージ、南部人のアーサーとの競争に勝ち、西部で成功したベン・オハラがやがてガブリエラの心を掴むという伏線であろう。自然淘汰の競争社会で、オハラは、そして西部は、生き残ることができた勝者であり、アメリカの成功を具現化した人物である。

アーサーの記憶がヒヤシンスの香りと繋がっているのに対して、オハラと過ごす時間はライラックの花の香りが満ちあふれている。初めての出会いも、ライラックの香りが漂う夕暮れであった。このように、それぞれの恋愛対象の男性を花の香りと結びつけて覚えていることによって、嗅覚が人間の動物的な本能を刺激するように設定されており、恋愛感情を目覚めさせ、ガブリエラを原始的な存在へと先祖返りするのを誘引している。このように、『人生とガブリエラ』においては嗅覚の果たす役割がヒロインの感情の高まりと関連づけられている。

グラスゴウの恋愛小説において、愛情や怒りなどの激しい感情によってヒロインが原始的な動物へ先祖返りすることはしばしば起こる。例えば、不意にオハラに触れた時にもその一例を見ることができる。“... she was primitive woman in the grip of primitive anger; and balance, moderation, restraint, had flown from her soul (*Life and Gabriella* 265).”オハラに対する怒りや恥ずかしさ、戸惑いで、原始時代の動物のようにヒロインが理性の欠如した状態になり、これから物語の展開で2人の間に何かが起こるという前兆が描かれている。

ベン・オハラは貧しいアイルランド系の移民の子として地下室で生まれ落ち、両親とも早くに死に別れ、幼いころから独力で生きてきた。一旗揚げようと西部へ行って成功したが、そこで知り合って結婚した女性はモルヒネ中毒であるとわかった。彼女を気の毒に思い、別れることができず、不幸な結婚生活は18年続いたことが彼の口から語られる。この女性は精神錯乱状態で入院を余儀なくされ、オハラが長年世話をして最期も見取った。ガブリエラが出会った時にはすでにその妻は他界していたが、この妻はグラスゴウが愛読していた『ジェーン・エア』(*Jane Eyre* 1847)に登場するバーサのように他者化された存在で、未知の荒野が立ちのぼる西部への不安や好奇心を体現している(*The Woman Within* x)。「彼女に落ち度はない。ただ弱かっただけだ」(*Life and Gabriella* 248)と語るオハラであるが、そこから見えてくるのは、強い肉食獣がジャングルで小型動物を食い殺すように、オハラの妻は気持ちの弱さのゆえに競争社会アメリカの犠牲者になってしまったということであり、西部とは人びとの欲望がうごめき、正体不明の者どうしが一攫千金を狙って競争する危険な場所だということを言外に含んでいる。

こういった競争社会の犠牲者にならないように強くなろうと、ガブリエラは繰り返し自分に言い聞かせる。その甲斐あってか、自助努力と才覚によって事業で成功への道が切り開かれていった。「楽な人生は送ってこなかった。生きるのが楽しいの。」(*Life and Gabriella* 177)とガブリエラが話すと、子供たちの病気を診てくれる親切なフレンチ医師は、ガブリエラを次のように称賛する。

“It is the true American spirit—optimism springing out of a struggle. Do you know you have always made me think of the American spirit at its best—of its unquenchable youth, its gallantry, its self-reliance—” (*Life and Gabriella* 177)

競争社会から生まれた楽観主義、それがアメリカ人の真の精神で、その最良の形をガブリエラが表象していると語っているが、この発話は作者がガブリエラをどのように描きたかったかを如実に物語っている。フレンチ医師の語る「永遠の若さ、勇敢さ、自己信頼」といった言葉は、ガブリエラの特徴であるばかりでなく、アメリカという国家そのものが目指す資質である。「私は幸せになりたいし、そうなる権利がある。でも幸せになるかどうかは私次第なのよ。」(*Life and Gabriella* 181)という自己信頼が前面に押し出される小説の結末では、ガブリエラの成功物語という枠を超えてアメリカという国家の

精神の健全性が称賛されており、20世紀初頭のナショナリズムの萌芽が映し出されている。

おわりに

『人生とガブリエラ』は、グラスゴウが愛読していた『ジェーン・エア』と同タイプの恋愛小説であり、どの男性と結婚するかということが最大のテーマとなっているが、グラスゴウのユニークさは、一度結婚に失敗した2人の子持ちのヒロインが再婚相手を見つけるまでを描いた点にある。相当な長さの紆余曲折を経て、数多くの失敗を乗り越え、それでも食欲に幸せを勝ち取っていくヒロイン、ガブリエラには『ヴァージニア』には無かった痛快さを感じることができる。19世紀の小説ではヒロインが誘惑されて捨てられた後は、自殺することになるなどといったヒロインの破滅で物語が終わることが多いが、ガブリエラは一人になった後も、力強く苦難を耐え抜き、大勢いる再婚候補者の中から吟味を重ねて相手を選ぶ。夫が他の女性と駆け落ちして離婚した後、ワーキングマザーとして子供達を立派に育て上げ、帽子屋の事業を成功させることによって自己信頼を再構築し、中年にさしかかっても新たな人生のパートナーを選択していく姿には、翻訳家の鴻巣友季子が世界文学史上最強の「肉食女子」と呼ぶ『風と共に去りぬ』(*Gone with the Wind*, 1936)のスカレット・オハラ(Scarlett O'Hara) (鴻巣 16)へと続くヒロイン像の原型を見ることができる。遺伝決定論を取り入れつつも、不幸な結婚を乗り越えていく力強いヒロインを描ききったことで、グラスゴウが創作手法を自然主義と自由意志のバランスをとる方向へ進んでいた足跡が、『人生とガブリエラ』には表れている。

『ヴァージニア』の出版年と『人生とガブリエラ』が出版された年の間で第一次世界大戦が勃発したという史実も、ヒロインが自立した強い性格に変わった理由のひとつである。1914年にヨーロッパで第一次大戦が開戦すると、アメリカは連合国側の兵器庫としての役割を果たし、国内の経済は戦争ブームで好況を続けることができた(猿谷 176)。アメリカの企業が莫大な利益をあげ、国力が飛躍的に伸び、国民も経済的繁栄を享受するようになった。また、他国との戦争によって国際的な視野が広がり、南部人、北部人などという国内の地域的気質よりも、アメリカ人としてのアイデンティティが国民の中に強く意識されるようになったのだろう。第一次大戦によってアメリカが世界の覇者として頭角を現していく国民的高揚感が、グラスゴウの『人生とガブリエラ』には

顕著に反映されているのである。

第3章 女たちの狂気は遺伝か環境か—『不毛の大地』より

はじめに

エレン・グラスゴウの19作品のうち14番目の小説、『不毛の大地』は1925年に出版され、南北戦争後のヴァージニア州の田舎町における市井の人々の生活を描いており、文学的価値だけでなく歴史を知る資料としても高い評価を受けてきた。スクーラ(Scura)によれば、グラスゴウは構想に7年、執筆に3年かけてこの小説を生みだし、自身の小説の中で最も好きな作品と評価している(“*Barren Ground: Ellen Glasgow’s Critical Arrival*” 550)。

小説の舞台はクイーン・エリザベス・カウンティという架空の郡に設定されているが、ヴァージニア州リッチモンドから西へ約50マイルにあるルイーザ・カウンティが実在のモデルである。そこはグラスゴウ家の避暑地であり、幼少時に家族で過ごした幸せな思い出のある、馴染みの深い土地であった(“*Barren Ground: Ellen Glasgow’s Critical Arrival*” 549)。

この小説が誕生した1920年代は、南部が遅れた地域として北部ジャーナリズムの餌食になっていた時代であった。ホブソンスによれば、KKK、ファンダメンタリズム等の反動勢力、伝染病の蔓延、紡績工場などにおける資本家による労働者の搾取などに対して、H. L. メンケンなど北部のジャーナリストから、南部は「文化のサハラ砂漠」(*Serpent in Eden* 3)とまで呼ばれ、揶揄されていた。

さらにまさに小説の出版年、1925年にはテネシー州デイトンで起こった州立高校における進化論教育の是非をめぐるスコープス裁判が全国の注目を浴び、進化論を授業に取り入れた教師に罰金刑が下ったことから、南部の後進性を浮き彫りにした(「農本主義者の敵たち」35)。メンケンはこの裁判を「猿裁判」(*Serpent in Eden* 148)と呼び、手厳しく批判したが、こういったジャーナリズムの南部攻撃がアレン・テイトなどを農本主義者へ転向させ、1930年に農本主義のマニフェスト『私の立場』(*I’ll Take My Stand*)を生みだし、南部回帰へと向かわせたと一般的に言われている¹。

このような中で、グラスゴウがダーウィニズムを小説に反映させたのは、南部の後進性に対する非難に対抗するためでもあり、また変化を避けようとする南部人への挑発でもあった。グラスゴウに初めてダーウィンを始めとするヴィクトリア朝の科学者の本を紹介したのは義理の兄ジョージ・ウォルター・マコーマック(George Walter McCormack)

であり、グラスゴウは『種の起源』の全ページについて、試験に合格できるほど繰り返し読んだ」(*The Woman Within* 88-9)と述べている²。

本章においては、『不毛の大地』の自然主義文学的要素を指摘することをおし、20世紀前半のアメリカ南部文学においてダーウィニズムから派生する思想の広がり、いかに広範に及んでいたかを考察したい。

女の運命が遺伝する

この小説においては、登場人物たちは容姿や性格だけでなく、運命までもが先祖から子孫へ遺伝しており、それぞれの人生において同様の悲劇的事件が繰り返されている。ドリンドの父はプアホワイトの出自で、母はスコッチ・アイリッシュの血を受け継いでいるが、二つの家系の血筋は「全く異なる人種のように計り知れないほど隔たって」(*Barren Ground* 45) おり、ドリンドは母方のスコッチ・アイリッシュ系の性質を継承していると設定されている。この母方の一族には、失恋のために狂気に取りつかれるものが何人も存在する。彼女たちは一様に失恋で自らの命を絶とうとするが、救出されて命が助かった後は、一見、平穏でありふれた人生を過ごし、情熱の焰は表面的には消えたように見える。ドリンドはこのような一族の女性たちの血を濃く受け継いでおり、彼女も恋愛の破綻によって人生が大きく変わってしまう運命から逃れられない。

『不毛の大地』において、このような悲恋の運命の源流をたどってみると、ドリンドから数えて4代さかのぼったアイルランドにいた曾祖父の妹でドリンドという同名の女性に行きつく。主人公の少女ドリンドは、この大叔母にちなんで名づけられている。この大叔母も若い頃に失恋し、用水路に身を投げて自殺未遂を凶ったが、その後は平凡な人生を全うした。同じ名前を持つこの二人の女性が、同じような失恋の苦痛を味わうことは、まるで同じ人間が何度も生まれ変わり、時代や場所が変わっても変化することなく、同じ人生を繰り返しているだけのように思われる。

さらに、ドリンド大叔母の妹アビゲイルも数回会っただけの男に失恋し、錯乱状態に陥り、家族によって座敷牢に閉じ込められていた。その後、回復して正気を取り戻したが、宣教師として外国へ渡ったと言われている。主人公ドリンドは、この大叔母たちのような激しい情熱を持つ自身の血筋に不安を抱き、暗い運命を払拭しようと懸命になる。

Yes, whatever happened, she resolved passionately, no man was going to spoil her life!

She could live without Jason; she could live without any man. The shadows of her great-aunts, Dorinda and Abigail, demented victims of love, stretched black and sinister, across the generations. In her recoil from an inherited frailty, she revolted, with characteristic energy, to the opposite extreme of frigid disdain. (*Barren Ground* 106)

一族の女たちに遺伝するといわれる精神的弱さに打ち勝つため、ドリンドラは明るく振る舞い、疑念を払拭しようとするのだった。

しかし、親族の女性の中でも、主人公ドリンドラの母ユードラ(Eudora)が最も抑圧された人生を送ってきたと言えるであろう。ユードラの祖父ジョン・カルヴィン・アバーネシー(John Calvin Abernethy)はアメリカに渡ったアイルランド移民の一世であり、ヴァージニアの大地を懸命に開墾することで、豊饒な農地を生み出した。曾祖父の息子は早死にし、一人娘であったユードラは厳格なプレスビテリアンであったこの祖父によって育てられ、祖父の影響を大きく受けた。ユードラが年頃になった時、宣教師のゴードン・ケイン(Gordon Kane)という若者に心ひかれるようになるが、これは、彼の宣教師という仕事にあこがれをもったのであり、ゴードンと結婚すれば宣教師の妻としてアフリカのコンゴで布教活動に従事できるという自己実現の可能性に夢中になったのである。

しかし、結婚前にゴードンは高熱により死んでしまう。コンゴでの布教活動中のことであった。ユードラのアフリカでの布教活動の夢は実現されることはなくなった。新しく縫われたウェディング・ドレスを手に、ゴードンの死を聞いたユードラは泣き崩れ、その後はより一層、宗教にのめり込むようになる。

ドリンドラの父ジョシュア(Joshua)と結婚した後も、ユードラのアフリカへのあこがれは消えることはなく、むしろますます強くなっていった。ユードラは欲望を無理やり抑圧しようとしたため、逆に無意識が病的なかたちをとって現われる。ついには激しい発作を起こして発狂し、生涯、神経症を病むことになる。ユードラが精神的に不安定な時、繰り返し襲い来るヴィジョンは、“... that dream about coral strands and palm trees and ancient rivers and naked black babies thrown to crocodiles (*Barren Ground* 123-4)”であり、ユードラにとって決まり切ったつまらない日常以上に重要な意味のあるものであった。コンゴへ渡航することがかなわず、田舎町の貧しい農家の妻として生涯を過ごしたが、臨終の床で現実の人生は無味乾燥な魂の抜け殻と化し、ただこの熱帯のヴィジョンとキリスト教への情熱だけが意味あるものになった。

Her old tropical dream came back to her; in her sleep she would ramble on about palm trees and crocodiles and ebony babies. “I declare, it seems just as if I’d been there,” she said one morning. “It’s queer how much more real dreams can be than the things you’re going through.” . . . Never once did she allude to anything that had occurred since her marriage, and she appeared to have forgotten that she had ever known Joshua.

The next afternoon she died in her sleep while Nathan was sitting beside her bed.
(*Barren Ground* 343)

それでは、死の床までユードラを捕えて離さないこのヴィジョンは、何を物語っているのでしょうか。未開地アフリカで原住民をキリスト教によって啓蒙したいという彼女の帝国主義的な眼差しが見つめていたものは、いったい何であったのだろうか。彼女は結局、実際にアフリカへ渡航することはできなかったため、限られた情報を恣意的に組み合わせアフリカ幻想を創作し続けた。その結果、この幻想にはかなりの混乱が見られるのである。

確かに、19世紀末のベルギー国王レオポルド二世によるコンゴに対する非道な搾取には、西欧諸国から非難の声が上がっていた。丹治によれば、「コンゴ自由国とはようするに、ゴムと象牙に富んだ、レオポルド二世の広大な私的領域にほかならず、そこでは原住民にたいする奴隷労働の強制、残虐な搾取がいささかの遠慮もなくおこなわれていた」(『神を殺した男』180)場所で、植民地支配がいかに残虐になりうるかを内外に示していた。レオポルド二世はアフリカを文明化するという啓蒙思想の口実の下、帝国主義的搾取を続けたが、彼の植民地を統治する権力はさらに社会ダーウィニズムによって科学的支持も与えられることになった。「最適者としてのヨーロッパ人が不適者としてのアフリカ人を力で支配し、ひいては抹殺することを正当化するための科学的理論」(『神を殺した男』181)として社会ダーウィニズムは機能したのである。

当時の文学作品において散見する人間の本性に潜む獣性は、ジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』(*Heart of Darkness*)を例として提示するまでもなく、多くの文学作品のサブテキストになっている。しかし、エドワード・サイード(Edward Said)が指摘する通り、コンラッドは、差別的に描かれていたアフリカ原住民やコンゴがいつか帝国主義支配から抜け出し、主権を主張する可能性があることを時代に先駆けて感じていた(Said 30)。

グラスゴウはコンラッドを同時代の作家として尊敬し、1914年にはイギリス、ケン
トに訪ねている(Goodman 130)。コンラッドの作品に精通していたグラスゴウは(*The
Woman Within* 200-1)、時代的な制約から完全に自由ではないものの、アフリカにおける
帝国支配やアメリカ南部の人種差別に対してコンラッド以上に批判的見解を備えてい
るのではないか。それを具体的に例証するために、『不毛の大地』におけるユードラの
ヴィジョンを考察したい。

混乱した黒人表象

ユードラのヴィジョンの中でも、啓蒙思想の理念と社会ダーウィニズムの理念が帝国
主義として結びあわせられ、「ワニに投げられた裸の黒人の赤ん坊」という人種差別的で
残虐な想像力をもたらしめている。ユードラは野蛮で未開の大地をキリスト教によって感
化しなければいけないという帝国主義的使命を感じているのである。しかし、ここで一
つの疑問を抱く。このような野蛮な風習が行われているのがアフリカだとユードラは考
えているのであろうが、いったい誰が何のために抵抗できない赤ん坊をワニに放り投げ
るのであろうか。

実は、彼女の空想はアフリカの現実を映しているものではない。黒人の赤ん坊がワニ
の餌になるというイメージは、20世紀初頭から1950年代まで、アメリカ各地で大量に
印刷された絵葉書に使われた黒人表象に関係していると考えられる。クローディア・ス
レイト(Claudia Slate)の調査によると、1897年にテネシー州のノックスビルで、アフリ
カ系アメリカ人の赤ん坊のリトグラフが絵葉書に使われ、“Alligator Bait”とタイトルを
付けられたのが始まりで、以降、多様なイメージに展開していった(Slate 92)。白人がワ
ニを銃で狩る時に、おびき寄せる餌としてアフリカ系アメリカ人の子供を使うというイ
ラストなど、このステレオタイプ化された黒人表象は、絵葉書上で繰り返し再生産され
た。これはリンチが南部で珍しくなかった時代に使われていた黒人表象であり、ワニに
襲われている黒人が命懸けで逃げようとしている場面を切り取り、無力で滑稽な存在と
して白人の笑いを誘うように仕組まれている。

アメリカの絵葉書は、1893年のシカゴ万国博覧会において初めて販売されたが、1
セントで送ることができる手軽さから、例えば1907年から1908年の1年間には6億枚
郵送され、国民一人当たり7枚ずつ出した計算になる(Slate 92)。この残酷な絵葉書を買
うのは白人観光客で、ワニの生息地であるフロリダなど南部では人気の土産物であった。

ちょうどこの頃、フロリダの白人は、アフリカ系アメリカ人が社会に進出し、仕事を奪うのではないかと懸念していて、1882年から1950年の間、タスキーギ・インスティテュートの記録では257件のリンチ事件が発生していた(Slate 98)。つまり、この絵葉書は単に白人がアフリカ系アメリカ人をステレオタイプ化して物笑いの種にするためだけでなく、アフリカ系アメリカ人に対する恐れや憎しみを込めた悪意のある攻撃であり、当時の南部に蔓延するあからさまな人種差別を浮き彫りにしている。alligator baitとは「黒人、または黒人の子供」を意味する俗語としてジーニアス英和大辞典やリーダーズ・プラスにも載っており、当時のアメリカでは誰でも知っているようなステレオタイプ化された黒人表象なのである。

『不毛の大地』に現われるユードラのヴィジョンは、一見、西欧のアフリカ小説にみられる白人の優位性と原住民の蔑視というサブテキストを表象しているように思われるが、実は彼女自身が住むアメリカ南部の野蛮さと自己欺瞞の記録であり、表面的に帝国主義的と思われたヴィジョンの真相はアメリカ南部に対する作者グラスゴウの批判になっている。つまりこのヴィジョンは、文明化されたアメリカ人というイメージを根底から覆し、アメリカからの白人植民者と被植民者であるアフリカ原住民の立場、ひいてはアフリカ系アメリカ人における優劣に攪乱を起こし、西洋と非西洋の権力関係を転覆させる可能性が仕込まれているのである。

時代に先駆けグラスゴウが人種問題を可視化させた痕跡は、この小説の他の黒人描写にも現れている。ユードラの死後、母や家族の支えを失った主人公ドリンダは独力で酪農経営に挑むが、その重労働を分かち合い、過酷な日常生活を共に過ごす同志はアフリカ系アメリカ人メイドのフラヴァンナ(Fluvanna)であった。ドリンダとフラヴァンナの女性同士の友情は白人の女主人とアフリカ系アメリカ人メイドという社会的役割を超越し、強い絆で結ばれていく。この二人の固い信頼関係には、人種という曖昧で矛盾に満ちた境界線によって定められた古い時代の制約を乗り越え、新たな時代を築いていこうというグラスゴウの決意が込められている。このようなグラスゴウの時代的制約への挑戦は小説内のみに限らず、自伝の中にも見ることがきる。センチメンタルな虚偽におおわれた南部の伝統に憤りを感じ、厳しい現実を描くことが必要であると、南部の伝統主義に率直な苦言を呈している(*The Woman Within* 97-8)。『不毛の大地』は、作者のそのような信念を受け継いだ登場人物たちの行動観察をするための実験小説であるという側面も併せ持つ。

おわりに

繰り返し現れるユードラのヴィジョンが告発するものは、南部家父長制によって女性が沈黙させられ、抑圧され、自らの立場を言説化する手段を持たず、主体として語るこのできない硬直した状況である。批判の矛先はこの抑圧の仕組みを作り出した南部の伝統主義に向いており、つまりはアメリカ南部人である作者自身の自己批判となっているのである。結局、ユードラのヴィジョンはアフリカにおける植民地言説などではなく、無意識の欲望が創り出した誤ったアフリカ表象であり、その誤りを引き起こしてしまった要因として南部女性が正しい知識を享受できる手段を持たないことを指摘している。このヴィジョンは伝統主義の下、人種差別、性差別を許容する社会の中で、女性が想像力を極度に歪められている閉塞感を映し出している鏡の役割を果たしており、当時の男／女、アメリカ／アフリカ、西洋／非西洋の二項対立を脱構築するように仕組まれていると言えるであろう。

ユードラのヴィジョンに込められた使命感は、皮肉にも狂女の妄想として扱われており、彼女自身でさえ狂気を引き起こす根本的な理由を見つけない。しかし、唯一の自己実現の手段としての結婚が破綻した時、彼女が能動的に活躍できる場は伝統主義的な拘束の強い田舎町では与えられていない。彼女が真に絶望したのは、恋愛が破綻したことよりも、それによって自分が思い描く生活の可能性が消滅してしまったことにある。実際、ユードラはゴードンと結婚できなかったため、プアホワイトの階層のジョシュアと結婚することになり、社会階級を下げざるを得ず、懸命に働いても報われない日々を一生送ることになる。

結婚が自己実現の代替行為となっていること、それがユードラの狂気の原因であることを、南部の田舎町では理解されず、結局は彼女の発狂は恋愛の破綻によって引き起こされた個人的な問題として片付けられている。しかし、作者グラスゴウは、何世代にも渡って同様の悲劇が繰り返されている一家族の系譜を描くことで、ユードラの神経症は個人的な問題ではなく、たった一度の恋愛の破綻が人生を狂わせ、修復不可能なほどに女性を追いつめているという硬直した南部の伝統主義的社会構造に問題が隠されていることを暗に指摘している。

ドリンダは、閉塞感漂う伝統主義的なアメリカ南部の田舎町を「環境」として持ち、理想と現実の狭間に苦しむ情熱的な女性が幾世代も存在した家系の「遺伝」的素質を受

け継いでいる。遺伝と環境が彼女の半生を支配しているという自然主義文学的決定論をサブテキストとする『不毛の大地』において、ドリングダはゾラ流の「宿命的な肉体の本能」(『神を殺した男』122)に操られる人間であり、先祖の動物的本能から逃れられないヒロインとして描かれている。『不毛の大地』を含め、グラスゴウの多くの小説のプロットは、ヒロインのセクシュアリティの目覚めと恋愛の破綻であるが、一見、単なる恋愛小説と思われるこのプロットの裏にはダーウィンの進化論を援用する自然主義文学的テーマが潜んでいるのである。

第4章 <ニュー・ウーマン>へと進化する農園主夫人像

はじめに

エレン・グラスゴウ小説における恋愛の破綻は自然主義的な要素と分かちがたく結びついている。ヒロインは恋愛経験によって先祖返りするきっかけを引き起こし、その後の恋愛の破綻によって理性を取り戻し、自助努力で経済的な成功を目指す。結婚生活は破綻しても、結果的には経済的自立の道では成功し、物質的に充足した生活にたどり着く。『不毛の大地』においてもヒロインのドリンドは、前章のガブリエラ同様、恋愛の破綻から立ち直って、酪農ビジネスを成功させる。

しかし、物語の始まりではドリンドはジェイソンへの恋愛感情に対して無力であり、運命に抵抗しても逃れることができない。その例をテキストから2か所引用する。一つ目は彼女が禽獣に捕えられた弱い獲物に矮小化されて、力を奪われたことが強調されている場面である。

By some accident, for which nothing in her past experience had prepared her, all the laws of her being, thought, will, memory, habit, were suspended. In their place a force which was stronger than all these things together, a force with which she had never reckoned before, dominated her being. The powers of life had seized her as an eagle seizes its prey. (*Barren Ground* 29)

一つ目の引用は愛に対する否定的な表現が描かれているが、二つ目の例も激しい感情によって自分の意思が奪われてしまい、見えない力によって操られていると感じる部分であり、情念に潜む凶暴さが強調されている。

She was in the clutch, she knew, of forces which she did not understand, which she could not even discern. And these forces had deprived her of her will at the very moment when they were sweeping her to a place she could not see by a road that was strange to her. (*Barren Ground* 63)

これらの引用では、目に見えない力は彼女の存在や意思、習慣などよりもずっと力強くヒロインを支配しており、その力に飲み込まれることがわかっても逃れることがで

きない彼女の無力さを映し出している。人間的な尊厳は奪われ、罠にかかった鼠のような弱々しい動物に先祖返りし、みじめで非力な存在へと退化させられている状態であり、このようなことを引き起こす恋愛感情はヒロインを窮地に陥れる危険な体験になっている。その後の人生を狂わせる原因になることがわかっているにもかかわらず、力を奪われて押さえつけられたヒロインにはどうすることもできない。ヒロインは恋愛感情から逃れようと抵抗しても無力であり、「肉体的な本能の宿命」(『神を殺した男』122)に流され、飲み込まれていく。

Suddenly the feeling came over her that she was caught like a mouse in the trap of life. No matter how desperately she struggled, she could never escape; she could never be free. She was held fast by circumstances as by invisible wires of steel. (*Barren Ground* 57)

罠にかかった鼠の末路に死が待ち受けてように、思春期にさしかかって異性への感情が芽生えたドリンドの行く末にも悲劇が待ち受けている。目に見えない針金で縛りつけられたように自分の意思には関係なく転落の結末へと突き動かされていくことになる。

聖母の青い服

ここで、ドリンドが恋愛の破綻への道をたどることになる遠因として、青い布の果たす役割は大きい。ドリンドはジェイソンと二人きりで荷馬車に乗っている時に、彼の不幸な家庭の話聞いて同情し、手助けできることはないかと申し出る。すると彼が、「それなら、君の瞳と同じ色の青いドレスを着てほしい」(*Barren Ground* 66)と言ったことから、どんなことをしても青いドレスを手に入れようと決心する。

青色の歴史的背景としては、ローマ帝国時代は蛮族の色と見なされていたが、12世紀には聖母マリアの色として定着しており、マリア信仰の隆盛とともに聖母マリアと関連ある色というイメージがヨーロッパ各地に広まっていった(徳井 80)。聖母の青い衣を描くための顔料はラピス・ラズリという鉱物から生成され、主産地はアフガニスタンであった。徳井淑子によると、はるばる中東から運ばれるこの青色顔料は値の張るもので、当時、聖母像を描かせるパトロンの威光を示すのにちょうど都合がよかった(徳井 80)。ロレンツォ・ロットやエル・グレコなどによって描かれた受胎告知の場面では、

必ず聖母マリアは青いマントを身につけていると言われている(宮下 25,30)。

ドリンダは青いドレスを手に入れることに夢中になるが、これは彼女のセクシュアリティの目覚めと、妻や母という伝統的な家族の役割を担うことで、この恋愛衝動を共同体で認められたいという思いを表している。両親のために牛を買おうと貯めておいたなげなしの金をはたいて、一生に一度だけ自分の欲しいものを手に入れようと決意した。しかし、恋愛感情に身をゆだねた結果、彼女の人生は大きく狂ってしまう。この青いドレスを着たドリンダはジェイソンとの恋愛を一時的に成就させ、聖母マリア同様に未婚のうちに妊娠することになる。

聖母マリアが処女懐胎であったように、ドリンダの性愛の場面もテキストには一切描かれていない。第1部第8章の終わりでは、日暮れの小川でジェイソンと待ち合わせをしていたが、ドリンダは行かなかった。「初戦では彼女が勝ったが、これは負け戦における一勝に過ぎなかった」(*Barren Ground* 107)とあるように、心理的葛藤がありながらも恋愛にのめり込んでいくことは読者には明らかである。この場面の次頁は第9章に変わり、季節が2ヵ月ほど進んで季節は5、6月になっており、すでにドリンダはジェイソンと秋に結婚式を挙げる約束を交わしていた。そしてこの時には本人もまだ気がついていないが、すでに妊娠していたのである。

そのような時、「やり残した用事を結婚する前にニューヨークで片づけてくる」と言い残し、ジェイソンはニューヨークへ旅立っていった。そして、そこで彼は脅されるままに過去に付き合いのあった女性ジェニーバ(Geneva)と結婚してしまい、ドリンダはその事実を知らされず彼の帰りを待ち続ける。ついにジェイソンの裏切りを知らされた時、ドリンダには“the savage fibre of instinct(*Barren Ground* 152)”によって凶暴な動物の精神状態へと先祖返りし、ジェイソンを撃ち殺そうと銃を構えて彼に狙いを定める。

しかしこの瞬間に、ドリンダはジェイソンの臆病さに対して軽蔑の念を覚えたことで恋愛感情の束縛から解き放たれ、彼との関係を終えることによって「宿命的な肉体の本能」から解放される。恋愛の破綻によって理性を取り戻したドリンダは理性的意思を呼び覚まし、ジェイソンを殺害することを思いとどまることができた。この時から彼女は動物的本能の支配から解放され、人生の経済的な成功に向けて理性的に働き始める。

ただ、彼女がジェイソンとの恋愛体験において後悔したことは、妊娠したことへの罪の意識ではなく、青いドレスを購入したために母親に牛を買い与えられなかったという現実的な理由であった。

What surprised her, when she was not too tired to think of it, was that the ever-present sense of sin, which made the female mind in mid-Victorian literature resemble a page of the more depressing theology, was entirely absent from her reflections. She was sorry about the blue dress; she felt remorse because of the cow her mother might have had; but everything else that had happened was embraced in the elastic doctrine of predestination. It had to be, she felt, and no matter how hard she had struggled she could not have prevented it. (*Barren Ground* 202-3)

青いドレスを買わずに我慢することもできたのにと後悔するが、それ以外は自分ではどうすることもできない宿命であったと、自分自身を納得させようとしている。ドレスよりも牛を買うべきだったと後悔していることは、ドリンダが恋愛の呪縛から解放され、実業家としての経済観念を取り戻したことを意味する。

この引用の中に **predestination** (予定説) とあるが、自然主義作家たちの決定論について丹治は次のように論じている。「ゾラをふくめすべての自然主義作家は、決定論をあきらめて偶然性を容認するか、あるいは自然主義をあきらめて超自然主義的宿命論というかたちの決定論をとるか、どちらの道の付近をたどるしかあるまい」(『神を殺した男』 151)と述べていて、『テス』(*Tess of the D'Urbervilles*, 1891)でトマス・ハーディが選んだのは宿命論であり、『死の谷 マクティーク』(*McTeague* 1899)のフランク・ノリスは偶然性を容認し、決定論を犠牲にして、あくまで超自然的なものは拒絶していると指摘している。この場合、グラスゴウはハーディ的であると言えるであろう。グラスゴウ作品の決定論は、自然主義を超えた「超自然の力」、つまり「神の存在」を完全には否定していない。

“Life or the will of God, it made no difference, for one hurt as much as the other”(Barren Ground 203)とドリンダが考えるように、超自然の力がテキスト内で印象づけられることによって、グラスゴウの決定論は、「偶然性がいっさい存在しない小説を書こうとする」(『神を殺した男』 149)ゾラとは、一線を画している。『不毛の大地』においてもドリンダが馬車に跳ね飛ばされた後で親切な家族の世話になるなどといった御都合主義的な「偶然」が果たす役割が大きく、人生の現象を機械論的決定性の連鎖としてはとらえようとしていない。丹治がハーディの小説について、神は人の願いを聞き入れるこ

とはないが、それでも祈りを捧げる対象があるというだけでも精神的な拠り所となりえると指摘しているが、グラスゴウ作品はハーディほど救いがたい悲劇を描いておらず、アメリカ的な楽天的な性格が盛り込まれ、ヒロインは絶望の淵から何らかの形で救われることになる。

『不毛の大地』における青色の重要性について議論を戻したい。ジェイソンの妻となったジェニーバが、ドリンダのダブルである可能性が暗示されているのも、ジェニーバが身に着けていた「青いスカーフ」による。ジェニーバの存在は、もしドリンダがジェイソンと結婚していたらどういう結末を迎えたかを推測させる役割を果たしている。ジェイソンと結婚後、ジェニーバはやせ細り、髪は艶を失い、急激に老け衰える。そのうち、「生まれたばかりの赤ん坊を、夫が殺した」と、あたりかまわず周囲に訴えるようになり、精神的に不安定な状態が続いていた。そしてついに、彼女は池に身を投げて溺死する。池にはジェニーバの青いスカーフが浮いており、死によってようやく彼女は青い布から解放される。ドリンダが脱いだ青いドレスは、ジェニーバの青いスカーフとなり、青い布がジェイソンに関係する女たちにまとわりつく。

結局、この青い布は聖母マリアに通じる女性の役割の象徴であり、良き妻、良き母となって自己犠牲をいとわずに家族を支えるという結婚や家族に付随する古典的社会規範でもある。ドリンダやジェニーバは、周囲から期待される役割に自ら進んで適応させて、自分で自分を束縛していることを含意している。この布はドリンダの身体を覆い隠し、ジェニーバの首を絞めつけているが、この小説において青い布を身につけるという行為は、女であることに伴う社会的規範を受け入れ、自らを伝統的女性像の鋳型に押し込むことを暗示しており、女性性や母性に関する社会的言説を自ら進んで受け入れようとする心理を表している。

ジェニーバは結婚当初からジェイソンと仲たがいしており、毎日喧嘩が絶えない生活を送っていた。それにもかかわらず離婚による世間の批判を恐れ、夫から離れることができないでいた。さらには、結婚後は子を産むことが妻の役割という家族制度の期待を背負うことになり、それらの期待に応えようと努力する。その結果、理想と現実の大きな乖離に耐えられず、夫が生まれたばかりの子供を殺したというフィクションに取りつかれるようになった。この妄想が物語ることは、家庭の不和を世間には隠したいということ、子どもを産まなければいけないという強迫観念を持っていたこと、また社会的に価値を認められるためには伝統的家族像に自己を適応させなければならないと彼女が

信じていることである。

ジェイソンはドリндаと結婚したいと思いつつも、ジェニーバの兄たちから脅されるとジェニーバと結婚してしまうという臆病な性格として描かれている。医師になったのも自分の意思ではなく、父の勧めからであって、重要な決定をすべて人任せにしてしまう優柔不断な人物であった。彼の父も医師であるが、この父はジェイソンの母が生まれている頃から、愛人である混血女性と彼女の子供達をジェイソンの母と同居させていた。ジェイソンの父はアルコールによって引き起こされた獣性がコントロールできなくなっている典型的な破滅型の人物であり、長年のアルコール中毒で心身ともに衰弱して死んでいく²。遺伝的にその破滅的な性質が息子にも受け継がれ、ジェイソンも放蕩生活によって引き起こされる不幸な結末から逃れられない。

ジェイソンのアルコール依存の傾向は歳をとるにつれて強くなり、ジェニーバと結婚してからは、現実逃避の手段として常に酒を飲んでいた。また、若いころは父が愛人を母と同居させることを憎んでいたにもかかわらず、自らがアルコールに溺れるようになってからは同じように混血女性を家に住ませ、彼女との赤ん坊たちが「小さな悪賢い動物のようにあたりを這いまわって」(*Barren Ground* 134)いた。このように、ジェイソンと彼の父親は、アルコールによって引き起こされる獣性が身の破滅をもたらすという自然主義的テーマを踏襲している¹。アルコール依存に陥りやすい性質の遺伝と、南部の田舎町における環境に対して知識人の持つ孤独感など、遺伝と環境の支配下にある無力な人物としてジェイソンと彼の父親は性格付けられている。

トマス・ハーディの影響

『不毛の大地』は1925年に出版されたが、その当初からイギリスの代表的自然主義作家トマス・ハーディの小説と比較して、批評家たちは論じている。ハロルド・ブルーム(Harold Bloom)は、ハーディはグラスゴウの“strong predecessor” (“*Barren Ground: Ellen Glasgow’s Critical Arrival, Introduction*” 551)であると評しているとスクーラ(Scura)は紹介し、グラスゴウがハーディを小説創作の手本にしていることを指摘している。また、ジェームズ・W・タトルトン(James W. Tuttleton)が指摘するように、ドリндаはハーディの小説のヒロインたちと多くの類似点を持つと考えられている(Tuttleton 588)。例えば、ドリндаは性交渉を伴わない結婚生活を夫になるネイサン(Nathan)に約束させるが、これは『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*)のスー・ブライドヘッド(Sue Bridehead)がクラ

イストミンスターの大学生と性を無視した同棲生活を送るというハーディの設定に重なる指摘されている。

フレデリック・マクダウエル(Frederick McDowell)も以下のようにハーディの影響について言及している。

Hardy's modified naturalism is close to Ellen Glasgow's; and her novels are often reminiscent of his in tone, texture, and conception. In 1897 she thought of him as "the first of all novelists, living or dead" and of *Jude the Obscure* as the best of his books. She was consistently in accord with his echoing of Novalis in *The Mayor of Casterbridge* that "character is Fate," and agreed with him that the will may be considered one of the most influential of the forces which comprise fatality. (McDowell 23)

『日陰者ジュード』や『カスターブリッジの市長』を書いたハーディは最も優れた小説家であると、グラスゴウの憧憬の対象になっている。グラスゴウはまたハーディの「人物の性質は運命である」という言葉にも深く共感していて、意思の力も宿命によって形成されるという彼の意見に同意している。このように、ハーディ風の自然主義はグラスゴウ作品の特徴に似ていることがマクダウエルに指摘されている。

グラスゴウは1914年と1927年にイギリス南部ドーチェスターにハーディと彼の妻を訪ねて親交を深めている(*The Woman Within* 196,197,199)。グラスゴウとハーディは共に、ダーウィン、ハクスレー、スペンサー、ヘッケルといったヴィクトリア朝の科学者の著作を熱心に読んでおり、とりわけ、ハーディはショーペンハウアー(Schopenhauer)の哲学から影響を受け(Tuttleton 579)、その悲観的人生観を小説に取り込んだが、グラスゴウもショーペンハウアーを愛読書として挙げている(Tuttleton 581)。グラスゴウ小説に見る自然主義文学の要素や、自我の強いニュー・ウーマンのヒロインが社会の軋轢に翻弄される展開は、ハーディ小説の特徴と共通しており、グラスゴウは生まれ育った土地であるアメリカ南部に舞台を置き替え、南部的題材をハーディの小説手法に加えることで、彼女独自の文学的世界観に作り変えたと言えるであろう。

土屋倭子はハーディが活躍した19世紀末のイギリスでは、女性が自らの地位向上を求め、男性と対等の権利獲得を目指して、様々な分野で果敢にフェミニズム運動を展開

しており、ハーディの小説もこの時代のうねりと密接に連動していることを指摘している(土屋 10)。土屋は、1880年代、1890年代に輩出したニュー・ウーマン・ノヴェルとして、イギリスのオリーヴ・シュライナー(Olive Schreiner)の『アフリカ農場物語』(*The Story of an African Farm*, 1883)、ジョージ・ギッシング(George Gissing)の『余った女たち』(*The Odd Women*, 1893)、アメリカのケイト・ショパン(Kate Chopin)、イーディス・ウォートン(Edith Wharton)などの短編集を挙げ、これらの小説は特に女性のセクシュアリティを描き、結婚と男女のあり方を問題にしていることに特色があると述べている(土屋 21-2)。そして、ハーディの小説『日陰者ジュード』は女たちの結婚制度との戦いを正面から取り上げた最も重要なニュー・ウーマン・ノヴェルとして紹介している(土屋 23)。グラスゴウは、ハーディ作品を全て読破し、その中でも『帰郷』(*The Return of the Native*)と『日陰者ジュード』を最も好きな作品に挙げていることから(*The Woman Within* 198)、一連のニュー・ウーマン・ノヴェルから創作のヒントを得ていたことがうかがえる。

『不毛の大地』において、ドリンダは結婚しないままジェイソンの子供を身ごもったが、交通事故によって流産し、それ以降は性に対して激しい嫌悪感を抱くようになった。ヒロインが肉欲を嫌うというこのプロットは、前述のハーディとの関連からニュー・ウーマン・ノヴェルの系譜として考察する必要がある。ドリンダがジェイソンとの恋愛で負った心の痛手は生涯癒えることなく、親切でやり手の農場経営者であるネイサンから結婚の申し込みをされた時にも、性愛の行為を伴わない夫婦生活なら承諾してもいいという結婚の条件を申し出る。彼女の言動には、男性とまったく対等な関係に立つことを求めるとき、生殖を伴う肉体関係は女の自由に脅威になるという、当時、過渡期にあったフェミニズム思想の一片が反映されている。精神的結びつきのみによる結婚にこだわるドリンダは、肉体をもはや不要なものとして否定しており、ここからは、女性の自立を守るためには生殖から自由にならなければならないという当時のフェミニズム思想に縛られていることがうかがえ、その時代の思想の限界を見ることができる。そしてついに、ネイサンとの結婚生活では一貫してその態度を変えることはなかった。ドリンダが性を否定してのみ自律を守ることができ、理性的な酪農経営ができると考えた背景には、ダーウィンの『人間の由来』(*The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*, 1871)における性淘汰説を初めとする当時の性科学に対する作者の抵抗感が表れているのではないだろうか。グラスゴウは生物科学で強調された男女の差異という決定論の枠に囚われることに抵抗し、男女間の境界線を攪乱しようとしており、ドリンダは男女の二項

対立というジェンダーの理論枠の中でしか機能しない伝統的結婚制度に異を唱え、多様な両性のあり方を探っているという点において、その時代においては革新性を備えていると言えるだろう。

しかし、ドリンダが性を現実の世界で否定すればするほど、抑圧された情念がいつそう激しく夢の中で噴出する。ドリンダの夢には、現実で禁じられたセクシュアリティが繰り返し悪夢として現われ、彼女を苦しめる。その夢は、彼女の母ユードラが神経症を病みながら見ていたヴィジョンと同様、言説化する手段を持たない抑圧された女の欲望を映し出している。

For a moment, through the irresistible force of illusion, she was caught again, she was imprisoned in the agony of that old passion. In her dream she saw herself fleeing from some invisible pursuer through illimitable deserts of broomsedge. . . . Then as she dropped to her knees, with her strength exhausted, she was caught up in the arms of the pursuer, and looking up, felt Jason's lips pressed to hers. (*Barren Ground* 354)

ネイサンの妻となっても、彼女の心はジェイソンとの思い出に囚われているが、現実世界ではこの無意識の欲望を理不尽なまでに強引に押さえつけた結果、逆に変則的なかたちで突然、夢の中で彼女に襲いかかる。

日常生活で封印された「宿命的な肉体の本能」は、夢の中で何度も息を吹き返し、先祖が動物であった頃感覚へドリンダを誘う。昼はニュー・ウーマンとして強い意思をもって自律性を保つが、夜には無意識の欲望が跋扈する世界に引きずりこまれ、自己のコントロールが不能になる体験をする。

While she was awake she could escape him; but at night, when she slept, she would live over again all the happiest hours she had spent with him. Never the pain, never the cruelty of the past; only the beauty and the unforgettable ecstasy came back to her in her dreams. (*Barren Ground* 296)

さらに次の超現実主義的で不気味な夢では、百万本ものアザミがジェイソンの顔になっており、それらの目がこちらを凝視しているというもので、恐怖心からドリンダはそ

のアザミを踏みつぶすが、数が多すぎて到底追いつかない。

As far as she could see, on every side, the field was filled with prickly purple thistles, and every thistle was wearing the face of Jason. A million thistles, and every thistle looked up at her with the eye of Jason! She turned the plough where they grew thickest, trampling them down, uprooting them, ploughing them under with all her strength; but always when they went into the soil, they cropped up again. Millions of purple flaunting heads! Millions of faces! (*Barren Ground* 245)

アザミの花を踏みつぶしても踏みつぶしても、すぐにまた生えてきて、ドリンドの必死の応戦は虚しい。この夢が物語ることは、ドリンドがジェイソンに捨てられたという噂の標的になっている屈辱感、他人の視線に恐怖を抱いていること、また消し去ろうとしても消すことのできないドリンドの情念と、恋愛の破綻による敗北感がにじみ出ている。「殺さないで、殺される！」と叫ぶ自分の声で目覚めたドリンドは、夢の世界の恐怖を何とか振り切って、現実世界へ逃げ戻る。

この夢について J.R. レイパーはフロイトの影響が現れていると指摘している。グラスゴウはフロイトの 1913 年版の『夢判断』(*The Interpretation of Dream*)と 1914 年版の『日常の精神病理学』(*The Psychopathology of Everyday Life*)を持っていて、フロイトのように夢をシンボルとして作品に使用することを試みており、ドリンドの夢のモチーフはすべて意味がつながるように周到に用意されていると分析されている(Raper 84-5)。何百万というジェイソンの顔がついたアザミを踏みつぶす行為には、ドリンドがすべてを浄化したいという思いが現れている。ドリンドが恐れるものは、たった一度でも性的逸脱によって「墮落した女」という烙印を押された女の名誉は回復不可能であるという、南部の田舎町における旧態依然とした価値観である。この束縛から解放されるためにドリンドは農場経営に全てを注ぎ込み、不屈の精神で孤独な努力を続けて酪農ビジネスを成功へと導いていく。

「自由意思は偶然性と並んで、自然主義的決定性を解体しうる可能性を持つ」と、丹治が述べているが(『神を殺した男』 145-54)、『不毛の大地』においても、これら二つの要素が自然主義の決定論からヒロインを新たな展開へと導く役割を果たしている。特に自由意思の行使については、ドリンドのニュー・ウーマンの結婚観と関連して、グラ

スゴウの文学世界を理解する重要な手がかりと考えられる²。

ペリー・D・ウェストブルック(Perry D. Westbrook)は、決定論と自由意思といった正反対の要素を小説に取り込むグラスゴウのジレンマを次のように述べている。

Having proclaimed herself a determinist, she states that pragmatically, at least, she believes in the freedom of the will, though she considers this “indefensible” in theory.” Her dilemma is that of the Calvinists: how to reconcile determinism or predestination with a freedom of the will necessary to any acceptable system of ethics.” (Westbrook 162)

グラスゴウ家は、いわゆるピューリタンと総称されるカルヴァン派の流れをくんでいるプレスビテリアンであるが、このピューリタンの諸派に共通するものは「予定説」であると佐伯啓思は説明している(佐伯 177)。カルヴァンは神の絶対性を強調し、神のみが「最後の審判」で誰が救われるか知っており、人間には決してわからない。そこで人は自分は救われるという証拠を手にしたと考え、世俗内禁欲を実践し、社会的に成功することによって「救いの確証」を得ようとする。つまりドリンドのように、「毎日禁欲生活を送り、自己を規律正しく律して、無駄を排し、隣人愛を実践しながら勤勉に労働することで、事業に成功する」(佐伯 177-9)ことが、「救いの確証」であるということになる。ドリンドの他人の干渉を許さない孤独な労働の日々は、カルヴァン派の「予定説」の実践と符合しており、自由意志はその救いを得るために行使されている。

おわりに

ジェイソンとの別離が引き金となり、小説の後半では、ドリンドは理性を取り戻して酪農経営に打ち込み、経済的な成功を収めるドリンドであるが、コースマイヤーによると一般に理性は人類だけが用いることができると考えられており、人間と動物を分ける重要な指標であった(コースマイヤー 31-2)。理性を欠いた人間は、動物へと退化した状態であり、ジェイソンもアルコールに溺れる毎日を過ごすことによって動物へ先祖返りしたことが示唆されている³。ドリンドとジェイソンの人生は別離の後、明暗を分けるが、酪農経営に成功したドリンドでさえ経済的繁栄とは裏腹に虚しさを感じ続けて生きることになる。ドリンドにとって大地は「運命の象徴」(*A Certain Measure* 161)であり、

土地を耕すことは自分の運命を切り開くことと同義語である。しかし酪農ビジネスの成功後、ジェイソンと過ごした頃を感じたような高揚感がドリンドに戻ってくることは二度となかった。ジェイソンにとってアルコールは禍因でしかないが、ドリンドにとって恋愛体験は幸せな時間を過ごした思い出も含まれる両刃の剣であった。

ジェイソンのアルコールとドリンドの恋愛体験は、種の退化をもたらす先祖返りを引き起こし、混沌とした原始的世界へ彼らを導く装置として機能している。この時、ジェイソンは生来備わったアルコール依存に陥りやすい性向から脱することができない。しかし、ドリンドは青いドレスを脱ぎすてて、次のステップへと踏み出した。彼女にとって青いドレスは一時的に夢中になった贅沢品にすぎず、浪費は彼女に生来的に備わった性質ではないのである。

登場人物たちは恋愛やアルコールの過剰摂取をきっかけにして激しい情念にからめとられ、理性による自己制御が不可能になる。先祖返りによって引き起こされた動物的な本能は、ドリンドやジェイソンを人生の破滅へと導くが、これは理性を喪失することによって先祖返りし、動物に退化する不安を映し出していると言えるであろう。『不毛の大地』における先祖返りの描写は、遺伝や環境に支配される人間の無力さが具現化されたものであると同時に、理性を失うことに対する警鐘にもなっている。

グラスゴウの小説はヒロインの自由意思がある程度の成功へと導くことを注目する時、ハーディほど徹底した自然主義ではないことが明らかになる。どのように予定説または決定論と自由意思を受け入れられる形で小説の中に融合させるかということが、グラスゴウの小説の中で工夫されていることは、プロットの展開からも推しはかることができるが、この小説の前半でドリンドは恋愛によって先祖返りし、動物的な本能に支配されるが、恋愛の破綻を経験することで理性的な人間に戻り、小説の後半部分では自助努力で経済的繁栄を収めるピューリタンの成功物語となっている。

ジェイソンとの恋愛の破綻の後、ドリンドは酪農の科学的な知識を学ぶことで旧来の利益を産まない農法から脱却し、南北戦争で荒廃したヴァージニアの土地を豊饒な酪農地に変え、牧場の経営を成功させるが、これは最終的に経済的な側面においては彼女の自由意思の力が当時の生物学的決定論に打ち勝ったことを意味する。彼女はニューヨークの大学で最新の酪農技術について学び、それを実践する資金を調達し、夜明け前から牧場で牛の搾乳をし、鋤をふるい、ついには牧場に電気設備を設置し、酪農を機械化することで、慣習に縛られた収穫が上がらない農法から科学的で合理的な酪農経営へ発展

させた。科学技術が進歩したことはそれを操る人間の価値観の変化も伴う。つまり、南部の女性農園主が、半世紀前に奴隷の労働力を搾取することで成立していたプランテーション経営から、科学的知識を取り入れることができる近代的な酪農企業家へと大きく様変わりしたことを物語っている。

『不毛の大地』ではドリンドは牧場を経営する農園主夫人ではあるが、夫の付随的な地位ではなく、自らの知識と努力で大地を耕す主体的な存在として描かれている。ドリンドは日々進歩する科学技術を取り入れ、物質的な繁栄を享受できるようになるが、それに相反して心理的にはいまだに何世代も前の大叔母たちや母と同じように、恋愛の破綻から受けた傷心から抜け出すことができず、空虚さを感じながら生きている。この小説において、近代的科学技術は努力や意思の力で進歩させることができるが、人の情念は何世代にもわたって同じところを堂々巡りするだけで進歩することはない。直線的な進歩が適用されるのは科学技術の分野のみであり、酪農の機械化によって労働作業が大幅に軽減されたとはいえ、人の心のありようというのは非合理的であり、現代の人間の方が過去の人びとよりも心が豊かであるとはいえないということが暗に指摘されている。この何世代にもわたって進歩することのない抑圧された女性の情念の発露によって、人間の進化に疑問を提起する可能性も『不毛の大地』に見ることができるであろう。

ドリンドは、科学知識を取り入れることにより先祖が成し得なかった土地の改良に成功し、ヴァージニアの不毛の大地を蘇らせる。小説のタイトルの”barren”とは、ドリンドが子どもを産まなかったことの暗示となっているが、妊娠・出産という生殖を否定した形でしかビジネスで成功することはできなかったという現実を映し出している。『不毛の大地』においては、遺伝の法則、自然淘汰といった理論を援用しながらも、生物学の性差の強調から逃れるために、グラスゴウはドリンドから恋愛感情を奪い、彼女を先祖返りさせる要素を取り除かねばならなかった。酪農経営というビジネスを成功させるのに必要な理性的な判断は、生殖の根源にある動物的本能とは相容れないという当時の女性をめぐる社会文化的言説の時代的な限界もまた描かれているのである。

第 II 部 混血神話の破壊と再構築

第 II 部の目的

アメリカ南部では建国当初から黒人奴隷の労働力を搾取することで綿花やタバコのプランテーション栽培が盛んに行われてきた。それによって一部の白人が富を築き、貴族的な生活を謳歌することができた。この奴隷制を基盤とする経済体制を維持するために、人種やジェンダー、階級に関する厳しい規範が作られ、人種混交を禁止し、社会的役割分担が厳格に制定されていた。

奴隷制下で裕福な白人男性を権力の頂点とする序列階梯の下では、「ムラトー」(mulatto)と呼ばれた混血の人びとは先祖が性的に搾取された対象として徴づけがなされていると考えられており、文学上では「悲劇の混血」(tragic mulatto)というジャンルも作られた。彼らは祖先に一人でも黒人がいれば、白い肌をしていようとも黒人と見なすという人種差別的な基準によって白人社会には入れず、黒人社会にも溶け込めない存在として小説に描き出された。第 II 部では、肌の白い混血の登場人物に注目し、白人か黒人かという人種のカテゴリを攪乱していたことを再確認し、アメリカ南部における人種の序列階梯を崩すための装置としてマイノリティ作家たちに利用されていたことを考察する。

文化人類学者の竹沢泰子が 1950 年のユネスコ声明で人種は「生物学的現象というよりむしろ社会的な神話である」(『人種概念の普遍性を問う 西洋的パラダイムを超えて』60) という見解を紹介し、今日、人種概念の在り方が大きく変化していることを指摘しているが、ウィリアム・ウェルズ・ブラウンとフランシス・ハーパーは何百年も前にすでに同様の手法で当時の人種概念に疑問を呈していた。

ブラウンとハーパーの作品に登場する混血女性たちは、人種・性・階級といった血脈によって変えることができないものと考えられていたカテゴリを容易に飛び越え、自分の意志で時に白人になったり黒人になったり、貴族階級から奴隷の身分まであらゆる社会的役割を行き来する。黒人が白人として通すときには「パッシング」(passing)と呼ばれ、世間を欺いているようなイメージが付与されているが、ブラウンの作品には後ろめたさなどまったくなく、周縁化された人々が仕方なく選択した生きる手段としてむしろ肯定的に描かれている。また、ハーパーのヒロイン、アイオラは白人か黒人かの選択を迫られた時、黒人であることを選び取り、自分の力で社会を変えていこうと決断している。ブラウンやハーパーの描く混血のヒロインたちは、奴隷制の罟を様々な工夫と知恵

でかわし、彼女たちの肌の白さによってかえって黒人の血を受け継いでいるというアイデンティティを再確認させられている。

第7章ではブラウンやハーパーの描いた混血の女性像から、グラスゴウの描いた混血の人物像の間にどのような違いがあるのかを考察した。グラスゴウが南部の遺伝に関わる社会的言説を用いながらも、その血の束縛をゆるめるためにいかに作品を創作し続けたかという足跡を彼女の生前の最終作品から検証する。「悲劇の混血」像のステレオタイプのイメージはグラスゴウの作品にも影響を及ぼしているが、このグラスゴウ作品では社会進化論的な性格付けというよりも、あがいても破滅の宿命から逃れられない人間の悲劇が描かれている。また、グラスゴウの描いた混血のパーティーには、ブラウンやハーパーの用いた混血像のように過度に優れた資質が強調されておらず、遺伝的な要因のために悲劇的な結末を迎える人間を描こうとしている。第I部のグラスゴウ作品群に見られる遺伝表象には作者の恐れと慢心が表れていたと論じたが、第II部第7章の彼女の最晩年作品においては、南部における遺伝決定論にあらがっても破滅の道から抜け出せない無力な人間の絶望感が描かれている。

まずブラウンとハーパーの作品分析を通して、南部奴隷制下では人種による序列階梯が厳格に制定されていたが、それを打ち壊す装置として肌の白い混血を利用した作家たちがいたことを示したい。彼らの混血の登場人物を分析することから、マイノリティ作家たちは南北戦争以前の時代から遺伝にまつわる社会的言説を否定しようとして小説を創作しており、その試みは200年経った後にグラスゴウによっていかに違った形で文学に登場したのかを明らかにすることが、第II部の目的である。

第5章 『クローテル 大統領の娘』における二重変装

はじめに

アメリカ合衆国『独立宣言』(*United States Declaration of Independence*)を起草した第3代大統領トマス・ジェファソンは33歳で妻に先立たれ、妻の異母姉妹であった混血の奴隷サリー・ヘミングス(Sally Hemings)との間に子供がいたという噂があった。自由や平等の理念を国家の礎にしようとした大統領が、実は矛盾にみちた私生活を送っていたのではないかという疑念は、18世紀中葉から現代にいたるまで長年にわたってささやかかれていたが、1998年11月5日、科学雑誌『ネイチャー』(*Nature*)にジェファソンとヘミングスの子孫のDNA鑑定結果が掲載され、遺伝子の一部が一致したと報告され、噂の信憑性が高まった¹ (Gordon-Reed xi)。

しかし、そういった科学的根拠が提示されるはるか以前、元逃亡奴隷であった文筆家ウィリアム・ウェルズ・ブラウンはこの噂を小説の骨組みにして『クローテル 大統領の娘』を執筆し、奴隷制廃止運動に広く世間の注目を集めた。自身も混血であったブラウンは歴史の裏側に埋もれかけていたアメリカ史のタブーに光を当てることで奴隷制の悪を指摘し、アメリカ国内だけではなくイギリスにおいても奴隷制廃止運動への共感を広げようとした。イギリスでアメリカ奴隷制度を非難する機運を高めることで、政治的圧力をかけようとしていたのであろう。

ブラウンの『クローテル』はアフリカ系アメリカ人作家によって書かれた初めての小説と言われているが、本章では自由を求める逃亡奴隷が追手をかわすためにとる変装という戦略に焦点を絞って『クローテル』を考察する。いかにブラウンが奴隷制廃止運動を白人の中産階級に広めようとしたのか、その戦略を例示したい。とりわけ異性装はジェンダー規範を侵犯するため、当時のメディアではネガティブなイメージが付与されがちであったが、『クローテル』では生き延びるための手段として肯定的に描かれている点に注目する。混血の逃亡奴隷たちは衣服を替えることで他者になりすまし、追手だけではなく周囲のすべての人々の目を欺く。ブラウンは究極的な選択としての変装を描くことで、性や人種、階級、さらには国家の境界に疑問を呈し、それらの社会的区分の是非に再考を促している。さらには、ありのままでは社会に人間として受け入れてもらえない自分とはいったい何者なのかという、周縁化された人々の普遍的な問いをも内包している。

クローテルの男装

18世紀のヴァージニア州でアメリカ合衆国大統領トマス・ジェファソンとその愛人である混血奴隷のカーラ(Currer)の間に生まれた娘クローテルとアルシーサ(Althesa)は白い肌をしていて、教育熱心な母親のもとで厳しくしつけられて成長した。しかし、父親ジェファソンが任務でワシントン D.C.に去った後に彼女たちの法律上の所有者が死去し、大統領の娘であるにもかかわらず奴隷として競売に出されてしまう。この時、クローテルはかねてより思いを寄せられていたホレイショ・グリーン(Horatio Green)に買われて夫婦同然に生活し、しばらくして娘メアリ(Mary)を授かる。しかし、野心家のグリーンは金持ちの政治家の娘と政略結婚し、クローテルは深南部に売られてしまう。一方、メアリは奴隷としてグリーン家でホレイショの新しい妻からのいじめに耐えていた²。娘を案じたクローテルは白人男性に扮して逃亡するが、捕らえられ投獄される。牢から抜け出した彼女は追手に阻まれて、ワシントンのロング・ブリッジから身を投げて命を落とす。一方、メアリは投獄された恋人のジョージを救うために彼と衣服を交換し、自らが牢屋に残って彼の逃亡を手助けする。その後、釈放されたメアリはフランス人の夫と結婚するが、後に夫とは死別する。フランスで偶然にメアリはジョージと再会し、残りの人生を共にヨーロッパで穏やかに過ごすことになり、小説の結びとなる。

この小説の主要な登場人物であるクローテル、メアリ、ジョージはいわゆる「悲劇の混血」(Fabi 3-6)と呼ばれるアメリカ文学上のステレオタイプと共通する特徴を持つ。肌の白い混血の悲劇をテーマにした小説は、人種差別的な前提のもとに成立しているとして、今日、黒人文学の批評家の中にはタブー視する動きもある。しかし、南北戦争以前の19世紀半ばに奴隷制廃止運動に携わっていたブラウンは、滞在していたイギリスで白人中産階級の注目を集めるために戦略的にこの文学ジャンルを選んだ。どのようにすればアメリカにおける人種の序列階梯を崩すことができるのか考え抜いて、イギリス人の共感を得て後援者を増やすことを最優先にしなければならないと、自分の信念に共感してもらう手段として小説を創作した。自由な発言が認められている現代の人々の目から見れば、時代的な限界を抱えた作者の言説に違和感を抱くかもしれないが、そのようなブラウンに対する批判でさえブラウンのような先駆者がいて初めて可能になったのである。

ブラウンは小説の中で逃亡奴隷たちに数多くの試練を用意するが、逃亡する際の変装も彼らの逆境をよく物語っている。ヒロインのクローテルは衣服を替えることで、逃亡

奴隷である黒人女性の姿から、裕福なスペイン人男性へと変貌し、一時的とはいえ自由を手にすることに成功する。このような変装によって、彼女は性別のみならず人種、階級、国家といった社会的に構築された境界を越え、奴隷制へ引き戻そうとする追手を攪乱することができた。このエピソードは、社会的区分の境界線は衣服など外見で変わってしまうほど曖昧であるのにもかかわらず、一旦、搾取される側に分類されてしまうとそこから抜け出すのは並大抵の苦勞ではないということを言外に含んでいる。

例えば、同じ主人に仕えていた黒人奴隷のウィリアムにクローテルは髪を短くすると男性に見えると指摘され、以下のように男装して逃亡する計画を思いつく。

Besides being attired in a neat suit of black, she had a white silk handkerchief tied round her chin, as if she was an invalid. A pair of green glasses covered her eyes; and fearing that she would be talked to too much and thus render her liable to be detected, she assumed to be very ill. On the other hand, William was playing his part well in the servants' hall; he was talking loudly of his master's wealth. (*Clotel* 143)

ウィリアムは機転が利くため状況に合わせて言葉を変え、奴隷としてふるまうことが求められているときには南部訛りで話し、クローテルと2人きりの時には訛りの無い英語で話しつつ、自分は裕福な主人から信頼の厚い従者であるという役割を演じる。2人は道中それぞれの役を演じ続け、なんとか自由州にたどり着くが、到着するや否やクローテルは娘のメアリを探しにまたしても深南部へ行くと言い出す。つまり今回の男装は、ウィリアムを自由州に送り届けるための逃亡のためであった。危険を承知の上で、クローテルはまたしても男性の衣装を身にまとうことになる。

This time she had more the appearance of an Italian or Spanish gentleman. In addition to the fine suit of black cloth, a splendid pair of dark false whiskers covered the sides of her face, while the curling moustache found its place upon the upper lip. From practice she had become accustomed to high-heeled boots, and could walk without creating any suspicion as regarded her sex. (*Clotel* 161)

クローテルは男装にも慣れてきて、イタリア人かスペイン人の紳士のように見え、男らしく歩くこともできるようになった。一度目の変装は、ウィリアムを安全な場所に連れていくことが目的であり、二度目の男装はメアリの救出のためであった。自分の身を危険にさらしながらも周囲の人たちのために行う変装には、クローテルの思いやりの深さや高潔さが表れている。クローテルが道徳観念を備えた立派な性質であることを繰り返して述べることによって、このような優れた女性が迫害される社会であれば、その社会規範のほうが間違っているということを婉曲に訴えている。

アメリカ文学研究者ファビの指摘によると、このクローテルの人種とジェンダーの二重の変装には、二つの皮肉が隠されている。まず、この男装は女主人がクローテルの長い髪を切り、他の奴隷と同じくらい短くして、一目で奴隷の身分とわかるようにしようという嫌がらせに端を発している²。嫌がらせからヒントを得て、逃亡のチャンスをつかんだのだ。もう一つ、クローテルが男装を選択したことは、南部では白人女性の貞操に執拗なまでにこだわり続けていた社会文化的背景があり、白人女性は旅に出にくいという理由があったためである。そもそもクローテルが逃亡することを決心したのは、奴隷にされた女性がしばしば陥る搾取から逃れるためであるが、これは白人女性の純潔さを保護する伝統とコインの裏表のような関係になっている。(Fabi 16)

次の引用は、変装が見破られ、追手に捕まりそうになったクローテルが橋から飛び降りた後の場面である。

Had Clotel escaped from oppression in any other land, in the disguise in which she fled from the Mississippi to Richmond, and reached the United States, no honour within the gift of the American people would have been too good to have been heaped upon the heroic woman. But she was a slave, and therefore out of the pale of their sympathy. They have tears to shed over Greece and Poland; they have an abundance of sympathy for "poor Ireland"; they can furnish a ship of war to convey the Hungarian refugees from a Turkish prison to the "land of the free and home of the brave." They boast that America is the "cradle of liberty"; if it is, I fear they have rocked the child to death. The body of Clotel was picked up from the bank of the river, where it had been washed by the strong current, a hole dug in the sand, and there deposited, without either inquest being held over it, or religious

service being performed. (*Clotel* 185-6)

ギリシャ、ポーランド、アイルランドやハンガリーといったヨーロッパの情勢を立て続けに例にとっていることは、この小説がブラウンのイギリス滞在中に出版されたことと関連している。イギリスでブラウンはいかにアメリカの奴隷制が残忍であるかを遊説して回り、自分の身の自由を買い取るために資金をつのった。アメリカ国内だけで運動するよりも、イギリスで支援者を得て、アメリカ政府に外圧をかけるほうが問題の解決が早いと考えたのであろう。そして、ブラウンの思惑通り資金は集まり、小説『クローテル』は評判になり、本国アメリカでも遅れて出版された。

命がけの男装をして窮地を脱しようとしたクローテルであるが、異性装は男女の二項対立で語られてきた性別役割分担の境界線を曖昧にするため、しばしば反社会的な行為とみられてきた。ヴァーン・L・バロウ(Vern L. Bullough)の異性装の歴史研究によると、女性が男性の衣服を身にまとう「男装」は女性の社会的な活躍の範囲を広げるため、精神状態が異常だとは考えられていないが、男性が女性の服を着る「女装」は治療を必要とする病気として精神医学で扱われていると述べている (Bullough 313-4)。ジェンダーの決定は身につける衣服に依るところが大きく、男装が軍人や警備員など、職業の選択肢を増やし、社会階級を昇る手段になりうる一方で、女装はあえて社会的階級を下げる可能性をはらみ、必要に迫られているというよりも本人の嗜好によるところが大きいと考えられている。このため、男装は女装よりも社会規範を逸脱する性質を反映する行為と見なされがちなのである。バロウはこのように異性装の中でも、男装、女装の対応には違いがあることを指摘している(Bullough 110)。

ジェファソン・デイヴィスの女装

クローテルの中の異性装には倒錯的イメージは皆無であるが、同時代、女装のネガティブなイメージがメディア戦略に利用された例をとりあげたい。クローテルに登場する女装と比較することで、その対照性が意味するものを考察したい。ブラウンが『クローテル』を出版した10年後、アメリカは内戦による混乱期であったが、1865年に南部の敗北によってついに終戦を迎える。この際に分離独立したアメリカ連合国の初代にして最後の大統領はジェファソン・デイヴィス(Jefferson Davis, 1808-1889)であった。彼が戦ったのは戦場においてのみではなく、北部のメディアにも標的にされ、戦況が不利にな

つてくると女装して逃亡を図ったと、いっせいに彼の人格をおとしめる報道が流された。デイヴィスがクリノリンというスカートを広げるために使われたペティコートをつけて女装した姿は多様なパターンで制作され、新聞や雑誌に掲載され、北部の正義を正当化する証拠のように用いられた。デイヴィスの女装に関して、アメリカ南部文学研究者の越智博美は次のようにのべている。

「女装して」逃げたジェファソン・デイヴィスの図像が典型的に示すように、南北戦争の敗北で、南部には「女々しい男」と、男の尻をたたいて「反乱」を起こさせる「男おんな」の南部女というイメージが付与された。ところが、再建期の混乱で苦境にたつ南部白人の姿を目にして北部に同情が生まれると、南部は一気に女性的なノスタルジーの場として称揚されるようになる。北部ツーリズムは産業化社会からのドメスティックな避難場所として南部を宣伝した。南部作家によるノスタルジックなプランテーション文学が盛んになったのもこの時期だ。このような文化現象に一貫しているのは「女性」としての南部表象である。(『モダニズムの南部的瞬間』 258,260)

南部を象徴する連合軍大統領が女装して逮捕される図というのは、南部という地域全体が常軌を逸した理解不能な地域であるという北部の偏見を暗示している。実際には、デイヴィスは雨をしのぐために妻のコートを羽織っただけであると弁明されているが、歪曲したイメージが拡散し、仲間を見捨てて一人逃げ延びるためにはどんなことでもする狡猾な人物として描かれ、デイヴィスはリーダーとしての資質に欠けているという印象が広く流布した。女装は倒錯的趣向の表れであるといった意味合いが含まれているため、デイヴィスの女装画の大量生産には彼の名誉を傷つけようとする悪意が読み取れる。このメディアを巻き込んだ戦略は大統領本人だけではなく、南部に対する評判をおとしめるのにも十分な力を発揮したのであろう。その後、越智が指摘するように、南部はノスタルジーを伴った女性化された姿で表現されるようになったが、一見、旧南部的な価値観を再評価するようなこの変化も実は、南部の女性化を定着させることで、公の政治の場から締め出そうとする策略の一環であると考えることができる。

デイヴィスの例とは対照的に、ブラウンの『クローテル』で用いられる女装には糾弾の色調が一切ない。それどころか、理不尽な社会制度で生き延びるために仕方なく行っ

た変装には、怒りや抵抗だけではなく、たくましい生命力やユーモアさえも感じることができる。次にクローテルの娘の恋人であるジョージの女装を例として見てみたい。

In the most persuasive manner possible, Mary again importuned George to avail himself of her assistance to escape from an ignominious [*sic*] death. After assuring him that she, not being the person condemned, would not receive any injury, he at last consented, and they began to exchange apparel. As George was of small stature, and both were white, there was no difficulty in his passing out without detection; and as she usually left the cell weeping, with handkerchief in hand, and sometimes at her face, he had only to adopt this mode and his escape was safe. (*Clotel* 192)

メアリはジョージを熱心に説得して、ジョージも渋々承諾し、メアリと衣装を交換して女装して逃亡する。ハンカチを顔に当てて涙をふくしぐさをして独房を出て、何とか無事にジョージは脱獄に成功した。ジョージは、オハイオ河を渡ってオハイオ州に到着し、女性の服を脱ぎ捨てた。奴隷州にいたときには自らを偽らなければならなかったが、自由州に着くと男性であることが許されたのである。さらに国境を越えてカナダに向かい、自由を手にすることができた。ジョージの女装は反社会的な趣味だとみなされる女装とは一線を画しており、倒錯的イメージがないばかりか、逃亡奴隷の戦略が機知に富んでいることを示している。このため、デイヴィスとは対照的に、女装によってジョージの人格は否定されておらず、ジェンダー規範の逸脱行為という意味合いが含まれていない。

ジョージの女装にはネガティブなイメージが付与されていないばかりか、生きるためのやむを得ない選択として肯定的に描かれている。つまり、相手を油断させて状況を攪乱するための生きる知恵であり、作者ブラウンが『クローテル』執筆の際にイギリス人読者の共感を得るために白人社会の価値観に抵抗しなかったことと同様の戦法である。

ジョージのような「悲劇の混血」を主人公にして作品を執筆したハーレム・ルネサンス以前のアフリカ系アメリカ人作家について、ファビは次のように指摘している。

No literary tradition is immune from intertextual and intercultural cross-fertilizations, but shared and inherited elements do crystallize in unique literary configurations. For instance, in pre-Harlem Renaissance African American

fiction the passers are rarely tragic figures, and even when tragedy does befall them, it is most clearly indicated to be the result of virulent prejudice and discrimination. The lingering suspicion that the mulatto's or mulatta's downfall may stem from some intrinsic, genetic flaw of character (a suspicion that can still be detected even in Mark Twain's or George W. Cable's novels) is conspicuously absent. (Fabi 3)

ファビによれば、ブラウンのようにハーレム・ルネサンス以前に活躍したアフリカ系アメリカ人作家の小説では、白人としてとおしている混血の人物が悲劇的であることはまぎらないし、たとえ悲劇が彼らに降りかかったとしても、それは悪意のある偏見や差別の結果によるものであると明示されている。混血の登場人物は不幸になるように遺伝的に決定されているという「悲劇の混血」像は白人のパトロンの介入があったハーレム・ルネサンス以降にアフリカ系アメリカ人作家によっても創作されたとファビが指摘するように、ブラウンが描いたジョージは遺伝的な欠点など付与されず、悲劇的な結末からも逃れるように設定されている。

1920年代ハーレム・ルネサンスの起こった時期と「ムラトリー」というカテゴリが国勢調査から消滅した時期が重なることは興味深い。川島浩平は20世紀の最初の30年間にニューニグロ運動を経て、黒人であることの意味づけに変化が起きたと指摘している。そしてその変化によって、1850年の連邦国勢調査から出現した「ムラトリー」というカテゴリが1920年の調査を最後に消滅したと言及している。

同じ時期に、祖先から黒人の「血の一滴」を受けていること、つまり祖先に一人でも黒人がいることを確認できれば、その人を黒人と見なすという「一滴血統主義」が社会的な認知を得るに至った。これは、この原則が南部諸州によって、1910年のテネシー州を皮切りにつぎつぎと法律に組み込まれた結果であり、ムラトリーの消滅と密接に関わる変化である。(川島 193)

川島によれば、この時期に黒人であることの意味は以前よりも厳格に規定されることとなり、ムラトリーとよばれていた混血の人びともすべて黒人の枠に集約されることになった。この結果、アフリカ系アメリカ人作家たち（おそらく混血という枠組みがなくなったためにアフリカ系アメリカ人のカテゴリに入っている作家も多数いることであろう）

が描く混血の登場人が不幸になるように生まれついているように設定されるようになったという前述のファビの指摘は興味深い。

おわりに

風呂本惇子の解説によれば、ブラウンがジェファソンの娘をヒロインにして小説を書いたことは、「自由と平等を標榜する国家元首までがこのような搾取行為に連座することを痛烈に批判し、奴隷制廃止運動を推進するため」(風呂本 292)であった。ブラウンはイギリスの読者を誘導する作戦としてジョージやクローテル、メアリなど混血の登場人物たちがどれほど立派な人格者であるか詳細に描いている。社会制度の偏りのために思いやり深い誠実な人間が次々に不幸へと追いやられる惨状を描き、奴隷制への非難の声を増幅するような仕組みを作り出している。

ブラウンの描く混血の登場人物には遺伝的な欠点など存在せず、逆にその優れた資質によって社会進化論的な人種の序列を前提とした奴隷制のあり方を糾弾するように創作されており、時代的な限界があるとはいえ、社会に奴隷制に対する議論を突きつける目的は達成することができた。『クローテル』では、混血の登場人物たちが異性装によって人種や性、階級の境界線を飛び越え、純血対混血、男性対女性、主人対奴隷といった二項対立を突き崩し、細分化された序列階梯によって優劣をつけることへの異議を申し立て、時代を変革する士気を鼓舞しているのである。

第6章 人種を越境する女性社会改革者 —フランシス・ハーパーの『アイオラ・リロイ』

はじめに

フランシス・エレン・ワトキンス・ハーパーは19世紀後半、もっとも著名な黒人女性詩人であった。同時に社会改革者としても精力的に活動し、奴隷制廃止や禁酒、女性の参政権のために各地を演説してまわった。しかし死後百年近く彼女の詩や小説は文壇から忘れ去られており、近年になってようやく再度、評価が高まっている。黒人作家の範疇に属すると考えられているハーパーであるが、彼女の伝記を書いたメルバ・ボイド(Melba Boyd)によると、一般的に「レッド・ムラトリー」(red mulatto)と呼ばれる混血であり、ネイティブ・アメリカンや黒人、さらに白人といった多民族の血が混じっている可能性が高いという(Boyd 121)。その後、一滴でも黒人の血が混じると黒人であるという人種差別の装置「ワン・ドロップ・ルール」によって、ハーパーも白人ではないという点がことさら強調されたのであろう。しかし、むしろハーパー自身が黒人として生きることを誇りにし、黒人社会の向上のために人生を捧げたという事実を考えれば、彼女を黒人とみなすほうが妥当であろう¹。

ハーパーの小説『アイオラ・リロイ』が出版された1892年、ジム・クロウ法(Jim Crow laws)やリンチなどによる白人の暴力的支配はピークに達し、黒人社会はつねに脅かされていた(Hodes 176)。黒人女性が公の場で意見を述べることは、差別主義者の攻撃の標的にされる可能性を高め、非常に危険な立場にたつことを意味したが、ハーパーは『アイオラ』において臆することなく人種ではなく個人の才能や努力によって評価される社会をめざすべきだと主張している。

黒人であり女性であるということは社会構造において二重の差別を受けることを意味するので、さらに経済的にも恵まれないことは珍しいことではない。ハーパーも例にもれず、1825年にボルティモアで自由黒人の両親のもとに生まれたが、父母と次つぎに死別し3歳前には孤児になってしまった。母方のおじ夫婦に引き取られ、おじの経営する学校で14歳まで教育を受け、裁縫師として働き始めても本を読み詩作を続け、21歳で初めて詩集『森の葉』(*Forest Leaves*)を出版する。25歳でオハイオ州に移り、教会学校で開校いらい初の女性教師として裁縫を教えた。1860年、3人の連れ子がいるフェントン・ハーパー(Fenton Harper)と結婚し、2年後に娘メアリを出産して、夫婦はオハ

イオ州の農場で働いて生活の糧を得た。しかし、夫は結婚4年目にとつぜん病死した。このときの辛い体験を後につぎのように語っている。

But my husband died in debt; and before he had been in his grave three months, the administrator had swept the very milk-crocks and wash tubs from my hands. I was a farmer's wife and had made butter for the Columbus market; but what could I do, when they had swept all away? They left me one thing—and that was a looking-glass! Had I died instead of my husband, how different would have been the result! By this time he would have had another wife, it is likely; and no administrator would have gone into his house, broken up his home, and sold his bed, and taken away his means of support. . . . I say, then, that justice is not fulfilled so long as woman is unequal before the law. (Boyd 114)

夫の死後彼女には何も残されず途方に暮れた様子がこの語りからよくわかる。逆境が幾重にも重なったなかでハーパーは社会改革の必要性を肌身で感じ、教会の後ろ盾を得て南部の黒人学校や日曜学校などで講演をしてみわった。ちょうど再建時代(1865-1877)にあたる1867年から1869年まで、サウス・カロライナ、ジョージア、アラバマ、テネシーをまわり、元奴隷であった黒人の体験を直接見聞きしたことは、彼女のその後の活動にも多大な影響を与えた。ハーパーが活躍した時代には社会改革をめざす黒人女性が増えてきたとはいえ、まだ手本となる前例が少なく、活動の里程標は自分の手で一つ一つ築きあげていくよりほかなかったであろう。

本章では、ハーパーが黒人女性の社会的地位向上の必要性を感じた背景には何があったのか、またどのように社会改革を推し進めようとしたのかを考察したい。小説『アイオラ』を中心に、彼女の作品を読み解くことによって、ハーパーの活動の軌跡とその意義を探りたい。

蹂躪される奴隷の母性

ヘンリー・ゲイツ・ジュニア(Henry Gates, Jr.)によると、再建時代というむずかしい時期を黒人作家が扱ったのは『アイオラ』が初めてであり、南北戦争をはさむ南部の黒人たちの生活の変化を知る歴史的資料としての価値も高いという(Gates xiii)。ヒロイン

であるアイオラ・リロイの体験をとおして具体的にその変化が語られている。南北戦争前の南部の農園で、アイオラは裕福な白人農園主の父と奴隷から解放されて農園主夫人になった混血の母のもとに生まれたが、自分に黒人の血が流れていることを知らずに育つ。青い目で白い肌のアイオラは上流階級の白人令嬢として育てられ、北部の学校で教育を受け、奴隷制をはじめとする社会制度に対してなんの疑問ももたずに成長する。しかし、南北戦争直前に父が急死し、父のいとこが財産を横取りする陰謀を企て、母を奴隷の身分から解放した手続きにわずかな欠陥があったことを理由に両親の結婚を無効とし、母とアイオラを自分の奴隷にする。奴隷として売買され、労働力を搾取されていたアイオラだったが、奴隷主に性的関係を強要されたかどうかについては曖昧である。

この点では、同じように混血奴隷の不遇を扱っているとはいえ、リディア・マリア・チャイルド(Lydia Maria Child, 1802-1880)が1867年に発表した『共和国のロマンス』(*A Romance of the Republic*)と違いがある。『共和国のロマンス』は美しい女性奴隷たちがどのように裕福な白人権力者に性的に搾取されたのかを詳細に描いている。一方、『アイオラ』では、具体的にヒロインが受けた被害は詳しく語られず、性的な被害を受けたのかどうかの真相も定かではなく、心に深い傷を負いながらも善意をもち続けるヒロインの成長が強調されている。絶望の淵から這い上がり、従軍看護師、戦後には教師、作家、さらに黒人と女性の権利のために闘う社会活動家になり、傷ついた人びとを助ける役割を担っていく。このようにアイオラは「悲劇の混血女性」像とは違い、自分の生き方を自分で選択し、努力と知性で運命を切り開いていく自立したたくましい女性である。

また、アイオラも彼女の母親も白人として通用するほど肌の白い混血で、黒人と白人の両方の立場を体験させられてしまうことにより、両側の立場を理解することができるようになる。アイオラは白人の特権階級令嬢から黒人奴隷へ身をやつし、社会の不正に直面させられることで社会改革の必要性を知る。白人であったときには黒人奴隷解放に批判的であったが、実際に奴隷生活を体験すると、人間性を欠いた扱いに衝撃を受け、自らが白人のときに唱えていた主張を一変させるのであった。いずれもアイオラという一人の同じ人間であるのに、どのカテゴリに属するかということによって人間としての扱いさえ受けることができなくなるという社会制度の不条理を身をもって知ってしまうことになったのである。

なかでも家族制度における黒人の問題は大きく、アイオラの母も結婚によって黒人奴隷から白人農園主夫人へ、さらに手続きの不備からまたしても黒人奴隷へと身分が変る

につれ、家族とも引き離されてしまう。歴史研究家マリリン・ヤーロム(Marilyn Yalom)によると、19世紀南部の法律では、奴隷にされた黒人たちは結婚する権利を認められていなかったが、疑似的結婚は行われており、結婚式も一般的で、その家の白人農園主によって執り行われることが多かった(273)。しかし、白人農園主は所有する奴隷を自らの財産として自由に売買できたので、「主人」の考え一つで奴隷たちの家族生活は崩壊する危険とつねに隣りあわせであった。

『アイオラ』のなかでも黒人奴隷たちが家畜同様に売買され、家族との生活を引き裂かれる悲劇が強調されている。混血奴隷のロバートは幼いときに母親を売られて引き離された恨みを持ち続け、同じく混血奴隷のベン・タンネルは、父親と思われる白人の主人に母親とともに売り払われたと告白している。またアイオラの父親は、奴隷の黒人女性と結婚したと世間に知られるのを恐れて彼女の素性をごく身近な人にしか公表せずに結婚するが、そのことがあとになって子どもたちを悲劇に陥れ、家族を離散させる元凶となっている。アイオラの母やロバート、ベン・タンネルの母親たちは家庭を守り子どもをいつくしんで育てていただろうが、そのような母親の愛情さえも奴隷所有者の金銭欲の前にたやすくねじ伏せられてしまうのであった。法律は黒人奴隷の家族を保護するどころか彼らを白人の所有物に変えて、抵抗する力をも奪おうとしていた。

子どもを取りあげられる黒人奴隷の母親の悲劇は、奴隷制度が廃止される以前に書いた詩においても、ハーパーの重要なテーマになっていた。1854年に発表した反奴隷制を訴える詩“The Slave Auction”は生々しい描写で子どもと引き離される母の無力感と奴隷制の非道さを暴きだしている。また“The Slave Mother (A Tale of Ohio)”²では、奴隷制下で人間性の深いところを傷つけられるくらいなら、子どもを自分の手で殺そうという母が登場する。以下は娘を殺した直後の様子を描いている場面である。

They snatched away the fatal knife,

Her boys shrieked wild with dread:

The baby girl was pale and cold,

They raised it up, the child was dead. (*A Brighter Coming Day* 85)

奴隷制が母親に、子どもを生き地獄で苦めるのか、殺して尊厳を守るのかという究極の選択を迫っているが、この母親の苦悩は後にトニ・モリソン(Toni Morrison)の『ピラヴ

ド『愛されし者』(Beloved)へ受け継がれていった。

奴隷制において子どもへの愛情は、黒人の母親にとって両刃の剣であった。奴隷の身分は母から子に受け継がれ、奴隷の母親から生まれた子どもはすべて奴隷とみなされて白人農園主の財産になる。子どもが増えるほど財産も増えることになり、農園主が自分の財産を増やすために奴隷女性を暴行し妊娠させることもあったという。南北戦争までに南部の黒人の約1割が混血であり、そのほとんどは黒人女性が白人男性から暴力を受けた結果だと考えられている(McMillen 25)。たとえ暴力によって生まれた子どもでも、子には愛情をかけて大切に育てるであろうと見越して、母親の愛情につけ込み蹂躪することで奴隷制は成立していた。子どもへの愛情ゆえに、母親たちは奴隷制の仕組みに縛りつけられ、組み込まれ、利用されてしまうのであった。奴隷制を批判するとき、ハーパーはこのように母親の愛情という人種の枠にとらわれない普遍的な価値観を前面に押し出すことで、白人読者の共感を得つつ、搾取された黒人の人間性を回復しようと試みている。

『アイオラ』のなかでも離散した家族を捜しあて、ふたたび生活をともに始めるといふ、家族の再生が大きなテーマになっている。アイオラが白人であったときには、家族と過す時間を当然のことと考えていたであろうが、黒人奴隷にされたとたん自由に結婚する権利や、平穏に暮らすすべての権利が剥奪されてしまう。しかしそのために社会悪の存在に目を向けることとなり、社会を変えなければならないという意識が彼女のなかに芽生えるのである。変化が激しいほどアイオラのショックは大きくなり、社会制度の不正に対する彼女のめざめも強烈なものとなった。アイオラは黒人になることによって社会改革者への道を歩きはじめ、窮地にある人びとを助けることによって人間的に大きく成長し、白人であったときには得られなかった精神的な充足感を得ることになる。

黒人女性と白人女性との溝

人間が経済活動のなかで物質化されて人権が剥奪されているという主張は、すでに19世紀前半から盛りあがっていた女性解放運動においてもみられた。既婚女性は法律によって夫の所有物に変えられてしまっているという考え方が教育を受けた白人女性たちの間に広まっていった。セネカ・フォールズで女性の権利が宣言されてから1年後の1849年、フェミニストのルーシー・ストーン(Lucy Stone)は友人への手紙に、「愛情のない結婚生活なんてみじめで不自然なものだけど、今のすべての既婚女性のように法律

の名のもとで物に変えられるほどひどいことはない」と書いている (Hartog 122)。また、1837年には南部出身の社会改革者サラ・グリムケ(Sarah Grimke)が「[結婚の]法律以上に女性の自立を破壊し、個性を打ち壊すものはない」「主人の存在のなかにまるで奴隷のように、女性であるというその存在自体を吸収されてしまう」と痛烈に結婚制度を批判している(117)。彼女たちは結婚制度、とくに既婚女性が夫の一部として扱われる「カバチャー」(coverture)と呼ばれる慣例に疑問をもった(115-22)。結婚したとたん妻の財産はすべて家長である夫が管理することになり、妻が自分自身で物事を決断し実行することは難しくなってしまう、女性たちに不利益をもたらしていたからである(123-5)。

ハーパーも白人女性フェミニストたちも法律によって人権が抑圧されている状況を指摘している点では同じだが、白人女性たちが結婚の法律は女性の自立を奪う道具と考え始めた一方、ハーパーは家族と引き裂かれないことが人権の基本と考えて結婚制度を否定しなかった。「あなたたち白人女性はこの場で権利について話しますが、私は悪について話します」(Boyd 115)と語ったハーパーは、同じ女性でも人種による隔たりが大きいことを認識していた。結婚後も自立した個人として扱われることを求めた白人女性たちは、結婚制度の仕組みに疑問を投げかけたが、黒人女性の権利を高めようとするハーパーには奴隷制廃止後、結婚制度をはじめとする人権を黒人にまで広げ、家族が生活を安定させることがまず手に入れなければならない最初の目標であった。19世紀の結婚制度は女性を夫の一部分として扱うという批判がある一方で、家族が一つ屋根のもとで生活を営む環境を保護する役割も果していたのである。ハーパーのほうがより根本的な人権を求めざるを得なかったという点で、白人の女性活動家とは一線を画している。

もともとハーパーは白人女性の社会活動に敬意を表していて、よいと思った作品や人物を素直に認める姿勢を示していた。たとえば、ハーパーはハリエット・ビーチャー・ストウ(Harriet Beecher Stowe)の作家活動を絶賛し、「名前に後光がさす」と詩にうたい(*A Brighter Coming Day* 57)、『アンクル・トム的小屋』(*Uncle Tom's Cabin*)の登場人物のエライザ・ハリスやエヴァの名前を冠した詩も書いている。また、禁酒運動においても白人女性と積極的にかかわり協力していた。

しかし、ハーパーにとって、白人女性はあまり頼りになる仲間ではなくなっていったようだ。1869年、アメリカ平等権協会において、白人女性のフェミニスト、エリザベス・ケイディ・スタントン(Elizabeth Cady Stanton)とスーザン・B・アンソニー(Susan B.

Anthony)、黒人社会改革者フレデリック・ダグラス(Frederick Douglass)が憲法修正第 15 条について話しあう会合が開かれ、ハーパーもそこに加わった。この協会では黒人問題と女性解放の対峙する運動を融合しようとする試みがなされたが、それぞれの主張の隔たりが大きく不調和に終わった。スタントンとアンソニーは、教育を受けた白人男性のほうに「粗野で無知な」黒人よりも頼りになると発言し(Foner 30)、人種問題に対する配慮の欠如を露呈した。さらにアンソニーは、「もし政府がすべての人に裁判制度や参政権を与えられないなら、はじめに一番知性が高いものから与えるべきでしょう……そうすれば女性解放が最初で黒人問題は最後になるでしょう」と白人の優越性を示す論説を彼女が編集する雑誌『革命』に掲載した(Foner 152-3)。女性の参政権を得るために人種差別的な発言をしたことに対して、ダグラスは不快感を表した。白人女性たちと手を携えて運動することに限界を感じ、ハーパーはつぎのように語っている。

When it was a question of race, I let the lesser question of sex go. But the white women all go for sex, letting race occupy a minor position. [I'd like] to know if it was broad enough to take colored women. Miss Anthony and several others answered, "Yes, yes."
(Boyd 128)

人種や性の枠にとらわれずに人権を勝ち取ろうと考えたハーパーであったが、現実には人種間で歩み寄ることのむずかしさを思い知らされる結果となった。この時期、あらためて黒人女性のために社会改革が必要であると認識し、同年、混血の社会改革者が白人至上主義のクー・クラックス・クランに惨殺されるという結末の小説、『ミニーの犠牲』(*Minnie's Sacrifice*)を発表して、黒人女性自身の意識を社会改革へ向けようとしている。男性や白人女性の運動に頼るのではなく、黒人女性の手で社会的地位向上をめざさなければならないと考えたのであろう。

再構築された黒人女性の主体性

南北戦争前のアメリカで女性にもっとも重要な性質であるとされたものは、「敬虔、純潔、従順、家庭性」の四つであったと分析されているが(Welter 152)、アレクシス・ブラウン(Alexis Brown)によると「家庭的であるだけの女性は退屈だ」という上流階級の男性の要求が徐々に高まってきたらしい(Alexis Brown 763)。哲学や古典について夫と議

論し夫の知性を理解できる教育を受けた妻が望まれるようになってきたという。南部でも女性は美しく家庭的なだけでなくある程度の教育も身につけるべきだと考えられるようになってきたため、女子にも高等教育を受ける機会が増えた(Alexis Brown 763)。さらに戦争中に多数の男性教師が徴兵されたために人手が減り、女性が教職に就くようになってきた。ノース・カロライナ州では1877年に男性の教師養成課程が初めて4年制大学として設立されたが、10年後には女性の入学も許可された (Alexis Brown 775)。

このように女子教育を重視しつつあった時代背景を受けて、『アイオラ』のなかでもハーパーは教育によって社会的地位向上をめざそうと読者に呼びかけている。文字の読み書きさえ学ぶことが許されなかった奴隷制時代から脱却し、新しい時代を築くためには、民族全体で社会的地位を向上させ黒人であることに誇りをもてるようになるろうと考えたようだ。ハーパーはとりわけ女性の教育が黒人教育の鍵になると考えていたようで、「男は教育について話すだけで、実際にそのために働くのは母親だ」と述べ (Jacqueline Jones 97)、黒人の母親が昼も夜も身を粉にして働き、子どもの学費を捻出する様子を語っている。黒人女性の教育が未来の子どもたちの教育につながり、やがては民族全体の向上につながると考えていた。ハーパーは講演会で黒人女性の教育における役割を強調し、それが功を奏したのであろうか、実際に1910年の国勢調査では、黒人の女子のほうが男子よりも識字率が高いという結果がでた(Jacqueline Jones 97)。

黒人女性に教育が必要だと考えたのには、ほかにも理由があった。黒人女性は母親となったとき、家のきりもりを一手に引き受けざるを得ない状況があった。奴隷制時代に白人農園主が子どもの父親であった場合、父親不在の家庭で子どもの養育は母親が一人で背負わなければならなかったし(Boyd 178)、前述のロバートやベン・タネルのように子どもに父親の名前さえ教えられない場合も多かったようだ。子どもの父親が黒人の場合も、父親の働きだけでは家族を十分に支えられず、母親が経済的負担も担うことが少なくなかった。ハーパーを含む黒人と白人の教師たちの集会では、「黒人家庭のおもな問題は、女性が忠実でよく働くことにつけ込んでいる無責任な父親にある」(Jacqueline Jones 104)と結論づけられるほど、黒人の母親に負担が大きいことは明らかであった。そういった黒人の母親たちが家族を養う際、教育を受けていることは大きな武器になったであろう。アイオラも、白人であったときには受けた教育をいかす場がなかったが、黒人になり自分で生計をたてる必要に迫られたとき、読み書きはもちろんのこと、それまで身につけた知識が非常に役に立ち、看護師や教師として能力を発揮する。

アイオラは際だって魅力的な女性として小説に登場し、その「上品さや美しさ」で周囲の人びとの驚嘆を得るが、そこにはハーパーの皮肉が込められているように思われる。混血女性は「家の呪い」であって「汚辱」であるという差別的な社会通念をもつ白人たちがアイオラの魅力に次つぎに引き込まれ、自分たちの偏見と葛藤する姿は滑稽ですらある。アイオラは、19世紀の白人中産階級層の女性たちに求められた「美德」のすべてを兼ね備えたうえに、教養も十分に身につけた女性の理想像として描かれている。

奴隷の身分から救いだされたときには将軍に「こんなに若く美しい女性が家畜として扱われ、純潔を守る術もなく野蛮な者に最悪な辱めを受けていたなんて」と憤らせ、また白人医師のグレシャムは「理想の女性」であるとして彼女に結婚の申し込みをする。アイオラにとってもグレシャムは気になる存在であり、心が傾いたこともあったが、「私たちが結婚して、生まれた子どもに黒人の特徴がはっきり表れても喜んでくれますか」と聞いたときに、彼が返事に窮したことを見逃さなかった。グレシャムは進歩的な考え方の白人であったが、アイオラに混血であり奴隷にされていた事実を隠して結婚生活を送るよう求め、人種問題に対する理解に限界があることを示した。アイオラは自分の進むべき方向を確信し、「これからの私の人生は南部の黒人のために捧げます」と宣言する。白人としてとおる容姿をしているアイオラだが、黒人か白人かという二者択一を迫られたとき、黒人社会を改善するために黒人として生きることを選択するのである。

ハーパーが1869年に出版した小説『ミニーの犠牲』でもアイオラ同様に白人として育てられていた混血女性が登場し、黒人として民族の社会的地位向上のために貢献することは、白人として生きることよりも充実した人生を送ることができると語っている。ここから分かることは、黒人であるか白人であるかの違いは彼女の判断一つでどうにもなるような曖昧で不条理なものであるということである。人種のカテゴリによって盲目的に踊らされている人びとの理性を呼び覚まそうと、『ミニー』から『アイオラ』まで20年以上にわたり、ハーパーは一貫して同じ主張をくり返してきたことがうかがえる。

ハーパーは、白人の男性と混血女性との恋愛を題材にすることは多かったが、白人女性と黒人男性の恋愛関係に焦点を移してさらに議論することはなかった。長年にわたり白人と黒人の結婚は法律で禁止され、犯罪としてまで扱われてきたことをハーパーも小説のなかで指摘しているが、異人種間結婚は扱いに注意を要する危険な議論であり、白人女性と黒人男性の恋愛関係はタブー視されていることを熟知していたのであろう。た

たとえば、1864年の大統領選の選挙活動中にも騒動があった。北部の民主党が「ミセジェネーション」(miscegenation)という語をつくり、エイブラハム・リンカーン(Abraham Lincoln)の共和党は人種の境界を越えたセックスや結婚を推奨していると吹聴してまわった(Hodes 144)。そのうえ、二人の民主党員が共和党員のふりをしてパンフレットをばらまき、人種間の平等や結婚を誇張して宣伝することで白人の不安を必要以上に煽ったのであった。

マーサ・ホーデスによると、ハーパーが『アイオラ』を出版した1892年がリンチ事件のピークにあたるという(176)。白人女性をレイプしたという根拠のない噂によって黒人男性がリンチされるという事件は、南北戦争前、戦中には比較的まれであったが、ポスト再建期にいたって急増し、1882年から1900年までの間に南部では1千人以上がリンチによって殺害された(Hodes 176)。ホーデスは、リンチは社会的地位を有利に保ちたいという白人たちが作りあげた仕組みであり、法的に奴隷制が廃止された後も実質的に奴隷制を存続させるねらいがあったと説明する(Hodes 202)。こういった白人の不安は現代においても無縁ではない。ヤーロムの調査によると、アメリカ合衆国の41州で異人種間の結婚を禁止する法律が施行されたが、サウス・カロライナでは異人種間結婚を公的に禁止する条項を1999年まで州法から外さず、アラバマは同様の条項の削除をめぐる住民投票を2000年まで先延ばしにしていた(Hodes 246)。

白人側が暴力によって白人女性を守ろうとすればするほど、白人女性が人間とは思えないほど美化され、相対的に黒人女性の地位が低下するように仕組まれているが、ハーパーはこの人種差別の根源ともいえる仕掛けに果敢に挑戦している。混血女性が白人女性以上に完璧な女性の理想像であると設定することで、白人女性の神格化に疑問を投げかけ、女性に対する評価は人種ではなく個人の人格で判断されるべきではないかと問いただしている。一見センチメンタルに思えるハーパーの表現の裏には、黒人女性の主体性を再構築することから黒人社会全体の向上をめざした強い意志が潜んでおり、自己主張しながらも多様な読者層の共感を得ようとした意図が隠れている。

おわりに

アイオラというヒロインの名前は黒人女性社会改革者アイダ・B・ウェルズ(Ida B. Wells)のペンネーム「アイオラ」からとったと考えられている(Boyd 220)。ハーパーが『アイオラ』を出版した同じ年に、ウェルズは『南部の恐怖、リンチの全様相』(Southern

Horrors: Lynch Law in All Its Phases)を出版していて、互いに影響を与えあっていた。ウェルズはハーパーより40歳近く若かったが、考え方や政治的姿勢がハーパーと似ていて、二人とも黒人リンチを積極的に批判した。とりわけウェルズは、1890年代初頭、700件にもわたるリンチ事件を検証し、黒人が経営するニューヨークの新聞社で事件の詳細を発表し続け、全米でもっとも有名な反リンチ運動のリーダーであった(Hodes 190)。小説のヒロインの姓は伝説で王者を意味し、名前をアイオラとしたことは、ウェルズの活動に強く共感し、暴力による黒人支配に対して抗議する意味が含まれている。『アイオラ』の出版から4年後の1896年、ハーパーやウェルズは黒人女性のリーダーたちと集まり、いくつかの団体をまとめて全米黒人女性協会を創設し、これによって黒人女性の問題を議論する全国的な場がついに設けられた(Carby 96)。

肉親の縁薄いハーパーは、晩年には最愛の娘メアリに先立たれ、あとを追うように2年後の1911年に亡くなっている。ハーパーは人種や性ではなく、個人の人格や努力で評価される社会をめざすべきだと主張し、差別主義者の暴力による支配と闘い続けた。黒人であり女性であり孤児であり寡婦であったハーパーは自己の体験を社会の不平等を暴露する一例として使い、演説や詩、小説の題材にして社会改革の重要性を訴えた。今日、彼女の作品にふたたび注目が注がれているのは、作品のもつ魅力とともに、人種問題や性差別が今なお人びとの心に暗い影を落としている現実があるからであろう。

第7章 グラスゴウの『この世の中で』における混じることのない血

はじめに

『この世の中で』はエレン・グラスゴウの最晩年の作品で、グラスゴウはこの作品によってついにピューリッツァー賞を受賞した¹。出版直後からワーナーブラザーズが4万ドルで映画化権を獲得し、ジョン・ヒューストン監督によって映画が撮影された。日本語では『追憶の女』という映画タイトルが付けられている。1942年に完成したが、あからさまにアメリカの人種差別を描いているということで1943年の戦時下の検閲で海外での上映が禁止された。グラスゴウの小説の中でも最もわかりやすく南部の人種問題を取り上げており、ハリウッド映画が「アフリカ系アメリカ人を召使でも道化でもなく普通の人物として普通に描いたおそらく最初のもの」(藤井)であると評されている。

マリオン・K・リチャーズによると、グラスゴウ作品では多くのアフリカ系アメリカ人は能力があったとしても白人に依存して生きており、混血の人物は奴隷制の罪の徴として扱っていると述べている(Richards 129)。また、アメリカにおいて伝統的なアフリカ系アメリカ人表象は、デイヴィッド・W・ノーブル(David W. Noble)によれば「サンボかデヴィル」として描かれてきたと指摘している。サンボとは白人の主人のご機嫌をとるお気楽な黒人のステレオタイプであり、デヴィルとは強姦魔や冷血な殺人鬼などを含む反社会的な黒人男性像のステレオタイプである(Noble 82)。しかし、『この世の中で』については、混血の男の子が社会で地位を得ようと努力するが壁にぶつかる場面を描いており、サンボでもデヴィルでもない普通の人間として描き出されているように思われる。これは、グラスゴウ作品が世界大戦を背景とした時代の変化を取り入れ、社会的通念に合わせて人物を創作した結果、黒人描写に変化が表れていることを物語っているであろう。

本章では混血の登場人物パリー・クレイ(Parry Clay)の描写によって南部における血脈とは何を意味するのかを考察し、南部を批判的に描き近代化の必要性を説きながらも、遺伝の表象に関して時代的、地域的な限界があったグラスゴウの立ち位置を改めて考察したい。まず、小説のあらすじから見てみたい。ヴァージニア州リッチモンドのティンバーレイク家の当主エイサ(Asa)には二人の娘がいた。姉のロイ(Roy)は控えめな性格で医師のピーター(Peter)と結婚しており、妹のスタンレイ(Stanley)は奔放でわがままな性格で、弁護士のクレイグ(Craig)と婚約していた。しかし、スタンレイは姉の夫と駆け落

ちし、生活が破綻するとピーターは自殺、実家に帰ってきたスタンレイはロイに魅かれていた元婚約者のクレイグと寄りをもとにする。そのような時、スタンレイが乱暴な運転によって少女をひき逃げし、その罪を運転手のパリーになすりつける。パリーは大学へ進学して弁護士になる夢を抱いていたが、スタンレイの引き起こした事件に巻き込まれて夢は打ち砕かれてしまう。

グラスゴウの研究者であるジュリアス・レイパーはパリーについて次のように述べている。

The contrast is stark: in forty years, Glasgow's aristocrats have lost their hope as well as their unwitting power for good; the prospects for a man like Parry, who is visibly white but legally black, seem much less sanguine than those confronting the poor white. Parry has less hope because the forces that oppose him from without penetrate his inner world. There he experiences a confusion between his white and black visions, a conflict between what he wills to be and what society tells him he will be. (*From the Sunken Garden* 180)

レイパーによれば、後半のグラスゴウ作品では40年のうちに、上流階層の人物たちは希望や善意を失ってしまった。また、パリーのような肌の白い混血の人物にはプアホワイトの人びとよりもずっと人生の希望がないように描かれていて、内在する白人と黒人の両方の視点を備えていることによって、自分が望む人生設計と社会が彼に期待する役割の乖離を大きくしている。この点について、小説の引用から具体的に見ていきたい。まず、エイサがパリーに話しかけている場面を取り上げる。

“I'm studying at night. I'm trying to learn law.”

“Don't go too fast. If you go too fast, you'll give out before you get anywhere.”

Words, words, Asa thought, empty words, rattling like husks. He had known several ambitious Negroes, but they had all suffered from an arrested intelligence. They had been too young to understand what they wanted, and by the time they had ceased to struggle, it was all over, the ambition, the restlessness, the unstable endeavour. (*In This Our Life* 37)

パリーが昼は忙しいから夜に勉強しており、ゆくゆくは大学へ進学して法律を勉強したいとエイサに告げる。パリーは努力と向上心で収入の良い仕事につき、家族の生活を楽にしたいと願う頭脳明晰な男の子であるが、エイサは今までの経験から、志のある黒人はみんな知性を抑えられて苦しみもがき、その挙句に希望を踏みにじられて絶望していたことを知っており、パリーの努力もうまくいかないのではないかと悲観している。

エイサがパリーを見るたび、繰り返しこの予感が付きまとう。次の引用ではパリーが通りを歩いているのを見て、エイサが不安を覚える場面である。

When the boy had crossed Washington Street, with Jasper at his heels, and had been swallowed by the shadows on the opposite pavement, Asa looked sadly after the two lost figures. It was hopeless, he thought, for nobody who possessed the power to help would be interested. The best thing ahead of Parry, if he kept his manners and his neat appearance, would be a place as a porter in a Pullman car or a waiter in one of the better hotels. (*In This Our Life* 39)

パリーがこのままきちんとした身なりを保って成長したとしても、彼が手に入れることができる最も幸運な仕事は列車の荷物係かホテルの給仕係でしかなく、彼が身につけようとしている法律の知識は将来の仕事には役に立たないということをエイサはむなしく感じている。エイサには南部の黒人には職業選択の自由が阻害されていることや、どんなに努力し、あがき苦しんでもそこから逃れることができないことを今まで何度も見てきた。

また、エイサはパリーについて黒い血と白い血が憎しみあいながら体に流れていることが苦しみの原因であると考えている。「黒い血」と「白い血」というものは想像上の存在にすぎず、祖先に黒人と白人がいたことを比喩的に表現しているのであるが、あたかもパリーの体内で黒人と白人の遺伝子のどちらがその容姿や性質の特徴を露出させることができるかを競い合っているようであり、相容れない二つの要素が体内で抗い合う状況によって、パリーは幸せな人生を歩めない運命を背負っているという言外の意味を含んでいる。

There was something about Parry, who was neither white, brown nor black, which appeared to defy grouping or classification. There was a kind of unconscious pathos which disturbed the older man, and awakened, strangely enough, an obscure and illogical sense of contrition, as if he himself were to blame for some act of injustice in which he had taken no part, and of which he had not [sic] been aware. The trouble with the boy was that he had no place anywhere; he did not belong in any unit. He stood wistfully between two hostile elements. (*In This Our Life* 266-7)

さらに、肌の色から人種のカテゴリが判断できないパリーには、グループ分けや分類を拒むような何か社会秩序を乱すものが備わっているとエイサは感じている。これは、パリーの存在自体が南部の純血主義の理論に潜む誤謬を指摘しているからであり、社会階層から利を得ているエイサにとっては、ぼんやりとパリーの存在自体が不快であった。パリーの中に流れる多民族の血は、白人が奴隷として黒人を暴力を用いて従わせていた歴史の徴だという罪悪感を引き受けさせられているようで、エイサは先祖の罪をあたかも自分自身が糾弾されているように感じたのだ。このように、グラスゴウは白人、黒人といった人種のカテゴリに収まりきれないパリーのような混血の人物を描き、二項対立で論じられてきた南部の人種主義に根本的に疑問点があることを指摘している。

エイサは自分がかかわっていない先祖の暴力による黒人女性の支配を自分が非難されているような嫌な気持ちになり、パリーを見るといつもエイサは居心地悪く感じた。また、パリーにはどこにも属していないというあいまいさが感じられた。エイサにとってパリーのような肌の色の白い混血の人物は、白人と黒人のどちらの社会にも押し込めることができないため、伝統的な定義におさまりきれない、今までの社会のあり方に変化をもたらすかもしれないという不安を呼び起こす存在であった。

そんなパリーだったが、今までの必死の努力の甲斐があつて奨学金を得ることができ、大学に進学する夢に一步近づくことができた。彼はそれを手放しで喜び、クレイグに報告する。

“Parry has taken another scholarship,” Craig said in his sympathetic voice, which was friendly without the slightest accent of patronage. “I’ve just told him I’ll see that he goes to Howard University next year.”

“I’ll certainly try hard, Mr. Craig,” Parry answered, “and none of us will ever forget it.” His eyes were liquid with joy, and his expression had softened from its glazed immobility. (*In This Our Life* 415)

クレイグは「パリーは来年、ハワード大学に進学できるね」と声をかけて、パリーのがんばりを称える。それに答えてパリーは涙をうかべて感謝の言葉を口にする。しかし、パリーの努力は周囲の人を破滅に追い込むほどの気ままなスタンレイによって潰されてしまう。パリーはスタンレイの起こした事件の容疑者として拘置所に拘留され、一晩中暴行をうけ、その一夜でパリーは精神が崩壊してしまった。

パリーが留置されたことに関して、エイサは娘のスタンレイに次のように問い詰める。

“Oh, I can’t bear it! Oh, Father. . .” How often had he heard that cry from her, and how often had she escaped, by weakness alone, from the full burden of circumstances.

“Neither can Parry bear it. He hasn’t the stamina.”

“Will they send him to prison?”

“If they believe he’s guilty, it will go hard with him.” (*In This Our Life* 508)

スタンレイは自分が疑われると、「こんなこと耐えられない」と父親エイサに訴え、エイサはパリーだってつらい思いをしていると告げて、スタンレイにパリーの無実を認めるように促す。その後、パリーの釈放に向けてエイサは尽力し、その甲斐あって運よく一日で拘置所から釈放されたパリーだったが、すでに精神に異常をきたしてしまっていた。結局、パリーは寸暇を惜しんで努力を続けたにもかかわらず、奨学金をもらって大学へ行く夢はかなえられなくなった。

She pushed a chair toward him, but the boy stepped quickly aside. “I can’t sit down in here, Ma. I’m crawling. You’d better keep Jasper away from me. Jasper never was lousy.” When he moved, it was to take his handkerchief from his pocket and carefully wipe his moist face and hands. He seemed to feel dirty, and his skin looked more bluish than yellow. There were smudges of brown under his eyes and in the hollows of his cheeks, as if his darker blood had risen to the surface and seeped through.

His attitude appeared to be beyond rage, beyond resentfulness, beyond everything but bewilderment. (*In This Our Life* 575-6, 下線は筆者による)

母親がパリーに椅子を差し出しても、パリーは座ることもできない。留置場での仕打ちによって自分は汚れてしまったという強迫観念に襲われ、自らの汚れをハンカチで拭き取ろうとするが、その汚れは物質的なものではなかったもので、いくら拭いても消えることはない。「彼の肌は黄色というよりむしろ青みがかった。目の下の落ちくぼんだ頬には茶色い汚れがあり、まるで黒い血が表面に現れてしみだしているかのようだった。彼の態度は怒りや恨みなどのすべてを乗り越えて、ただ困惑していた」という下線部分の表現には、普段は潜んでいる黒人の血が意思ある生き物のように体中をのたうち回り、いざという時には体外に飛び出して黒人の課せられた運命を皆に思い知らしめようと息を潜めているかのようである。

いつもは体内に隠れているパリーの黒人の血が表面に浮かび上がってきたという表現は、彼がどれほど黒人に課せられた運命から逃れようとしても逃れられないことを暗示している。パリーの努力はエイサの予想どおり、実を結ぶことはない。20世紀前半のアメリカ南部で黒人として生きるということは、すべての努力を理由もなく踏みにじられる可能性があるということが、生まれ落ちた時にすでに決まっているということを意味していることを、混ざらない血という表現には込められている。当初は遺伝決定論にあらがったパリーであったが、ついに氣力を奪われ、エイサの予想どおり彼の知性はただ彼を苦しめるだけの不必要な能力になった。

おわりに

グラスゴウがパリーの描写に希望や努力を打ち壊される普遍的な人間の苦しみを描きこんだことは、混血の人物の人間性を回復させる試みであり、従来のある社会のあり方に違和感を覚えつつあることを物語っている。グラスゴウは古典的な人種の序列階梯に付随する不平等な社会を描き、人種のカテゴリに収まりきれない人物に注目することによって、人種間の境界線が定かではなくなり、結果的に定義そのものに矛盾があることを指摘している。しかし同時に、マイノリティが抑圧される社会の仕組みに疑問を投げかけた裏には、藤井仁子の解説のように、太平洋戦争に総力戦体制で挑むため、アメリカ国内で白人や黒人などと人種の分断を維持するよりも、国家総動員で一丸となって敵国

に向かっていこうという戦意高揚のための国策の影響が表れている。そのような時代的な追い風もあって人種や性の概念による社会的な束縛がゆるみ、社会的価値観の制約を受けながら作家活動を続けていたグラスゴウ作品も血の限界が後退しつつある可能性を感じていたことが読み取れる。しかし、結局は血の定める宿命から逃れられなかったパリーを描くことによって、遺伝によって人生が支配されてしまう南部社会のあり方を再度確認することになっている。グラスゴウは南部の人種主義に対して抵抗感を持ちながらも、南部で受け継がれてきた人々の伝統的価値観を反映している社会制度は変化させることが難しく、それゆえに人種問題も簡単に解決できる問題ではないことを混血のパリーの描写をとおして表現していると思われる。

第5、6章で扱ったウィリアム・ウェルズ・ブラウンやフランシス・ハーパーの混血像は、白人女性以上にすばらしい素質を身に備えている混血女性たちを描き出すことによって、黒人に対する偏見を取り除き、社会的地位の向上を目指した。それに対してグラスゴウの描いたパリーは懸命に努力する人間が先祖に黒人もいたという遺伝的な理由だけで努力が実を結ばなくなるという不条理さを描いており、パリーには現実離れした過度に美化された素質を付与しようとはしていない。グラスゴウはパリーを真面目に努力する人間が宿命によって破滅することを描くことによって、ブラウンやハーパーとは違った角度から人種のカテゴリに疑問を呈している。パリーは生きづらい社会の中でもがき苦しんだにもかかわらず、結局のところ努力が実らず、南部社会における人種主義の根深さを浮き彫りにしている。

パリーの体内には白人と黒人の血が交じり合わずに流れていると表現されており、つまりそれは人種的な融和のない南部社会の縮図と考えることができ、その人種間の対立によってパリーは蝕まれ、混乱に陥れられている。ブラウンやハーパーの描いた混血の登場人物は、理想的な南部白人女性像を混血女性にも適用することで黒人社会の地位を白人社会と同じ地位にまで引き上げることを目指していた。その一方、グラスゴウの描いたパリーは現実的な描写によって混血の人物が描かれており、「サンボ」でも「デヴィル」でも過度に美化された人物でもないひとりの人間として混血の人物像が描かれた点において、従来の南部文学に対して一新機軸を出したものといえる。

第 III 部 南部白人女性と病魔

第 III 部の目的

第 III 部では白人女性と病魔という点から、南部における女性像を考察したい。まず第 8 章では、グラスゴウとほぼ同時代に活躍したアフリカ系アメリカ人作家ラングストン・ヒューズとリチャード・ライトの描く白人女性像の分析をとおして白人女性の神格化されたイメージを覆すことから、序列化された人種や性の概念をマイノリティ作家の立場からどのように崩そうとしているかを指摘したい。ヒューズとライトの描く南部白人女性像にはセンチメンタリズムの有無に違いがあるものの、人種や性の序列階梯を破壊してアフリカ系アメリカ人の社会的地位を回復しようとする方向性によって通底している。ヒューズやライトの描くモンスター化された病的な白人女性像はグラスゴウの描く女性像とは異なっているが、生まれ落ちた家系によって人生の選択肢を奪われる点や、遺伝に縛られた人物が自由や平等を絶望的に求めるとき破壊的な行動をとらざるを得ないという点において共通項がある。また、ヒューズとライトと同様に、グラスゴウも H. L.メンケンの痛烈な南部批判の記事を読んでペンの持つ力強さを目の当たりにしており、南部を外側からの視点で眺め、変革を促しているという政治的立場も共有している。

グラスゴウとライトに自然主義的な傾向があることは偶然の一致ではない。彼らの作品では血脈や家系による遺伝決定論の呪縛が主人公を苦境に陥れている。血筋によって決定づけられる資質は変えることができないという遺伝の概念よって登場人物たちは自由に生きる権利を奪われている。多くの作品の結末に待ちうける破滅は、作家たちが生きづらい社会の有り様を描くことによって改革の必要性を提示している証しになっている。たとえ彼らの闘いは当時の遺伝をめぐる社会文化的言説を崩すところまではたどりつかなかったとしても、社会に疑問を投げかけ、注目を集めることには成功している。

さらに、第 9 章では中後期のグラスゴウ作品『保護された生活』とライトの『アメリカの息子』を分析し、対極的な作風の二人が実は同じように人種や性にまつわる社会的神話と格闘し、脱却を図っていたことを読みとる。第 II 部で取り上げた南部における遺伝にかかわる問題とグラスゴウがいかに格闘していたのかを、ライトの描く白人女性像との比較から考察する。『保護された生活』のイーヴァは絶世の美女であるが、夫の気持ちをつなぎとめるための手段として病身であることを利用することしかできな

った。家庭に入った女性はいかに振る舞うべきかという社会規範に、グラスゴウが時代的な制約を受けつつも疑問を呈していたことを指摘したい。

最終章では、グラスゴウと彼女の文通相手である南部文壇を代表する批評家アレン・テイトとボルティモアのジャーナリスト H. L.メンケンとの往復書簡について分析する。テイトとメンケンはアメリカ南部のダーウィニズム受容に関して正反対の立場をとっており、政治的に激しく対立していた。グラスゴウはこのように意見が激しく対立する2人の批評家と文通を続け、友人として心を通わせるようになるが、そのためにグラスゴウは2人の妻たちとの間に女性同士の絆（シスターフッド）を築いていたことを指摘する。テイトの妻キャロライン・ゴードンと、メンケンの妻サラ・ハートはともに作家活動をしており、特にハートはグラスゴウ作品の熱心な読者であった。彼女は度重なる病気によって夭折し、グラスゴウとメンケンは彼女を失った心の痛みを分かち合うことで友情を深めた。グラスゴウは妻たちを味方に付けることから、舌鋒鋭いメンケンやテイトと友好を深めることができたのだ。白人男性の批評家が中心的役割を果たしていた当時のアメリカ南部文壇において、批評家の妻を味方につけるという戦略は、独身女性作家グラスゴウが成功するのに大いに有効な手段であったことを指摘する。

第III部の目的は、グラスゴウとマイノリティ作家たちが南部の人種主義を支えていた遺伝にまつわる社会的神話に疑問を呈し、人種や性によって定められていた限界が後退しつつあることを、多くの南部白人女性の登場人物が精神的、肉体的な病を患っていたこととの関連から読み解きたい。

第8章 モンスター化された南部白人女性像 ーラングストン・ヒューズとリチャード・ライトの比較研究

はじめに

アメリカ南部文学研究者キャサリン・リー・サイデルは「サザンベル」(Southern belle)と呼ばれる南部白人女性像は、作家の南部に対する視座を完璧に示しており、南北戦争後に南部が退廃するにつれてサザンベル像も変わっていったと論じている(Seidel 164)。また、『南部の精神』(*The Mind of the South*)の著者 J. W. キャッシュも、南北戦争前には南部白人女性は南部の「守護神」(Palladium)であり、そのイメージは屈強な男性にさえセンチメンタルな涙を誘う力があつたと指摘している(Cash 86)。サイデルやキャッシュが論じるとおり、南部白人女性は南北戦争前には従順で清楚なイメージが概ね定着していたが、20世紀には神経過敏で自己中心的な女性像が描かれるようになった。つまり、「南部の美德の象徴」から「南部が内包する悪徳の体現者」へと変化した南部白人女性像は多くのテキストに見ることができる。

このような南部白人女性像の変遷においてアフリカ系アメリカ人作家との関係は見逃されがちであるが、本章ではラングストン・ヒューズとリチャード・ライトの作品に現れる南部白人女性像に焦点を絞り、アメリカ南部文学における人種の境界を越えた作家たちの相互関連性について考察したい。ヒューズとライトは同時代を生きたアフリカ系アメリカ人作家であるが、ヒューズはハーレム・ルネサンスで注目を集め、ライトはポスト・ハーレム・ルネサンスの南部出身の作家として評価されており、彼らの作品に登場する南部白人女性像はかなり異なる¹。ヒューズは「シルエット」(“Silhouette,” 1936)と「南部」(“The South,” 1922)で、南部白人女性は冷酷非情で北部女性のほうがまだましだと批判しながらも、南部白人女性の美しさは人の心を魅惑するとうたい、白人女性に対するセンチメンタリズムを根本から覆すことはしなかった¹。ここには白人のパトロン、読者への配慮が感じられる。それに対し、ライトの短編「影を殺した男」においては甘い表現が一切はぎ取られ、白人女性像に付与された従来のセンチメンタリズムが、マルコム・カウリーの指摘する自然主義的な冷徹さで徹底的に破壊されている(Cowley 430)。

ここでは、ヒューズとライトの作品における南部白人女性像をとおして、アフリカ系アメリカ人男性と白人女性像の文学上での関係について考察したい。ヒューズとライト

はともに 20 世紀を代表するアフリカ系アメリカ人作家であるが彼らの作品に登場する白人女性像はかなりの相違が見られる。2 人の女性像の比較から、アフリカ系アメリカ人文学が人種とジェンダーの境界を越境しつつ、グラスゴウの南部白人女性像の変容と共振していたことを考察したい。

ヒューズの南部白人女性像

まず、ヒューズの詩「シルエット」に登場する白人女性と黒人男性の関係が、人種と同時にジェンダーの序列階梯も攪乱している点に注目したい。

“Silhouette”

Southern gentle lady,

Do not swoon.

They’ve just hung a black man

In the dark of the moon.

They’ve hung a black man

To a roadside tree

In the dark of the moon

For the world to see

How Dixie protects

Its white womanhood.

Southern gentle lady,

Be good!

Be good! (171)

「シルエット」は短い詩だが、人種間の対立の構造とジェンダー規範の関係をよく表しており、南部の人種主義が性別役割分担といかに密接な関係にあるかを示唆している。白人女性の女性性に過度な価値を付与することで相対的に他の人種の女性性の価値を下げ、白人女性を支配し得る者が人種間の権力闘争に勝利した者だという白人男性側の

論理を支えている。そのため、「シルエット」にみられるように、黒人男性が白人女性と遭遇するときには、命の危険をもたらすほどの緊張した状況に陥る。

また、この詩においては1つの単語に二重の意味を持たせる技巧が使われており、それによって作者が白人に対する批判を婉曲的言い回しにすることに成功している。例えば2行目の *swoon* は、「気絶する」という意味と、「夢中になる」という意味がある。前者では、白人女性が黒人男性におびえて、その恐怖から失神するという白人女性のステレオタイプのかよわさが前景化されている。それに対して後者では、白人女性から好意を持たれることは黒人男性にとって命取りであるので自分に夢中にならないでほしいと、黒人男性側が白人女性を敬遠している場面を表している。つまり、この語り手は男性として自分に魅力があることを自負しており、ユーモアを交えつつも白人と黒人の間の力関係に攪乱を起こそうとしている²。

最終行に注目すると「いい子にきなさい」と黒人男性が白人女性をなだめる言葉で詩が締めくくられている。これは子供に対して大人が注意するときを使う言葉であり、南部白人女性は子供のような存在であることを皮肉を込めて描いている。彼女たちは自立する手段を持たないため自分の身を守るためには白人男性の力を借りなければならず、それゆえに保護されるべき未熟な存在としてふるまい続けなければならない永遠の子供とも呼べる存在である。大人として成長すると保護されなくなるので、生きていく戦略として精神的成長を止めてしまわなければならない。そして彼女たちの気まぐれに振り回され対応に苦慮している「大人」である黒人の姿が浮き彫りになり、ここでもまた白人対黒人という人種間の力関係を攪乱する試みが読み取れる。

次にヒューズの「南部」という詩においては、南部白人女性がさらに退廃的に描かれている。

“The South”

The lazy, laughing South

With blood on its mouth.

The sunny-faced South,

Beast-strong,

Idiot-brained.

The child-minded South

Scratching in the dead fire's ashes

For a Negro's bones.

Cotton and the moon,

Warmth, earth, warmth,

The sky, the sun, the stars,

The magnolia-scented South.

Beautiful, like a woman,

Seductive as a dark-eyed whore,

Passionate, cruel,

Honey-lipped, syphilitic—

That is the South.

And I, who am black, would love her

But she spits in my face.

And I, who am black,

Would give her many rare gifts

But she turns her back upon me.

So now I seek the North—

The cold-faced North,

For she, they say,

Is a kinder mistress,

And in her house my children

May escape the spell of the South. (173)

口に血糊をつけ人骨を探して暖炉をかき回す女の姿は、カニバリズムを連想させる。また、飽くことを知らずに手当たり次第に獲物に狙いを定め、人肉を食らう南部女性には食欲な誘惑者というイメージも付与されている。南部に要求されるがまま自分の大切なものを差し出し続けた末に命まで求められるようになった語り手は、白人女性を尽きることのない欲望と恐怖の入り混じった対象として描いている。しかし、命を代償とする女の誘惑は、いわばサロメのような世紀末の退廃した悪の魅力も備えている。

南部を具現化した女性はさらに梅毒も患う存在に設定されている。梅毒は1940年代

末にペニシリンを中心とする抗生物質が導入されるまで肉体ばかりか神経や脳を冒し、子孫にまでも禍根を残す不気味な病でありつづけた(川本 154)。19世紀末にく新しい女>を描いた白人女性作家たちは、夫が家庭外から持ち込んだ梅毒がどれほど家庭に脅威を与えるかをサブテキストとした作品を多く残しており、梅毒を「種の退化」、「先祖返り」のしるしとして受け止めていた(川本 163)。例えば、イギリス人作家セアラ・グラントは『ふたご座』という小説で梅毒が夫から妻や子に感染する悲劇を描き、ヴィクトリア朝の性のダブル・スタンダードがもたらす弊害を攻撃するために利用している。このように梅毒は性的不道徳さを示すイコノグラフィ(iconography)として世紀末のイギリスで認知されていたという指摘は示唆に富む。

しかし、世紀末のイギリス白人女性作家たちが白人男性／白人女性という二項対立で、白人女性を犠牲者として比喩的に描き出そうとしていたのに対し、ヒューズはそうした白人女性の論法を利用して、白人女性／黒人男性という二項対立にすり替えている。つまり、子供たちの将来を案じる家庭的な父親である黒人男性と、命の危機さえもたらすような性病を患いながらも自堕落な生活を続ける白人女性という二項対立に替えることで、犠牲者は黒人の側であるという主張をしている。外見上は魅力的な女性の南部であるが、その体内には恐ろしい毒をたたえており獲物の命を次々に奪っていく。もはや南部白人女性は人間ではなく、理性を欠いたモンスターであり、南部社会に毒を振り撒く悪の根源にされている。南部が患う梅毒は人種差別の隠喩でもあり、強い感染力で南部社会に広く蔓延し、人間の精神を蝕んでいる。一方で、語り手である黒人男性は子供たちの幸せを願う常識ある父親であり、その平穏な生活に脅威を与えるのは白人女性の、そして南部がはらむ暴力性や倫理観の欠如であるということはこの詩では訴えている。

このように、ヒューズは梅毒といったような19世紀末の白人文学にしばしば登場するモチーフを換骨奪胎し、白人女性のセクシュアリティが黒人男性にとっていかに脅威になっているかを幾重にも強調している³。しかし、ヒューズは南部白人女性を冷酷であり北部女性のほうがまだましだと批判しながらも、南部白人女性に対するセンチメンタリズムを根本から覆すことはしていない。ここにはハーレム・ルネッサンスの作家として白人のパトロン、読者への配慮が感じ取れる。また、ヒューズの父方の曾祖父は二人とも白人で、母方もフランス人やネイティブ・アメリカンの血を受け継いでおり、さらにヒューズは白人の子供たちが通う小学校で教育を受けたという経験などを考慮に入れると、自身に流れる白人の血についても意識せざるを得ない環境で育ったと言える

(『ぼくは多くの河を知っている』 20-4)。そのためであろうか、ヒューズの詩は白人社会を敵対視して対立を深めようというよりも「人種」という曖昧で不条理な問題に支配されている人間の普遍的な悲哀を浮き彫りにしている。しかしこのような白人社会に根付く「悪」でさえも、そういうものとして受け止めようとする態度は、リチャード・ライトには生ぬるく感じたようで、ハーレム・ルネサンスの作家たちに少なからぬ抵抗感を表明している(Huggins xvii)。

ライトの南部白人女性像

このように白人女性に対して多少の配慮を感じるヒューズに対し、リチャード・ライトはそうした遠慮は一切見せず、白人女性像をその台座から徹底的に引きずりおろしている。具体的にライトの短編「影を殺した男」で、崇拜されていた南部白人女性像が殺人事件の直接の原因となっている場面をみてみたい。主人公のソウル・サンダースは幼少期より「白人と黒人の二種類に分かれた世界で、白人の世界は黒人の世界から心理的にとても遠いところにある」(*Eight Men* 185)と考えていたため、白人が境界線を越えて自分の領域に侵入してくることを過度に恐れるようになった。

ワシントンにある教会の掃除係として働いていたとき、白人女性のメイベルがソウルを意識していることに気付き、恐怖を感じて彼女を遠ざけようと必死になる。メイベル・エヴァ・ハウスマン(Maybelle Eva Houseman)は現実には偏執的な中年女性として描かれているが、その名前が連想させるように彼女の空想の中ではいまだにサザンベルであり、19世紀文学に普及していた白人女性崇拜を盲目的に受け入れている。この人種差別的な価値観を植え付けられたメイベルがソウルに近づいてきたとき、ソウルは敏感に危険を察知し、彼女を視界から消し去ろうと過剰に反応してしまう。彼にとってメイベルは人間ではなく存在感のない影にすぎず、その影を消すことに罪の意識はなかった。彼女は自分が被害者であることを世間に知らしめるために叫び続け、ソウルはこの状況を何とかしなければリンチをうけるか逮捕されて処刑されるか、いずれにしても死が待ち受けているという恐怖を感じた⁴。

ここでソウルは人種差別によって殺人犯になるように追い込まれてしまった環境の犠牲者と言えるが、白人女性としての優越性に疑問を持つことのないメイベルもまた、人種差別の犠牲者であるといえるだろう⁵。つまり、この殺人事件はソウルとメイベルの共犯関係によって成り立っており、両人ともが人種主義に踊らされ、事件の犠牲者で

あり加害者であるという構造になっている。人種に付与されたステレオタイプのイメージを忠実に実行し、二人はさらなる人種差別の仕掛けにからめとられてしまった。結局、この小説における殺人は人種間の偏見を容認し助長する社会環境において、起こるべくして起きた事件であると言え、マルコム・カウリーの指摘するライトの環境決定論に基づく自然主義的傾向が現れていると言えるであろう。

ライトは1946年にアメリカを去ってパリに移住し(高橋 41)、その地で最初に書いた短編が「影を殺した男」であった(大内 161-2)。フランス移住後、ライトの後期の作品は自然主義から実存主義へと変わっていったといわれているが、本短編は『アメリカの息子』と似ている殺人場面など、アメリカ社会でアフリカ系アメリカ人に課せられた厳しい環境を冷淡な筆致で描いており、ライトの作風において自然主義の名残を感じさせる作品である。

この作品が白人社会に対する憎悪と暴力行為に満ちているにも関わらず白人読者に受け入れられた理由としては、人間の惨めさが普遍化されて共感が得られたためというだけではなく、黒人と白人の異人種間ロマンスを徹底的に否定しカラーラインを侵犯していない点も一因として挙げられるであろう。南部における人種混交への嫌悪感南北戦争後の奴隷解放以降に強まったといわれており(Hodes 5)、異人種間結婚は南部各州の州法によって長年にわたり禁止されてきた。金澤智が指摘するように、異人種間ロマンスは単にスキャンダラスであるだけではなく、犯罪行為として社会的にタブー視されていた(金澤 48)。ライトの描く生々しい殺人場面には人種差別への強い怒りを感じるものの、主人公ソウルの行動に黒人と白人の人種境界線を侵犯しようとする意図は感じられない。

それどころか、ソウルが境界線に接触することに対してただならぬ恐怖をおぼえ、黒人と白人の異人種間の相互理解が芽生える可能性は徹底的に否定されている。つまり、メイベルから女性的な魅力をそぎ落とし、南部白人女性像に付与されたロマンティックなイメージを容赦なく打ち壊すことは、異人種間の心温まる交流というものは生ぬるい幻想にすぎないということを読者に突きつける手法であった。このために、ライトはソウルとメイベルがいかに相容れない不毛な関係であるのか、つまり白人女性と黒人男性が人種差別のシステムにからめとられてそれぞれが自己崩壊へ転落していく様子を徹頭徹尾、冷淡な眼差しで描写している。

おわりに

以上のとおり、ヒューズとライトの描く南部白人女性像にはセンチメンタリズムの無に違いがあるものの、19世紀の気高い南部白人女性像を破壊することによって、相対的にアフリカ系アメリカ人の社会的地位を回復しようとする方向性によって通底している。また、ヒューズとライトはH. L. メンケンの痛烈な南部批判を読んでペンの持つ力強さを目の当たりにした (*Black Boy* 244-5、『ぼくらは多くの河を知っている』10)。これらのアフリカ系アメリカ人作家と同様に、南部出身の白人著述家にもJ. W. キャッシュやエレン・グラスゴウなどH. L. メンケンの南部批判に影響を受けて創作活動を行う作家が少なくなかった。

このようなことを俯瞰的に眺めると、人種や性別による作家間の境界線が薄れていき、そのかわりに思想による境界線が新たに構築されていった時代の流れが前景化される。南部白人女性像の変遷に見られる人種を越えた作家たちの相互関連性を考察することは、人種、ジェンダー、階級によって分断されがちだった南部の作家活動がそのような環境決定論的な生来の条件以上に、保守カリベラルかといったような作家の後天的な信条によって徐々に再構築されていったという時代の流れを検証する作業であることを示している。

19世紀後半から20世紀前半にかけての南部白人文学における白人女性像が、「南部の悪徳を体現した人物」へと変容していったとサイデルが論じているが、同時代のアフリカ系アメリカ人男性作家たちの作品にも同様の白人女性像が描写されていることが、ヒューズとライトの白人女性像の比較から明らかになった。これによって、人種、ジェンダー、階級といった曖昧で矛盾に満ちた境界線によって定められた限界を作家たちが乗り越えつつあった時代の流れが感じられる。南部白人女性像の変遷とアフリカ系アメリカ人男性作家たちの関わりは、本来、アフリカ系アメリカ人を排除することによって成立していた南部白人社会の文学的世界観が、人種間の優劣に異議申し立てを行っていたアフリカ系アメリカ人作家たちの自己表現をすでに取り入れていた可能性を示しており、アメリカ南部文学のキャノン形成にも実際にはアフリカ系アメリカ人作家たちがいかに深く関与し続けてきたかという本質的な問題を提起するのである。

第9章 アメリカ南部白人女性像の変化

—エレン・グラスゴウとリチャード・ライトの対照的アプローチから

はじめに

エレン・グラスゴウとリチャード・ライトはともにアメリカ南部出身の20世紀を代表する作家であり、新しい女性像を描いて南部社会に潜む問題を暴き出した。二人の作風はまったく異なるが、共にアメリカ社会を自然主義的技法で描き出し、また舌鋒鋭いジャーナリスト H. L. メンケンの辛辣な南部批判に影響を受けた同時代の作家という見逃せない共通点もある。

白人女性と黒人男性の関わりが白人社会のヒエラルキーを脅かす危険な関係として禁忌されていたアメリカ南部の時代背景をそれぞれの作品から読み解き、グラスゴウとライトが異なる方向から文学上の白人女性像の変化を促し続け、2人が社会ダーウィニズム的な人種や性の序列階梯に疑問を抱き、社会のあり様に異なる視座からそれぞれ異議申し立てをしていた足跡を検証したい。

南部白人女性像崇拜

南部白人女性像について『南部の精神』の著者 W. J. キャッシュは、南北戦争前の南部白人文学において過剰に祭り上げられた存在であったと批判的に述べている。また、アメリカ南部文学研究者キャサリン・リー・サイデルによると、20世紀以降にはリアリズムなどの影響により徐々に神経過敏で自己中心的な女性像へと変化していったと論じている。本論では、それらの論考を踏まえて、白人女性像の変容をグラスゴウの『保護された生活』とライトの『アメリカの息子』、短編「影を殺した男」から具体的に考察する。

『南部の精神』の著者、W. J. キャッシュは、南北戦争前には南部白人女性は南部の「守護神」(Palladium)であり、そのイメージは屈強な男性にさえセンチメンタルな涙を誘う力があつたと指摘している(Cash 86)。キャッシュが論じるとおり、以下のように南部白人女性は南北戦争前には従順で清楚なイメージが定着していた。

She was the South's Palladium, this Southern woman—the shield-bearing Athena gleaming whitely in the clouds, the standard for its rallying, the mystic symbol of its

nationality in face of the foe. She was the lily-pure maid of Astolat and the hunting goddess of the Boeotian hill. And—she was the pitiful Mother of God. Merely to mention her was to send strong men into tears—or shouts. (Cash 86)

南部女性は南部の守護神で、女神アテネでもあり、勇気を奮い起こさせる御旗でもあるというような北部との対決において南部が守るべき価値観の象徴であったと、キャッシュは南北戦争前の南部女性像は、従来の女性の理想像を擬人化したものであることを述べているが、ギリシャ神話や英国の伝説を引用し、過度に仰々しい表現を用いることで、その女性像崇拜に対してキャッシュの言説には批判的見解が含まれていることを暗示している。このような白人女性像は、純潔で、見目麗しく、家庭を守るべき崇高な存在として価値を付与され、南部白人のアイデンティティの拠り所として、白人の優位性を示す根拠に利用された。南部人の精神の高潔さを証明する装置として形成されたこの女性像は、戦前の南部文学のテキストにおいてセンチメンタリズムの源泉であり、多くのテキストに見ることができる。

このようなキャッシュの南部女性像への批判を受けて、アメリカ文学批評家サイデルは、19世紀から20世紀にかけての女性像の変遷を考察することで研究を発展させている。サイデルによると、南部白人女性像は南北戦争前には純潔で従順で、信心深い存在として描かれていたが、20世紀になると神経過敏で性的に奔放な、自己中心的な人物として描かれるようになっていった(Seidel 164)。彼女の研究によれば、この変化は19世紀後半から20世紀前半にかけて約100年の間に起こっており、「南部の美德の象徴」から「南部が内包する悪徳の体現者」(Seidel xiii)へと大きく様変わりしたと次のように述べている

A traditional southern—and uniquely American—character, the belle figure has been a perfect vehicle with which to represent the flowering of the Old South in antebellum times, the “rape” of the South during and after the Civil War, and the decay of the South in the glare of modernism in the twentieth century. (Seidel 164)

このように、白人女性はサザンベルと呼ばれ、南北戦争前の華やかな旧南部、戦中、戦後における南部の荒廃、20世紀におけるモダニズムの興隆による南部の衰退を完璧に

体現している文学上の登場人物であると論じている。また、それぞれの作家の南部に対する視座が、そのままサザンベルの性格描写に反映されていると分析し、具体的にはエレン・グラスゴウ、ウィリアム・フォークナー、キャロライン・ゴードン、マーガレット・ミッチェル(Margaret Mitchell)などを例として挙げている(164)。南部女性像は白人の優越性を証明する装置として生産され、南部白人の父権制社会の価値観を照射しているという点で、キャッシュとサイデルの見解は通底している。

しかしながら、モダニズムの興隆や南北戦争後の南部衰退、北部のマスメディアによる痛烈な南部批判などに伴い、南部白人作家自身が南部の白人社会を自己批判的に語るようになり、その南部女性像はますます変化していった。またハーレム・ルネサンス以降のアフリカ系アメリカ人作家の台頭によって、南部白人女性像はさらにイメージを変化させていった。絶対的な白人の優位性の上に築き上げられた19世紀の南部白人女性像は、20世紀に入って人種、ジェンダー、階級間における力関係の闘争が激化していった結果、時代の動きと共振することは避けられなかった。

エレン・グラスゴウの白人女性像

旧南部の価値観を体現した白人女性像を南部女性自身の力で変えていこうとしたのがグラスゴウであり、彼女は新しい女性像を小説に創作することによってサザンルネサンスの先駆けとなった。ここでは1932年に出版されたグラスゴウの代表作の一つ、『保護された生活』に注目し、グラスゴウがどのように女性像を変化させたのか、具体的に見ていきたい。

この小説はヴィクトリアン・ノヴェルの形式を踏襲する3部作の長編であるが、南部のお上品な伝統や過度に理想化された女性像への痛烈な批判になっている。貴族的な旧南部の伝統が女性の生き方の選択を狭め、結果的には理想的女性とみなされていた女性が夫を猟銃で撃ち殺すという衝撃的で残酷な結末を迎えることになる。

主要な人物の一人であるイーヴァ・バードソング(Eva Birdsong)は絶世の美女であり、彼女の美しさを称賛する少女ジェニー・ブレア・アーチボルド(Jenny Blair Archbald)やジェニーの祖父で「将軍」と呼ばれるデイヴィッド・アーチボルド(David Archbald)との関係の中で物語が語られる。イーヴァは彼女に釣り合わないと言われている夫ジョージと結婚して12年が経ち、30代半ばに差し掛かっていたが、その頃にはすでに彼女の美しさは伝説の領域にまで達していたと評されている(*The Sheltered Life* 6)。彼女

の着ているドレスや趣向などは町中で噂され、一挙手一投足に注目が集まった。彼女の夫は魅力的な容姿の男性であるが収入が乏しく、イーヴァは実家から持参した宝石や食器などを売って家計の足しにし、家事に疲れ果てていった。しかし、肉体的、経済的な疲労よりも、ジョージの度重なる浮気によって常に精神的に不安定な日々を過ごしていた。例えば、近所で催されたダンス・パーティーでもジョージは別の女性と過ごす場面を目撃されており、それを知ったイーヴァはショックのあまりにその場に倒れ込み、「気分が悪いから家に帰ると伝えてちょうだい」(*The Sheltered Life* 87)とジェニーに伝言を頼む。「もうこんなことには耐えられない」と訴えるイーヴァに対し、付き添っていたペイトン夫人は以下のように諭す。

“You don’t do any good by giving way, darling. No woman does.” Mrs. Peyton’s thin lips wrinkled and tightened, as if they were pulled by a string, and she added in an intense whisper, “You gain nothing in the world by not saving your pride.”

“But I saw them, Mary. I saw them with my own eyes--”

“Hush, Eva. It is much wiser to pretend that you didn’t. Even if you know, it is safer not to suspect anything.”

“I am flesh and blood. I’ve sacrificed everything.”

“It’s for your own sake, dear. Don’t think I’m lacking in sympathy. Here, swallow this down quickly, and let me pin up your hair. Your lovely lace is all torn.” (*The Sheltered Life* 86-7)

ペイトン夫人は「プライドを失っていいことなんて一つもない」と言って、騒ぎ立てず世間体を取り繕うことが、結局は自分のためになると諭す。このように、イーヴァがもう我慢できないと訴えるたびに周囲の人々が「あなたのためだから」と都合の悪い現実を見て見ぬふりをしてやり過ごすように忠告し、イーヴァはそれに従ってきた。

体面を保つことを周囲から強要されても我慢し続けているのは、自分こそが南部女性の理想像であると自分自身も認識しており、もしもその期待を裏切ってしまうと社会的評価が落ちてしまうと恐れているからである。彼女は常に人々から見られて評価される対象であり、世評にさらされることで絶え間ないストレスを受けていた。社会が彼女に求める姿に答えようとイーヴァ自身もますます南部の伝統的な理想的女性像の鋳型に

自己を押し込めてしまう悪循環にとらわれている。その中でも彼女を南部の伝統の体現者として最も熱烈な称賛をおくるのは将軍であるが、彼の過剰なイーヴァへの陶醉ぶりは滑稽なほどである。以下はイーヴァが体調を崩して寝込み、将軍が見舞いに来ているときの場面である。

She turned toward the sunset, and he saw that she was still beautiful. The thin cheeks, the pinched nostrils, the silver lustre on her bronze hair made no difference. Nothing on the surface could alter the serene integrity of her loveliness. While the glow from the sky transfigured her, he told himself that her head had the quality of light, the pure outline of legend. “Even when she is dead,” he thought, “her skeleton will have beauty.” (*The Sheltered Life* 139)

たとえイーヴァが死んだとしても、彼女の頭蓋骨までもが美しいだろうという表現は、将軍が実際のイーヴァを見て称賛しているのではなく、見えないところまで想像力で補って彼女を完璧な人間に仕立て上げ、想像上の女性を創作していることをはからずも露呈している。彼が称賛しているのは生身の女ではなく、イーヴァに付与された南部に伝統的に受け継がれてきた女性の理想像なのである。将軍とイーヴァが体裁を繕いあって現実を直視することを避けている状況の下では、二人の会話から真実が明らかになることはない。

“I felt that I wanted you to know,” she continued, after a long pause in which he heard the spasmodic rise and fall of her breath. “One can never tell what may happen. If I should die before George, I want you to know how—how splendid he has been. I want you to be his friend always.” (*The Sheltered Life* 143)

「もし私がジョージよりも早く死んだら、彼がどれほど素晴らしい人だったかをあなたには知っていて欲しい」と懇願するイーヴァの言葉には、自らの死後も体裁を繕い続けなければいけないという痛々しいまでの妻の義務感が現れている。どんなにジョージが立派であったかを将軍に知っていてほしいと話すイーヴァの話は真実から遠く、読者にも二人の会話は空虚で問題解決にはなりえないことがわかっている。

将軍は旧南部の伝統を受け継ぐ家柄に生まれた南部紳士であると自負しているが、将軍のプライドのよりどころとなっている家柄には神経症やうつ病の気質が受け継がれていた。その原因は、将軍の祖母が結婚生活の心労や度重なる出産に耐えられず発狂したことにさかのぼる。その後、祖母は亡くなり、葬式から7か月も経たないうちに後妻を娶るというようにしてその祖父は結局3度結婚するが、子供は最初の妻との間にしかいなかったため、アーチボルド家の人間には脈々とその祖母の気質が受け継がれている。

次の引用には、狩りで獲物を殺すことに快感を覚え、狩猟本能に突き動かされていた将軍の祖父と、病身の祖母が自宅に幽閉され、座敷牢で心身共に自由を奪われたまま死んでいったという先祖の歴史が語られている。

A famous hunter in his prime, the old gentleman still pursued with hounds any animal that was able to flee. Fortunately, game was plentiful and game laws unknown in the fields and forests of Stillwater. For nothing escaped his knife or his gun, not the mole in the earth, not the lark in the air. He could no more look at a wild creature without lusting to kill than he could look at a pretty girl without lusting to kiss. Well, it was a pity he had not lived to enjoy the war; for the killing nerve, as his grandson had once said of him, was the only nerve in his body. Yet he had fallen in love with a woman because of her fragile appearance; and when she had gone into a decline after the birth of her fifth child, and had lost her reason for a number of years, he had remained still devoted to her. Against the advice of his family and his physician, he had refused to send her away, and had kept her, behind barred windows, in the west wing of the house. To be sure, when she died, he had married again within seven months; but only his first wife, though he had buried two others, had given him children, and through her the strain of melancholy had passed into the Archbald blood. . . . (*The Sheltered Life* 103)

全盛期には有名なハンターであった将軍の祖父は、狩猟犬を従えて獲物を追いかけるのが常であった。獲物を殺すことに最も興奮を覚える男性だったが、小動物のようなかよわい祖母に恋をした。2人は結婚し、祖母は次々と5人の子供を出産した後、体調を崩して神経症を発症したが、それでも祖父は妻を熱愛して手放そうとはしなかった。妻を精神病院に任せず、窓に鉄格子の入った自宅の部屋で療養させた。その後、妻が死ん

で7か月も経たないうちに別の女性と再婚したが、2人の後妻たちにも先立たれた。しかし、最初の妻だけが子供を残したため、この妻の気質がアーチボルド家の血に流れている。妻の神経症の気質による遺伝決定論が一族を滅亡に追い込むというように仕掛けられている。

この小説の自然主義的な展開であるが、女性の血の影響を受けて将軍の弟は29歳で自ら命を絶ち、将軍の姉はイタリアの男性と駆け落ちしたあげくにウィーンで孤独に死んでいった。そして将軍の息子はキツネ狩りで事故死するにおよび、将軍の血縁者は途絶えていき、彼の直系の孫はジェニー・ブレアただひとりになる。遺伝と環境によって一族が減びていく自然主義的な一族衰退の物語の展開は、アーチボルド家が自然淘汰されて断絶する日が遠くないことを暗示しており、何よりも大切に取り繕ってきた世間体は家名の滅亡とともにまったく意味のないものになる。

この作品における自然主義的傾向は、アーチボルド家の命運を握るジェニー・ブレアが恋愛という本能に捕らわれ、小動物に先祖返りしている場面にも現れている。

“No, it isn’t my fault,” Jenny Blair said aloud. She had not wished to fall in love. She had not, she repeated defiantly, even wished to be born. Something bigger than herself had swept her away in its claws. And even now, after all her struggle to escape, she was still tormented by restlessness. (*The Sheltered Life* 282)

自分の意志とは関係なく何か大きなものが、そのかぎづめで彼女をさらってしまったように感じている。全力で逃げようともがいたが、今でも彼女は抜け出すことができずに苦しみの中にいる。かぎづめ“Claws”は鷲や鷹などの猛禽類が小動物を残忍に殺すイメージを象徴しており、圧倒的な力によって支配され、抵抗できなくなってしまった少女の恐怖心を暗示している。また、ジェニー・ブレアの恋の相手は他ならぬイーヴァの夫ジョージであった。イーヴァはジェニー・ブレアをかわいがり、心を許せる相手だと信頼し、将軍にも言えなかった苦しい本音を告白することさえあった。その彼女と夫との恋愛関係はイーヴァの精神を壊してしまうほどの衝撃であった。

さらにジョージは、将軍や将軍の祖父、将軍の息子と同様に狩りをスポーツとして楽しむ、狩猟本能に支配された男性として描かれている。獲物が逃げるのなら殺してでも所有したいという狩猟本能がジョージを突き動かし、カモを25羽撃ち取ったことを手

放しで自慢する。

“I brought back twenty-five,” she heard him say, “and I shot three times as many.” He spoke with pride; she could tell that he had forgotten her; that his whole mind was filled with the whirring of wings and iridescent bunches of feathers! But he liked them dead. He was never so happy, she knew, as when he had just killed something beautiful. They were scattered everywhere, on the chairs, on the table, on his desk, with his gun and his game-bag beside them. She watched him pick up a duck here and there, look it over with boyish pride, and then lay it down again. He appeared to be perfectly happy. He was not troubled by love; he was not troubled by self-reproach. (*The Sheltered Life* 282-3)

イーヴァはジョージが獲物をしとめた自慢を聞きながら、夫と共感できない自分の孤独を感じている。ジョージはイーヴァが選んだ夫としては見劣りがするという世評を感じており、多くの鳥の命を奪うことでしか自分の能力を誇示することができない。そして、獲物が美しければ美しいほど、ハンターとしての自尊心を満足させることができ、幸福感で満たされるのだった。ジョージにとっては、鳥も妻も自らの自尊心を満足させるための道具に過ぎなかった。つまり、この小説における鳥のイメージは伝統的な家族制度のもとで矮小化された女性性を比喩的に表現している。イーヴァが「バードソング家」に嫁いだことも、鳥と女性の物語中での関連性を示唆している。名前が暗示するように、イーヴァは美しい声と容姿で周囲の人々を魅了し、聴覚的、視覚的な悦楽を与える役割を演じなければならず、いわばジョージの自尊心を満足させる道具として利用されていたのだ。

イーヴァが飼育しているカナリアはエアリエル(Ariel)という名前が付けられているが、これはシェイクスピアの『テンペスト』(*The Tempest*)に出てくる囚われの身である空気の精と同じ名で、『テンペスト』と『保護された生活』の両作品中とも代名詞は he で受けられているが、男女関係なく名乗れる名前である¹。エアリエルはプロスペローの命令に逆らえず、主人に従順に使え続ける。『保護された生活』の籠の中で自由を奪われたカナリア、エアリアルは良き妻というイメージに囚われたイーヴァや將軍の祖母と同様に自分の意志で生きることができない。さらに撃ち殺されたカモの山積みになっ

た死体はイーヴァの精神を映し出していると考えられる。カモの首にくぐられた緑の細い紐は、前の日にイーヴァが自分のドレスからはぎ取ったものであり、カモとイーヴァの共通性を暗示しており(287)、ジョージに殺されたカモの数は何度も傷つけられたイーヴァの自尊心を比喩的に表現している。

小説の結末では、イーヴァはジョージがカモを撃ち取った猟銃を使ってジョージを殺害するが、これは夫とジェニー・ブレアの恋愛関係に気が付いてイーヴァが錯乱状態に陥ったというだけではなく、彼女を縛ってきた社会システムに対する抵抗と復讐であり、世間体を保つための結婚生活に縛られていたことへの痛烈な自己批判にもなっている。美しい容姿と病弱さを武器にして夫の愛や関心をつなぎとめていたイーヴァが年齢を重ねて容姿が色あせたとき、夫と同様の暴力的で破滅的な殺害行為でしか自己解放への一歩を踏み出せなかった。

『保護された生活』においては、神々しい南部女性像のイメージによってイーヴァがありのままの姿で生きることが阻害されており、グラスゴウは伝統主義的な家父長制下で女性が物質化されている状況に異議申し立てを行っている。奴隷制度による経済システムの影響が南北戦争後も残る南部社会においては、人種、ジェンダー、階級の相互の違いが過剰に強調され、イーヴァはジョージの専有物のように扱われた結果、自立する意思を奪われ、かごの中の鳥のような無力な存在になるように仕組まれていたという含意がある。社会システムにからめとられていたことに気が付いたイーヴァであったが、そこから抜け出す決心をした途端に社会不適合者になってしまった。これは、作者が小説に仕組んだ最大の皮肉であるといえるであろう。

このように、創作手法を伝統的な19世紀南部白人文学のセンチメンタリズムから、リアリズムへは自然主義へと文学手法の過渡期であったことがグラスゴウの作品には表れている。これは、家庭小説作家という当時の多くの女性作家が区分されていたジャンルから脱却し、社会派小説を目指していたことを証しており、時代の変化が文学にも影響していたことがわかる。

リチャード・ライトの対極的な白人女性像

このような白人女性像と対照的に、アメリカ南部社会では黒人男性には理性が欠如している存在(上杉 66)であるという偏見が捏造されていたが、これによって白人女性と黒人男性はますます互いに敬遠しあい、既存の社会的権力構造が崩されないように仕

向けられていた。崇高な白人女性像と野獣のような黒人男性像というステレオタイプの二項対立は相互補完的でもあり、片方だけでは成立しない。上杉忍によれば、黒人男性と白人女性との恋愛関係は絶対に許されなかったが、ただ近づく可能性を感じさせるだけでも黒人男性はリンチによる死を覚悟しなければならなかった(上杉 66)。また、越智博美はリンチを「黒人男性と白人女性のセクシュアリティとジェンダーの規範を産出する文化的装置」と呼び、白人男性が黒人男性と白人女性の両方をコントロールする手段であったことを論じている(『モダニズムの南部的瞬間』 276-7)。このような黒人男性表象は、祭り上げられた白人女性像の裏返しになっているため、過度に賛美された白人女性像を創作することは、黒人男性の社会的立場を相対的に低下させることにつながっている。白人女性像が白人の優越性の証拠として利用された一方で、黒人男性には白人女性と対照的なイメージが付与されており、白人女性像の意図的な神格化とマイノリティ抑圧の仕組みの相互関連性を見ることができる。

このような背景から、アメリカ南部のアフリカ系アメリカ人の男性作家リチャード・ライトはエレン・グラスゴウとはまったく逆の方向から白人女性像を変化させようとしている。ライトはアメリカ史上最初の黒人ベストセラー作家であったが、アメリカの人種主義による序列階梯に疑問を投げかけるため、黒人であるという不条理な理由によって人生を転落していく主人公を描き、作品を発表していった。後にアメリカを離れパリに移住したが、彼の作品にはしばしばアメリカの人種主義を体現した偏執的な白人女性が登場する。具体的に彼の作品から白人女性像を見てみたい。

『アメリカの息子』の主人公ビッグー・トーマス(Bigger Thomas)は女性に対して激しい嫌悪感を抱くことがある。彼女たちの影響から逃れようと必死に突き放し、黒人のガールフレンドのベッシーにも激しい暴力を振るい、最後は死に至らしめる(Davis 82)。白人の雇い主の娘で共産党員のメアリ・ダルトンにも複雑な感情を抱き、ビッグー自身、自分の気持ちに説明がつかなかった。白人社会は自分自身と関係ない場所だと感じていたが、メアリは少なくとも共感を示し、共に戦う仲間としてビッグーを受け入れようとしていたからだ。白人の善意に触れることが生まれて初めての経験であるビッグーにとっては、それが何を意図しているのか見当がつかず、彼の不安が殺人事件を引き起こす元凶になっていく。メアリや同じく共産党員のジャンとの接触によって、次第に自分の黒い肌を意識することになり、彼らが何を考えているのか不安と恐怖に怯えるようになる。そして、偶然にも飲酒後、2人きりでいるところを見られると危険なことになると

感じたビッグーは、メアリの口をふさいで殺害してしまう。彼はメアリに性的な暴行を加えていないが、白人女性と寝室に二人きりでいるところを見られるとそれだけで死を意味し、暗黙の社会的制裁を覚悟しなければならなかった。

... Had he raped her? Yes, he had raped her. Every time he felt as he had felt that night, he raped. But rape was not what one did to women. Rape was what one felt when one's back was against a wall and one had to strike out, whether one wanted to or not, to keep the pack from killing one. He committed rape every time he looked into a white face. He was a long, taut piece of rubber which a thousand white hands had stretched to the snapping point, and when he snapped it was rape. But it was rape when he cried out in hate deep in his heart as he felt the strain of living day by day. That, too, was rape.
(*Native Son* 262-3)

ビッグーはメアリが声を上げないようにとっさに口をふさいだが、これはその瞬間の場当たり的な行動ではあったが、同時に社会的背景が強く作用していたことが述べられている。追い詰められ、ぎりぎりの選択が殺人事件を導いたという環境的要因を強調するこの場面では、アメリカ社会がアフリカ系アメリカ人にとっていかに生きづらい場所であるかを明らかにするとともに、人種主義の蔓延する環境下では白人にとっても善意が混乱を引き起こし、命を脅かすほどの危険な行為になりかねない危険な場所であることを示唆している。

人種や性の序列によって人間が破滅していくという主題は、遺伝や環境の支配から逃れられない自然主義的決定論が礎石となっている。殺人を犯して逃走し、警察に逮捕され、電気椅子にかけられることは、ビッグーが望んだことではないが、彼にはそのような道しか残されていなかった。人間らしさを得るために権利を主張することは、そのまま死を意味する社会であったと獄中のビッグーは述べている。死刑を宣告されたビッグーが彼を弁護した共産党員のマックス(Max)と面会したときに、黒人である自分とは何者であるのかと自問する。

“What I killed for must've been good!” Bigger's voice was full of frenzied anguish. “It must have been good! When a man kills, it's for something. . . . I didn't

know I was really alive in this world until I felt things hard enough to kill for'em. . . .
It's the truth, Mr. Max. I can say it now, 'cause I'm going to die. I know what I'm saying
real good and I know how it sounds. But I'm all right. I feel all right when I look at it
that way. . . ." (*Native Son* 501)

自分の存在を確認するために殺人を犯した、それまで自分が生きていることを確認できなかつたというビッグーは、殺人犯になるように追い込まれてしまった環境の犠牲者と言えるが、アメリカの黒人がいかに過酷な運命を生きているかが理解できないままに無理やりビッグーを仲間に引き入れて殺人事件に巻き込まれた共産党員のメアリとジヤンもまた分断された社会による犠牲者であるといえよう。結局、この小説におけるビッグーの起こした殺人事件は人種間の偏見を容認し、助長する社会環境において、起こるべくして起きた事件であると言え、マルコム・カウリーの指摘するライトの環境決定論に基づく自然主義的傾向が現れている。その後、ライトは1946年にアメリカを去ってパリに移住し(高橋 41)、ライトの後期の作品は自然主義から実存主義へと変わっていったが、アメリカ時代に創作した作品のほうが高い評価を得ているということは、彼の内面の葛藤が創作活動の原動力になっていたとも考えられる。

パリでライトが最初に書いた短編「影を殺した男」は『アメリカの息子』と酷似している殺人場面など、アメリカ社会で黒人に課せられた厳しい環境を冷淡な筆致で描いており、崇拜されていた南部白人女性像が殺人事件の直接的な原因となっている。白人女性のメイベルが彼に近づいてきたときには、主人公ソウルは彼女を遠ざけようと必死になる。

メイベルは現実には偏執的な中年女性として描かれているが、その名前が連想させるように彼女の空想の中ではいまだにサザンベルであり、19世紀に普及していた白人女性崇拝を盲目的に受け入れている人物に設定されている²。このメイベルがソウルに近づいてきたとき、ソウルは敏感に危険を察知し、彼女を視界から消し去ろうと過剰に反応して首を絞めてしまう。彼にとってメイベルは人間ではなく、存在感のない影にすぎず、その影を消すことに罪の意識はなかった。彼女が叫び続けている間、彼が感じたのは、この状況を何とかしなければリンチをうけるか逮捕されて処刑されるか、いずれにしても死が待ち受けているというビッグーと同様の恐怖であった。

マイノリティ抑圧の仕組みを助長してきた人種的、性的な序列化の弊害をサブテクス

トとする小説はアメリカ南部文学におけるテーマとして定着しているが、『アメリカの息子』と「影を殺した男」においても同様の仕組みを見ることができる。南北戦争前には過剰にまつりあげられ、神々しい存在として描かれることが多かった南部白人女性像は、白人の社会的優位性を保つための道具として利用されてきたこともその例のひとつである。20世紀後半以降、人種的、性的な役割分担が厳格に定められていた奴隷制度の影響を残す南部において、白人女性像は抑圧の仕組みをうまく操作するための重要な装置として用いられた。白人女性にこの上なく崇高な社会的価値を付与することで、相対的に黒人の社会的地位を低下させ、両方のカテゴリを一度に抑圧する仕組みを作り出していた。この人種とジェンダーが複雑に絡まりあった社会的役割を付与されることで黒人男性は自己評価を下げざるを得ず、さらなる自己抑圧を生み出す仕組みに組み込まれていくことになっていたことをライトは指摘している。

おわりに

本章では、グラスゴウとライトの白人女性像の比較から、彼らが自然主義的技法を小説に取り入れつつも、どのように異なる方向へ女性像を変化させていったのかを考察した。グラスゴウとライトの描く白人女性像は旧南部文学のセンチメンタリズムや気高い南部白人女性像を破壊することによって、相対的に自身の所属する社会の人間性や地位を回復しようとする共通の意図が見える。2人の描く白人女性は対照的ではあるが、従来の「家庭の天使」像から抜け出すためにそれぞれの立場から伝統的な女性像を崩すように作品を創作し続けた。

グラスゴウが伝統主義に支配されて自己実現できないヒロインを描き、殺人にまでいたるプロセスを丹念に描いたのに対して、ライトは生きる権利を主張すること自体が自殺行為であるといった黒人男性の置かれた抑圧された立場を小説にした。その際に、19世紀には感傷主義の源であった白人女性像をそれぞれの立場から批判し、自分たちの主張を例証するための道具として利用している。

グラスゴウとライトの描く対極的な女性像はともに伝統主義に縛られた自己を解放させる装置として作品の中で用いられ、従来の人種や性に関するヒエラルキーを再配置しようとする狙いがあるという点で通底している。これは、禁避されていたカラーラインや性的な規範を互いの作家が乗り越えつつあり、時代の後押しを受けて異なる方向から同じ目的に向かって小説を創作していたことを意味している。

ライトの描く白人女性像は19世紀の気高い南部白人女性像を破壊することによってセンチメンタリズムから脱却し、相対的に白人女性や黒人男性の人間性や社会的地位を回復しようとする意図が見える。それに対し、グラスゴウの『保護された生活』では、グラスゴウにもライトと同様に南部の伝統主義を崩そうとしていた点が見られた。グラスゴウとライトは白人女性作家と黒人男性作家という別々のカテゴリに分類されているが、彼らの描く対極的な白人女性は同じ人種主義の抑圧の仕組みの表と裏を描いている。

グラスゴウとライトの作品に自然主義的な傾向があることは偶然の一致ではない。アメリカ南部における人種や性といった社会的構築物に生き方を限定される息苦しさを描くことは、血脈や家系といった遺伝決定論について疑問を呈することに通じる。遺伝にまつわる社会文化的言説によって自由に生きる権利を奪われた登場人物たちは、破滅を結末に迎えることによって生きづらい社会のあり方を明らかにしている人物たちであり、社会制度に疑問を投げかけている。これらの作家たちにとって小説執筆は単なる収入源であったのではなく、新しい時代を構築するための手段でもあったのである。

第10章 エレン・グラスゴウの戦略的シスターフッド —アレン・テイトと H. L.メンケンとの書簡から

はじめに

エレン・グラスゴウは若い頃に難聴になったため、第三者の手助けや補聴器を必要とする会話よりも、文通によるコミュニケーションを好んだ。彼女は多くの手紙を残しており、そこからは作家の評価が批評家との個人的なつながりによっていかに左右されるかを垣間見ることができる。

グラスゴウの文通相手に南部文壇を代表する批評家アレン・テイトとボルティモアのジャーナリスト H. L. メンケンがいるが、この2人はアメリカ南部のダーウィニズム受容に関して正反対の立場をとっていた。メンケンは南部がダーウィニズムを受容しようとし、しないことは南部の後進性を物語っていると述べ、1925年テネシー州デイトンで州立高校の教師が進化論を教え、罰金刑を言い渡されたスコープス裁判を「猿裁判」と揶揄した (*Serpent in Eden* 147)。それに対し、テイトは南部の伝統的な価値観は科学とは相容れないため、ダーウィニズムの拒絶によって南部を後進的であると結論付けることはできないと反論し、一般的にはこの裁判をきっかけにして農本主義者に転向したと言われている (*Serpent in Eden* 150)。

グラスゴウはこのように意見が激しく対立する2人の批評家と文通を続け、友人として心を通わせるようになるが、その遠因として彼女と2人の妻たちとの間に女性同士の絆(シスターフッド)があったことが挙げられる。テイトの妻キャロライン・ゴードン(Caroline Gordon)と、メンケンの妻サラ・ハート(Sara Haardt)はともに作家活動をしていたが、作品を創作するにあたってグラスゴウに敬意を払っていた。特にサラは夫であるメンケンを通じてグラスゴウからサイン入りの著書を受け取り、愛読し、創作の手本とするなど、公私ともにグラスゴウに傾倒していた。つまり、グラスゴウは妻たちを味方に付けることによって舌鋒鋭いことで有名なメンケンやテイトと友好を深め、文壇での自身の評価を高めることになった。

白人男性の批評家が中心的役割を果たしていた当時のアメリカ南部文壇において、批評家の妻を味方につけるという戦略は、独身女性作家グラスゴウが成功するのに大いに有効な手段であった。本章では、グラスゴウにとってシスターフッドがいかなる重要な意味を持っていたかを『不毛の大地』と書簡から考察したい。そしてグラスゴウと批評

家の妻たちを結びつけたシスターフッドが 1942 年のピューリッツァー賞受賞に至るグラスゴウの作家としての評価や経歴にいかなる影響を与えたのか、検証したい。

女性作家との絆

1905 年 3 月、すぐ上の姉キャリー(Cary)が癌に侵されて手術を受け、グラスゴウは精神的な苦境に立たされていた。そのような時、彼女を励まし支えてくれたのは作家である 2 人の女友達だった。メアリ・ジョンストン(Mary Johnston, 1870-1936)はグラスゴウより 3 歳年上の姉のような存在であり(Goodman 94)、病床に伏していたキャリーとも仲が良かった。ジョンストンはグラスゴウが初めて支援した女性作家であり、深く友情を育んだ。もう一人のアメリー・ライヴス・トゥルベツコイ(Amelie Rives Troubetzkoy, 1863-1945)は 10 歳年上であるため母親のような存在としてグラスゴウは信頼を寄せていた。トゥルベツコイはグラスゴウへ 19 世紀風な女性同士の絆の強さを連想させるような非常に情熱的な手紙を書き綴っている。

... “All my love and sympathy has been with you, but it has necessarily been an abstract sort of love and sympathy because I could not express it to you with warm, living lips and glances and embraces. . . . I take you in my arms and love you dearly, dearly.”¹
(Goodman 97)

この手紙を送ったトゥルベツコイは一度目の結婚が破綻し、憔悴して麻薬中毒に陥った時期もあったが、芸術家であるロシアの王子と再婚して幸せな生活を送っていた(Goodman 94)。しかし、彼女の手紙はほとんど同性愛を連想させるような非常に感情的な言葉が続いている。トゥルベツコイ同様、グラスゴウも自伝『内なる女』に“Gerald B”と呼ぶ男性との関係や、ヘンリー・アンダーソンとの婚約とその破綻について語っており、生涯、結婚こそしなかったものの、男性たちとの恋愛体験を小説に昇華させている。

そのような女性たちの手紙が物語っていることは、グラスゴウとトゥルベツコイの同性愛的な感情の発露ということよりも、南部の伝統的な父権制社会において対等な人間関係を求め自律的生き方を維持しようと模索するなかで、女性同士の親密さを構築することになったということであろう。伝統的慣習やジェンダー規範、そして生殖から切り離された精神性を重視する愛情によって対等な関係を築こうとした足跡が、この手紙に

は読み取ることができる²。

グラスゴウは女性作家間で友情を育んでいったが、これは伝統を重んじる父権社会で自らの意見を公にしなければならぬため精神的な葛藤の多い「書く」という仕事で女性が生き抜いていくための戦略でもあった。女性作家同士の親密さを軸にして交流の輪を広げていった形跡は彼女の手紙の随所に見ることができるが、ここではグラスゴウの書簡の中でも、特に南部に関して激しく立場が対立していたボルティモアのジャーナリスト H. L. メンケンと南部の代表的批評家アレン・テイトとの書簡を取り上げたい。

H. L. メンケンの妻サラ・ハートとの友情

H. L. メンケンの妻サラ・ハートはアラバマ出身の女性で、1920年にガウチャー大学(Goucher College)を優秀な成績で卒業し、母校で英文学を教えていた。ジャーナリストのメンケンを尊敬しており、彼との交際が始まって以降は彼の支援によって作家として名前が知られるようになった。その後メンケンと結婚し、彼は妻がジャーナリストや短編小説家としての職歴を積む手助けを続けた(Rodgers 1-69)。

また、サラはグラスゴウの熱心な読者で、グラスゴウの南部に対する共感と皮肉のバランスを高く評価し作家活動の手本としていた。彼女の短編集『南部の記念品』(*Southern Souvenirs*)に掲載されている短編小説「騎士道のたそがれ」(“Twilight of Chivalry”)にはグラスゴウの影響が表れているし、「エレン・グラスゴウと南部」(“Ellen Glasgow and the South”)というエッセイでは南部作家でいち早くリアリズムを小説に取り入れた作家としてグラスゴウを称賛している。

1925年頃までにはグラスゴウは南部文壇で確固たる地位を確立していたが、メンケンもその頃には最も議論好きなアメリカ文学の批評家として名声を博していた。ワトソン・ジュニア(Watson, Jr.)によると、1909年に出版されたグラスゴウの『平凡な男のロマンス』(*The Romance of a Plain Man*)を、「概してひどい小説と本」というタイトルの記事に載せ、1913年の『ヴァージニア』については「いろいろなひどい小説」という論評の中で扱っており(*Ellen Glasgow Newsletter* 20: 10)、メンケンはグラスゴウの作品を酷評し続けてきた。1925年出版された『不毛の大地』は南部のセンチメンタリティを大胆に離れた作品であり、グラスゴウは多少の注目に値すると態度を軟化させていたが、最大の欠点は「貧しい、蚤のたかるような田舎の生活を描き切れていない」点であると評し、結局は「足元の弱い」小説と結論付けている(*Ellen Glasgow Newsletter* 20: 10)。

メンケンとサラは 1930 年に結婚するが、それはサラの二つの大病がきっかけになっている。1924 年にサラは肺結核にかかり、1929 年には腎臓を切除する手術を受け、長期の入院を余儀なくされた。これらの病気によってメンケンはサラに対する愛情を強くし、10 年越しの友情から求婚に至った。1930 年 9 月 14 日に 2 人は結婚した後、サラは 1935 年に死去したので 5 年間の短い結婚生活であったが、サラの死後も彼女のことを思うメンケンとグラスゴウの友情は続いた(*Ellen Glasgow Newsletter* 20: 16-8)。作品の持つ魅力とともに、このサラが取り持った友情によって結果的にメンケンはグラスゴウ作品に共感を持ち、肯定的に評価するようになっていった。メンケンがサラの死後、グラスゴウへ宛てた手紙を見てみたい。

Baltimore

August 29, 1935

Dear Miss Glasgow:

It was charming of you indeed to think of sending "*Vein of Iron*". I have been sneaking a reading of it, and with the greatest pleasure. It seems to me to be the best thing you have ever done-indeed, it is a really first-rate piece of work, and I only hope that the reviewing brethren appreciate it. Unfortunately, half of them now seem to be Communists, and any book that doesn't whoop up the proletariat is treated tartly.

I am still in the hands of the court, and so it has been impossible so far for me to turn Sara's books over to Goucher. But I should be liberated toward the end of September. "*Vein of Iron*", of course, will go along with the rest. Anne Duffy is making a special bookplate, and so the books will be differentiated in the Goucher library.

Are you likely to be in Baltimore in the near future? If so, I surely hope you let me hear of it. I can imagine nothing more pleasant than seeing you again. Sara's devotion to you was endless. (*Ellen Glasgow Newsletter* 20: 13)

Sincerely yours,

H. L. Mencken

このように、メンケンがガウチャー大学にグラスゴウの著作を寄贈し、特別なコーナーを設置しようとしているのは、早世したサラがグラスゴウを女性作家の先輩として尊

敬していたからである。メンケンにとってグラスゴウ作品は、在りし日の妻の思い出と分かちがたく結びついており、幸せな思い出のよすがとなっていたのである。

この手紙の後、1941年にはグラスゴウの生前最後の小説『この世の中で』もメンケンに贈っている。メンケンはサラの死後もグラスゴウと季節の挨拶を1942年12月まで続けている。辛辣な意見で有名なジャーナリストメンケンであるが、グラスゴウとの往復書簡では気遣いの細やかな優しい男性としての側面が現れている。病死した妻もグラスゴウも南部出身であり、彼女たちに深い敬意を払っている彼の態度からは、南部を「文化のサハラ砂漠」(*Serpent in Eden* 3)と呼び、芸術の根づいていない土地であると酷評した姿は見えない。南部に対して手厳しい記事を書き続けたメンケンであったが、妻を通して南部的価値観を肯定的にとらえることもあったということであろう。

アレン・テイトとの文通

アレン・テイトはメンケンの南部攻撃に対して不快感を露わにし、一般的には1925年のスコープス裁判によってモダニストから農本主義者に転向したといわれるが、彼もまたグラスゴウの文通相手の一人であった。グラスゴウはメンケンとの手紙では挨拶程度の交流にとどまっているが、テイトとの往復書簡ではテイトの相談に真摯に向き合い、草稿を推敲する際にもアドバイスを求め合うなど、個人的な事柄にまで掘り下げて打ち明けており、南部人同士であるテイトとグラスゴウは信頼関係を築くことが難しくなかったことを物語っている。

グラスゴウの作風が中期頃から伝統的な南部の世界観を取り入れていったのは、アレン・テイトとの付き合いから影響を受けたためとエレン・コールドウェル(*Ellen Caldwell*)は考えているが、ワトソン・ジュニアは、『不毛の大地』はグラスゴウがテイトに会う前に書かれた作品であるが、そこにはもう南部的な世界観を重視していた姿勢がうかがえると指摘し、コールドウェルの見解に反論している(*Ellen Glasgow Newsletter* 23: 3)。

テイトとグラスゴウが初めて顔を合わせたのは1931年の南部作家会議であった。これは、グラスゴウが*The Virginia Quarterly Review*の編集者に提案して実現した会議で、リッチモンドで開催されフォークナーを始めとする南部作家が一堂に会した。これをきっかけにしてテイトの抱くグラスゴウの印象は大きく変わった(*Waldron* 104-6)。しかし、それ以前の1929年にはテイトは以下のように、友人ドナルド・デビッドソン(*Donald Davidson*)に宛てた手紙にグラスゴウに対する不信感をあらわにしていた。

I am of the opinion that she [Ellen Glasgow] writes an abominable prose style, and that she is one of the worst novelists in the world; it is about time that we repudiated people like her and Cabell³. These two writers are fine examples of running with the hare and hunting with the hounds. Miss Glasgow has everything that I have learned to detest in the transformation of the Virginian character—the feeble and offensive assumption of past superiority along with casting a vote for Hoover: she exhibits the “aristocratic” manners of the South and shows how ridiculous they are: she is an incredible old snob who would not receive in her house a “man of the people” (as she would put it) and yet she wrote a novel proving the sterling worth of a man born in a circus tent, the whole atmosphere of the novel being that of sniffing and calculated condescension. The people like Miss Glasgow and Cabell convince outsiders that all Southerners are snobs and pretenders, wherefore their books sell by the hundred thousand. Our job is to point out that Mr. Cabell and Miss Glasgow simply happen to be two snobs who took to writing—there being in any society a few snobs if you look hard enough. (*Ellen Glasgow Newsletter* 23: 3) (下線は筆者による)

グラスゴウに対しての強い反感をこの手紙で露わにしているが、南部作家会議をきっかけに、グラスゴウがフランスに長期滞在していたテイトに『保護された生活』を献本したことによって、テイトのグラスゴウ作品に対する評価は大きく変化する。『保護された生活』は南部の貴族的慣習を扱った作品であり、テイトの目にはグラスゴウの作品の中でずば抜けて優れたものと映った。テイトの称賛を受けて、グラスゴウもテイトの詩はすばらしいと賛辞を贈っている。

Richmond,

September 22nd, 1932

Dear Allen Tate,

. . . This letter is entirely about myself, and I feel ashamed. You will understand, however, and you will realize that I am deeply interested in your work, and that, whenever I find an opportunity, I try to make other persons share my interest and

pleasure. I have just placed your poems second in my choice of books of the year. This was in a list for the *Herald-Tribune*, and I was glad to have another chance to speak of it, and to include *Penhally*, too, among the novels. . . . (*Ellen Glasgow Newsletter* 23: 10)

グラスゴウは、テイトの詩だけではなく、妻キャロライン・ゴードンの小説『ペンハリー』(*Penhally*)も素晴らしい作品だと伝える配慮を忘れていない。ゴードンも前述の1931年の南部作家会議に出席しており、その際にグラスゴウがスピーチしたことについて、「補聴器を付けて前に飛び出してきた、本当に上手に話をして、すごいおばさんだわ」(Waldron 106)と皮肉も交えて記している。このようなゴードンに対する配慮は常にグラスゴウの手紙に見受けられ、グラスゴウはテイトだけに宛てて手紙を書いているのではなく、妻ゴードンも読み手として想定していることが現れている。グラスゴウは夫婦2人を同時に味方に付けることでテイトとの関係を確固たるものにしつつ、男女間の文通ではありながらも家族的な関係を目指していることを示そうとし、常にゴードンの存在に配慮していることが書簡から読み取れる⁴。

1933年の書簡では、テイトはグラスゴウがピューリッツァー賞を逃したことに言及し、大変憤っており、2人の友情が深まったことが表れている。

Trenton, Kentucky, May 24, 1933

Dear Miss Ellen:

...The first day I was distressed, the second irritated, and the third positively furious, that T. S. Stribling should have received the Pulitzer award. I need not name the book that should have got it. I suppose we may find some lugubrious satisfaction in this new evidence of what the North wants to see in the South. *The Sheltered Life* is there to make the award ridiculous in the years to come. (*Ellen Glasgow Newsletter* 23: 16)

これは、T. S. ストリブリング (T. S. Stribling)の『ストアー』(*The Store*)が1933年にピューリッツァー賞を受賞し、グラスゴウの『保護された生活』が受賞を逃したことにに関して述べたものである。テイトの言葉からわかることは、あれほどグラスゴウ作品を酷評していたテイトが、今やグラスゴウの力強い味方になったということ、また、作品の

持つ魅力もさることながら、作家と批評家の関係によって文学賞の行方が左右されるほど人間関係は文学賞に重要な影響力を持つということである。

その後も文通を続けることによって2人は信頼関係を築き、テイトは『私の立場』の続編のエッセイ集にグラスゴウも参加するよう誘っているが、グラスゴウは断っている(*Ellen Glasgow Newsletter* 23: 5)。ここからはグラスゴウが完全には農本主義に賛同していないこと、そしてテイトらとは一線を画しておきたいことがうかがえる。個人的な話を相談する相手としては魅力的であったが、保守的な論客であるテイトとは政治的立場においては相いれない点があることを感じていたのであろう。

『不毛の大地』におけるシスターフッド

書簡におけるグラスゴウのシスターフッドは白人男性が中心的役割を担う南部文壇で女性作家が書き続けていくための精神的な支えとなっており、同時に男性の批評家へ交友関係を広げるための足掛かりにもなっている。また、シスターフッドの重要性は作品の中にも表れており、ここではまず1925年に出版された『不毛の大地』を用いて具体的に検証したい。

この小説において、南部白人女性であるドリンドはジェイソンとの異性愛を成就させることができず、恋愛の破綻による傷心から抜け出すため全力で農場経営に取り組む。ある日、家畜の世話をするために、いつも着ていたドレスを脱ぎ、弟の作業着のオーバーオールに着替えるが、それを見ていた母親は困惑する。母親がドリンドのオーバーオール姿を「誰も見ませんように」(303)と祈るのは世間体をおもんばかってのことだった。ドリンドが作業着を着て野良仕事をするのは南部女性としてのジェンダー規範を逸脱し、文化的な両性具有者になったことを象徴するできごとだったのである。

さらに両親もこの世を去った後には、ドリンドはアフリカ系アメリカ人のメイド、フラヴァンナと農場の中の一軒家で生活を営み、お互いだけを唯一の頼れる存在として強い信頼関係を築いていく。外部から遮断された2人きりの世界で、ドリンドはオーバーオールを着て農場の借金を返済するために懸命に働き、夜はドリンドの部屋でとりとめない話をして2人で過ごすようになる⁵。

The affection between the two women had outgrown the slender tie of mistress and maid, and had become as strong and elastic as the bond that holds relatives together. They

knew each other's daily lives; they shared the one absorbing interest in the farm; they trusted each other without discretion and without reserve. Fluvanna respected and adored her mistress; and Dorinda, with an inherited feeling of condescension, was sincerely attached to her servant. (*Barren Ground* 349)

パメラ・マシューズはドリндаがフラヴァンナとの女性だけの世界の中で、南部の人種的な不寛容さを克服していったと述べているが (Matthews 162)、ここでは経済的に男性から自立したドリндаとフラヴァンナの2人の生活をボストン・マリッジ的なロマンティックな友情も読み取れるのではないだろうか。この2人の人種の境界線を越えて構築された親密さは、主人とメイドという絶対的な立場の差を前提にして成り立っていることから人種差別的であると批判される一方で、人種間の融合を促す可能性についても論じられており、批評家の間でも様々な意見が見られる⁶。

人種と性が複雑に絡まった問題をはらむ2人の関係についてさらに考察したい。南部においては南北戦争以降、白人とアフリカ系アメリカ人の人種混交に対する不安を煽るような中傷が至るところで見られた。例えば南北戦争中には、民主党員が共和党員になりすまし、黒人を解放して人種を越えた結婚を政策として進めていこうと演説して聴衆の反感を煽り、共和党の選挙の妨害をした(Hodes 144)。グラスゴウはこのような南部白人の不安に配慮しつつも、人種間の融和を促す戦略として白人女性とアフリカ系アメリカ人女性の親密な関係を描いたのであろう。女性同士の関係においては生殖の問題がなかったため、どの子孫が遺産の相続をするのかといった問題が起こらず、人種の境界を越えた親密さを描くことに比較的抵抗が少なかったと考えられる。そのようななかで、人種や社会規範には縛られない自由な関係を求め、女性自身が主体的に相手を選び、人生を選択することができるようにグラスゴウはシスターフッドを作品中でも利用しているのである。

おわりに

以上のとおり、小説の中だけではなく現実の世界でもシスターフッドを足掛かりにして女性作家たちは交友関係を広げていった。女性作家たちが同性間で親密さを育むことは、異性との対等な関係の構築は伝統的南部社会においては成立不可能であった現実を映し出している。作家という職業を持ち、経済的に自立して生きる多くの女性作家たち

は、南部の伝統的なジェンダー規範に縛られない対等な人間関係を求めることにより、結果的に女性同士の親密な関係を構築することになったのである⁷。

さらに、グラスゴウ作品には、女性同士の親密さを後ろ盾として南部社会を近代化しようとした形跡を見ることができる。メンケンが南部がダーウィニズムを受容しないことをスコープス裁判などでの南部叩きの切り口として使っていたが、グラスゴウは長年にわたってダーウィニズムやダーウィニズムから派生した思想的広がりから自らの文学作品に積極的に取り入れており、南部に近代思想と科学的合理性を根付かせようとしていた彼女の政治的な立場を表している。この点においては、グラスゴウの立場はテイトよりもメンケンに近いと言える。後進的であると酷評されていた南部を近代化することは、家父長制や奴隷制による南部の汚辱を取り除き、その結果、必然的に女性に自由や平等の権利を付与することを意味している。

グラスゴウの小説や書簡におけるシスターフッドは、南部の封建的社会制度に抗する女性の共同体を形成しており、ジェンダー規範を解体、再構築しようとする戦略を表象している。しかし同時に、結局は女性だけの世界の中でしか性的役割分担から逃れることができないという時代的な限界をもまた映し出しており、南部のジェンダー規範の堅牢さをあらためて浮き彫りにしているのである。

結論

遺伝学の研究は近年すさまじいスピードで発展し、ヒトゲノムの解読も予想されたよりもはるかに急速に解明された。このスピードが物語ることは、一部の遺伝学研究者のみならず広く一般の人びとも遺伝の仕組み解明に大きな期待を寄せているということである。本論はそのような遺伝の仕組みが明らかになるはるか以前に、グラスゴウを始めとする作家たちが想像力を用いて遺伝の概念を小説創作に取り入れた足跡をたどった。特に自然主義作家たちは、親から子へ形質や特徴が受け継がれていく遺伝の謎に興味を持ち、(疑似) 科学の理論を援用して作品を創作していた。彼らは遺伝として受け継いだ資質は個人の努力では変えることができないものという科学的知識を証拠として、人びとが自分自身の心や身体に感じる不安や懸念に焦点をあて、情念の暗い側面をあぶりだした。

本論では、グラスゴウの遺伝に関わる社会文化的言説に焦点を当てることで、ヴィクトリア朝的価値観から近代的価値観への移行期に伝統的な人種や性の概念が崩壊していき、多様性を重視する社会への一步を踏み出そうとしていた兆しを指摘した。グラスゴウは遺伝にまつわる当時の言説を作品創作に利用し、南部を近代化して奴隷制イデオロギーから抜け出すことを模索した。その一方で、遺伝にこだわって作品を創作することは、グラスゴウ家に流れる病の血に対する不安も引き受けなければならず、自分自身が遺伝決定論と向き合わざるをえない状態に追い込まれた。グラスゴウの遺伝に関する言説には、過去は変えることができないという絶望的な側面と、逆境を跳躍板にして自助努力で人生を切り開けるという未来志向の側面の両方が存在する。そのようなグラスゴウ作品における遺伝表象を作品から分析すると、社会進化論的な序列階梯に対して徐々に疑問を抱くようになったグラスゴウの変化がうかがえる。社会進化論的に序列化されていた人種や性のカテゴリが徐々にあいまいになり、後期の作品ではより普遍的な人間の苦しみへと興味の対象が移っていった。ここでは、人種や性などによって能力や性質などが決まり、自助努力や外的要因では変えることができないという当時の遺伝をめぐる(疑似) 科学的言説や社会通念と対峙し、乗り越えようとした時代の流れが読み取れる。

今日の文化人類学研究では、人種というのは記号表現であって固定的なものではなく、人種概念は社会的な神話にすぎないとまで論じられており、人間の形態学的特徴を人種

化し、階層化することに対して警鐘を鳴らしている。本論ではこのように人種に関する議論が成熟する以前に、グラスゴウが個人の努力ではかえることができないという遺伝の不安に向き合い、人種や性に関する社会的言説を取り込みながらも抵抗し、挑戦していたことを明らかにした。

遺伝にこだわることは、グラスゴウ自身が「家系の血」に対する不安を増幅させ、その結果自らを苦しめることにもなった。まず、グラスゴウはそれらの遺伝の概念を作品上で可視化して問題の所在を明らかにし、晩年の作品では遺伝神話を批判的に取り込む方向へと軸足が移っていった。このように当時の遺伝にまつわる社会的言説と格闘することは、グラスゴウが精神の自由を手に入れるために必要であった。家族に神経症を発症する者や自死した者、夭折した者たちがいたことや、グラスゴウ自身が病弱で耳が聞こえなかったことなどを、自身の家系に流れる血のためではないかと心配し、自分自身の身体に恐怖を感じ、病が遺伝するという不安に苦しめられていたからである。彼女がそのような精神的抑圧から解放され、自己を肯定的に受け入れることができるようになるためには、遺伝に関する社会的言説の脅しに屈せず、自らの身体と和解する必要があった。本論では、グラスゴウが生物学理論を援用しながらも、精神の自由を手に入れるために遺伝決定論の束縛から逃れようと従来の人種や性の概念に疑問を抱くようになっていったことを作品からたどり、結果的には南部文学における遺伝表象を部分的にはあるが俯瞰することになった。

第I部「エレン・グラスゴウと遺伝」においては、グラスゴウの作品『ヴァージニア』『人生とガブリエラ』『不毛の大地』を分析し、中期の作品では遺伝の概念がどのように人物設定と関連しているのかを考察した。グラスゴウが遺伝に固執したのは、グラスゴウ家の家系に対する自負と、逆に家族の多くが心身の病によって早逝しているという不安の両面からであった。優越感と恐怖の両方の感情をあわせ持ちながら、グラスゴウは遺伝が人生にどのような影響をもたらすものかを考察しながら作品を創作し続けた。

第1章では1913年に出版された『ヴァージニア』において、グラスゴウがいかにダーウィニズムに傾倒していたのかを指摘し、進化論を文学に融合させる試みを作品上で実践していたことを論じた。ヒロインのヴァージニアは南部レディに成長するよう両親から教育を受け、旧南部の価値観を体現する人物として描かれている。しかし、彼女が何よりも大切にしている家庭は、まさにその旧態依然とした考え方によって崩壊していくのである。時代の流れに取り残されたものは淘汰される運命にあることを、スペンサーの

適者生存の法則を援用して描いたことによって、グラスゴウは自然主義作家としての地位を確立した。

第2章では『人生とガブリエラ』が第一次世界大戦開戦後に出版された小説であることから、国内の分断を乗り越えて外国との戦争に備えようとするナショナリズムの萌芽が見られることを指摘した。この戦争によってアメリカは未曾有の軍需景気に沸き、世界の覇者として台頭するための経済力を手に入れた。ヒロインのガブリエラが遺伝的弱さを乗り越えて成長していく姿には、当時のアメリカの力強さが重なっており、自助努力や自己信頼を称揚する言説に満ちている。

第3章では1925年に出版されたグラスゴウの代表作『不毛の大地』において、ヒロインの母が神経症に苦しむ時に見るヴィジョンは何を意味しているのかを歴史的背景を鑑みながら分析した。ドリンダの母ユードラはアフリカでのキリスト教の布教活動を夢見ていたが、婚約者の死によってその夢は破れ、魂の抜け殻のようになり神経症を病む。ドリンダの父と結婚した後もアフリカのヴィジョンは彼女を捕らえて離さず、繰り返し黒人の赤ん坊がワニに投げられる残酷な場面が彼女のヴィジョンに浮かんできた。このヴィジョンが物語ることは、南部の女性が自分の意思を言説化する手段をもたず、自己実現がかなわない環境にあること、また黒人の社会的地位を過度におとしめて白人社会の保身を図る人種差別の構造である。作品に南部の人種主義を批判的に描いたことによって、グラスゴウは社会問題を可視化させ、議論を促そうとしていることを指摘した。

第4章ではイギリス人作家トマス・ハーディの影響が『不毛の大地』に見ることができるところを考察した。グラスゴウはアメリカ国内の作家よりもヨーロッパ、特にイギリスの作家に尊敬の念を抱いており、なかでもハーディを創作の手本にしていた。女性のセクシュアリティと社会制度の乖離を環境と遺伝の影響から描く自然主義的技法はハーディから学んだと言われている。本章では特に自然主義決定論と自由意志のせめぎ合いをいかにグラスゴウが扱っているのかに注目した。

第II部の第5章ではウィリアム・ウェルズ・ブラウンの『クローテル 大統領の娘』について、混血の登場人物たちが逃亡奴隷を捕まえる追手から逃れるために変装した場面を分析した。彼らは混血と気付かないほど肌が白いが、祖先に一人でも黒人がいれば黒人であると考えられ、黒人奴隷という範疇に押し込められ、身体的自由を制限されて労働力を搾取されている。しかし、衣服を替えて変装することによって、白人／黒人、

男／女、主人／奴隷といった人種、性、階級の境界をいともたやすく往来し、生物学的、形質的な差異は出自によって生来的に決定づけられるという人種主義の前提に疑問を投げかけている。

第6章では、フランシス・ハーパーの『アイオラ・リロイ』を取り上げて、大統領の娘であるにもかかわらず、母親が混血奴隷であったために奴隷として売買され、人生を翻弄される混血のヒロインが、最終的には自分の意志で白人であるか黒人であるかを選べることに注目した。アイオラもアメリカ文学上、ステレオタイプ化された「悲劇の混血」と呼ばれる系譜に置かれてはいるが、奴隷として身体を搾取されても知恵と努力で力強く生き抜いていく。遺伝による生来的な欠陥とは無縁であり、社会進化論に基づく人種の序列を攪乱している存在として描かれている。

第7章ではグラスゴウ最晩年作『この世の中で』において混血のパリーがいかに自由に生きることを阻害されているかについて描写した点から、グラスゴウが南部の人種主義や血脈による遺伝決定論に対して疑問を示していることを指摘した。この小説を原作として映画が製作されたが、その映画の中でも黒人描写が今までになく新しいことが評価され、ハリウッド映画史に名前を残している。本論では、映像化することができない血の問題をテキストから拾い出し、分析することで、時代的な制約の下、グラスゴウの果たした役割に注目した。

このように第II部「混血神話の破壊と再構築」では旧南部を舞台とした小説で混血の登場人物を分析し、南部における血脈がいかに影響力を持ち、またそのような社会の中で混血の作家たちが旧南部の階層化された人種概念にどのように異議を申し立てようとしていたのかを論じた。混血の人物が白人同様に優れた資質を持つ者がいることを指摘した彼らの作品は、黒人の遺伝的な資質を擁護しつつも、白人の優越性を前提として議論されているために、人種主義を是認していると非難されてきた経緯がある。しかしながら本論では、人種主義を利用して白人中産階級の共感を得ようとした作家たちの戦略は、絶対的な人種間ヒエラルキーの下、序列階梯を攪乱した戦略的第一歩であったことを指摘し、人種差別的な作品であると批判することはしない。

第III部では南部文学に常に付随する血の問題を、グラスゴウやアフリカ系アメリカ人作家たちはどのように取り入れつつも抵抗していたのかを論じた。伝統的な南部の価値観と対峙するということは、人種や性によって決められたヒエラルキーに異議を唱えることであり、グラスゴウや同時代のマイノリティ作家たちがどのような形で問題提起

をしているのか指摘した。グラスゴウと同様にラングストン・ヒューズやリチャード・ライトといった黒人作家たちは、血の呪縛によって人が自由に生きることを阻害されていることを描き出している。こうした遺伝決定論から自由になることが、マイノリティ作家たちの目指すところであったことに言及した。

第8章ではラングストン・ヒューズの詩「シルエット」と「南部」、リチャード・ライトの短編「影を殺した男」を南部白人女性像に焦点を絞って考察した。彼らは白人女性をモンスター化して描くことによって、神格化されていた南部女性像のイメージを崩壊させ、旧南部文学で多用された感傷小説との決別を図った。それは相対的に黒人の社会的地位を回復することにつながる。彼らは生身の女性を描いたのではなく、南部の人種主義の悪を体現した人物として白人女性を描いたことを指摘した。

第9章では、アレン・テイトによって高く評価されたグラスゴウの『保護された生活』を伝統主義に束縛された女性像の分析から論じた。この小説に登場する祖母の病的な資質が子孫に遺伝したことによって、一家が滅亡へと向かうプロットは、家父長制に対する遺伝を用いた女の復讐という一面があることを指摘した。男たちが大切に守ってきた一族の対面は祖母の病気は夫からの肉体的、精神的な抑圧によって引き起こされており、それに対する意趣返しとしての病の遺伝という側面を、家父長制への抵抗として読み取ることができることを考察した。

第10章ではグラスゴウの書簡を分析することから、南部文壇で活躍するための彼女の戦略を考察した。グラスゴウは多くの文筆家に手紙を出していたが、なかでも南部保守の批評家アレン・テイトやボルティモアのジャーナリストH.L. メンケンとの往復書簡を取り上げて、グラスゴウがいかにピューリッツァー賞受賞への階段を昇って行ったのか、文壇の人間関係がいかに文学賞の行方に影響を与えるのかについて言及した。グラスゴウは『この世の中で』によってついにピューリッツァー賞を受賞したが、それまでも何度か名前があがっていた。自分の作品について批判的な論評が世の中にできることを嫌ったグラスゴウは、文通によって批評家を味方につけ、さらには彼らの妻たちとも意識的に交流した。性別役割分担が厳格に制定されている南部においては、グラスゴウは女性同士の絆を強くすることで難局を打開しようとしていた。文通はグラスゴウの耳が聞こえないために会話がしづらいというハンディキャップを逆手にとった戦略で、グラスゴウに課された遺伝決定論を乗り越えるための大切な手段であったことを指摘した。

以上の議論をとおして、本論では南部の伝統的価値観に疑問を抱いていたグラスゴウの作品は世の中の移り変わりを敏感に先取りしていたというキャロル・マニングの論を再検証することになった。グラスゴウのような女性作家たちの19世紀末からの活躍は社会の変化の兆しをいち早く映し出しているというマニングの論はグラスゴウの遺伝をめぐる言説に見ることができる。ここからは、女性は「家庭の天使」として家族の世話に明け暮れることのみを期待されていたヴィクトリア朝時代の価値観から、自分の人生の選択肢を他人にゆだねることなく自分自身で決定できる時代へと変えていこうとした彼女たちの強い意志を感じる。生まれついた性に関係なく、平等な選択肢を与えられる時代を求めて女性作家たちは作品を創作した。それはアフリカ系アメリカ人作家たちも同様のことが言える。マイノリティという人種カテゴリに分類されれば、どれほど努力しても成果が実を結ぶことはないとあらかじめ決まっていた時代には、無力感にさいなまれる日々を過ごさざるを得なかった。

確かに、グラスゴウ作品にはヴィクトリア朝時代の中産階級の価値観が色濃く残存し、人種や性の序列階梯など当時の白人社会の価値観が随所に見られる。しかしながらグラスゴウ作品の行間には、女性は家系や血筋といった親から受け継いだもので人生すべてが決まってしまうのではなく、自助努力で人生を切り開いていくことができるという未来への変革の期待が散りばめられており、それはやがて遺伝決定論による束縛が弱まりつつある新しい時代が訪れることを予兆させる。時代的な束縛に気づき、いち早く女性の社会的進出や平等の実現に取り組んだグラスゴウは、自らの属する南部社会の抱えるさらなる闇にも気付いていった。

この点については、ジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』の批評と比較することで、グラスゴウ作品の社会文化史的な位置付けが分かりやすくなる。*Culture and Imperialism* において E. W. サイドは『闇の奥』で「暗黒」のアフリカ大陸を帝国支配しようとする白人の登場人物クルツとマーロウについて以下のように述べている。

They (and of course Conrad) are ahead of their time in understanding that what they call “the darkness” has an autonomy of its own, and can reinvade and reclaim what imperialism had taken for *its* own. But Marlow and Kurtz are also creatures of their time and cannot take the next step, which would be to recognize that what they saw, disablingly and disparagingly, as a non-European “darkness” was in fact a non-European

world *resisting* imperialism so as one day to regain sovereignty and independence, and not, as Conrad reductively says, to reestablish the darkness. Conrad's tragic limitation is that even though he could see clearly that on one level imperialism was essentially pure dominance and land-grabbing, he could not then conclude that imperialism had to end so that "natives" could lead lives free from European domination. As a creature of his time, Conrad could not grant the natives their freedom, despite his severe critique of the imperialism that enslaved them. (Said 30)

サイードが指摘するコンラッドの先駆性と時代的な限界は、グラスゴウにも該当する。しかし、コンラッドよりも20年ほど後の時代を生きたグラスゴウは、非ヨーロッパ的な人びとが台頭し、主権と独立を主張しつつある時代のうねりを実際に予感するところまで行きつくことができたであろう。サイードはコンラッドがアフリカ原住民を奴隷化する帝国主義を手厳しく非難してはいても、彼らに自由をあたえることまでは思いつかなかったことを「悲劇的限界」と呼んでいる。グラスゴウにもこの限界は見ることができるが、彼女の作品の中では時代の流れとともに限界が後退していき、まずは女性の社会的進出、そしてアフリカ系アメリカ人の置かれた社会的立場への疑問など、社会改革の必要性に目覚めていった。コンラッド作品が抱える「悲劇的限界」を、グラスゴウも完全には乗り越えることができなかったとはいえ、彼女の一連の小説からは価値観の変革期がすぐそこまで来ているという予兆を感じとることができる。つまり、コンラッドが踏み出せなかった「つぎの一步」をグラスゴウは踏み出していた可能性がある。

本論ではグラスゴウや南部作家たちが時代的な制約の中で、人種、性、階級などといった社会的な境界や規範と対峙し、多様性を容認する視座への道を模索した軌跡をたどった。これによって、南部文学の新機軸としてのグラスゴウ作品を再評価することになった。グラスゴウが当時の生物科学的言説の束縛を振り払って南部社会に自由や平等の概念を受容しようとする先駆けになったことは、自分自身を遺伝決定論の呪縛から解放し、人生は自分の力で切り開くことが可能であるという自己肯定感を得るために必要であっただけではなく、結果的には南部社会が奴隷制イデオロギーから脱却することにも寄与していた。人種や性別といったカテゴリに関わらず、個人の努力や才覚によって未来を切り開くことができる社会が訪れるであろうというグラスゴウの予感は、彼女の死後、世界各地で起きた主権や独立を獲得するための抵抗運動によって現実のものとな

りつつある。それは、ヴィクトリア朝時代の遺伝をめぐる社会文化的言説に縛られて自らの身体に生命を宿すことをためらったグラスゴウが、あたかも“barren”と呼ばれた荒地が近代化によって豊饒な大地に変わったように、小説執筆をとおして新しい時代の価値観を育てていたことを意味する。そのようなグラスゴウ小説が内包する予兆は今なお完全には実現されていないとはいえ、やがて生まれ来る新しい時代の胎動のように彼女の作品に力強く息づいているのである。

注

序論

- 1 この時、尊敬していたヴァージニア・ウルフには会えなかったことが心残りになった。
- 2 「黒人」「白人」「混血」「血」という言葉は、純血主義的な概念を前提としているため、括弧つきの表示が適切であるが、以降の記述では煩雑さを避けるため、とくに強調を要する場合を除いては括弧をはずす。また、当時の露骨な人種差別の問題を扱っているため、あえてアフリカ系アメリカ人という政治的に正しい名称ではなく、黒人と表記している。
- 3 ハワード・マンフォード・ジョーンズは“Northern Exposure: Southern Style”において、グラスゴウは社会進化論による決定論を小説に取り入れる傾向は後期の作品では薄れていき、ソフォクレス的な運命に翻弄される人間の悲劇に興味が移っていったと述べている。つまり、グラスゴウの後期の作品では社会進化論的な性格付けの影響が薄らいでいったと指摘している。

第 I 部の目的

- 1 ボウラーは、ダーウィンが発表に時間がかかったのは、キリスト教との対立を恐れたためというよりもダーウィンの論が確立していなかったためであると推察している (ボウラー 116)。

第 1 章

※ 本章は、神戸英米学会『神戸英米論叢』第 27 号(平成 26 年 2 月) に掲載された「Ellen Glasgow とダーウィニズム—*Virginia* を中心に」に加筆・修正を行ったものである。

- 1 グラスゴウの遺言執行人によると、『内なる女』が死後に出版されたのは、グラスゴウが 1935 年にそのように契約したからであった。その後、何度も原稿に手を加えながら、「重要書類」と表面に記した封筒に入れて大切に保管していた (*The Woman Within* xxxviii)。
- 2 グラスゴウの父には何人もアフリカ系アメリカ人の愛人がいるという噂が耳に入ったことによって、母が神経症を患うようになったと言われている。

第2章

※ 本章は、『21世紀倫理創世研究』Vol.8(神戸大学 倫理創世プロジェクト 平成27年3月)に掲載された「不幸な結婚は遺伝するのか?—*Life and Gabriella*に見る女性像の転換」に加筆・修正を行ったものである。

1 富山によれば、オスカー・ワイルドはダーウィンに強く興味を持ち、しばしば自己の発言で取り上げて、「科学的な遺伝の原理」について言及していた(『ダーウィンの世紀末』152-4)。

第3章

※ 本章は、『大谷学報』第95巻第1号(平成27年11月)に掲載された「女たちの狂気は遺伝か環境か—Ellen Glasgowの『不毛の大地』より」に加筆・修正を行ったものである。

1 後藤和彦は、アメリカ南部をアメリカと言う慌ただしい新興国に現われた「先祖返り」とも言うべき社会であったと論じ(後藤 154-7)、南部が抱えていた特殊性を指摘している。

2 義理の兄マコーマックはグラスゴウの作家活動に長年、助言を与えてきた。『種の起源』も彼がグラスゴウに読むことを勧めたとされている。しかし、彼はその後、ニューヨークのホテルで自死した。その理由はいまだに明らかにされておらず、当時もいろいろな憶測が流れた。

第4章

※ 本章は第53回日本アメリカ文学会全国大会(平成26年10月 北海学園大学)での口頭発表原稿「〈ニュー・ウーマン〉へと進化する農園主夫人像—Ellen Glasgow, *Barren Ground* とダーウィニズム」と、『神戸英米論叢』第28号(平成27年2月1日)に掲載された「赤い髪と青い服—Ellen Glasgowの*Barren Ground*に見る種の退化」に大幅に加筆・修正を行ったものである。

1 アメリカ禁酒法時代、女性が積極的に禁酒を主導し、婦人キリスト教禁酒同盟は世界有数の女性による社会改革組織となったと岡本勝は指摘している(岡本 33-7)。グラスゴウ作品においてもアルコール摂取の弊害が強調され、禁酒法時代の女性の活発に賛同しているように思われる。しかし、マルカム・カウリーが述べるように、マルクス主

義作家と違って、自然主義作家は、社会改革によって新しい世界が構築できるとは考えておらず (Cowley 429)、グラスゴウもアルコールの弊害を指摘しつつも、克服すべき悪習としてではなく、生来的な人間の弱さを露わにする道具として用いている。

2 亀井俊介は、アメリカの自然主義文学は、ヨーロッパのものとはかなり違っていると述べている。アメリカ自然主義作家たちは、アメリカ的な楽天主義や人間信頼が捨てきれず、自然主義の懐疑思想と相まって、独自の面白さが生まれたと指摘している。また、大井浩二も、定義通りの自然主義などどこにも見出すことができないと論じ、フランク・ノリスの『マクティーン』をアメリカ自然主義にしかみられない土着性を感じる「不純な」自然主義と評している (大井 4-5, 71)。

3 グラスゴウ自身、幼少時より病弱であったが、グラスゴウ家には早逝する者が多かった。このことが、グラスゴウが種の退化について考えるきっかけになっているとグッドマンは指摘している (Goodman 48)。

第5章

※ 本章は English Language and Literature Association of Korea (平成 26 年 12 月 韓国、太田)での口頭発表原稿 “The Double Disguise in William Wells Brown’s *Clotel; or, The President’s Daughter*” に大幅に加筆・修正を行ったものである。

1 2 人の間には少なくとも 1 人は子どもがいたという結論に至った。(Gordon-Reed xi)

2 ホレイショの新しい妻はメアりに庭仕事をさせ、故意にメアリの白い肌を黒く日焼けさせて、奴隷の身分であることを視覚的にも明らかにしようとした。このエピソードからも、メアリの肌の白さはホレイショの妻の嫉妬を一層強くしていたことがわかる。

第6章

※ 本章は『津田塾大学言語文化研究所報』第 24 号(平成 21 年 7 月) に掲載された「白人女性から黒人奴隷へ—フランシス・ワトキンス・ハーパーの『アイオーラ・ルロイ、または向上した影』」に加筆・修正を行ったものである。

1 ハーパーの伝記的事実については、ボイドを参照。

2 “The Slave Mother (A Tale of the Ohio)”は Margaret Garner が 1856 年に娘を殺害した事件をもとにして創作された(*A Brighter Coming Day* 84)。

第7章

1 1966年、グラスゴウの死後に『敗北を越えて』(*Beyond Defeat: The Epilogue to an Era*)が出版されたが、ジュリアス・レイパーは、この小説は『この世の中で』と2冊で1冊として出版されてもよかったと述べている (Levy 220)。

第8章

※ 本章は『大谷学報』第95巻第2号(平成28年4月)に掲載された「南部白人女性像の変遷とアフリカ系アメリカ人男性作家—Langston HughesとRichard Wrightの比較研究—」に加筆・修正を行ったものである。

1 ヒューズはミズーリ州の出身であるが、父方の曾祖父たちは二人とも、ケンタッキー州の白人の奴隷所有者であるので、南部の人種問題は自身に関連が深いととらえていたと考えられる。

2 ヒューズのセクシュアリティに関する議論がなされてきたと Arnold Rampersad が言及しているが(Huggins xxxi)、これはヒューズが作品においてのみではなく、実生活でも人種やジェンダーの境界線を越境していたことを物語っている。彼が二重の意味で周縁化されていたことは、虐げられた状況に置かれている人の共感を得られるような、多様性を重視した作品を生み出す原動力になっていたのではないだろうか。

3 ヒューズは詩に歴史的なエピソードを挿入しており、白人が語る歴史でアフリカ系アメリカ人は見えない存在であったが、実際にはいかに深くかかわってきたかという例証を行っている。例えば、「黒人」という詩では、ジュリアス・シーザー(Julius Caesar)やジョージ・ワシントン(George Washington)、ウルワース(Woolworths)といった歴史上の有名人たちによって、さらにはコンゴ河流域のベルギー植民地などにおいて、アフリカ系アメリカ人が労働を搾取されていたことが指摘されている(『ふりむくんじゃないよ』75-7)。

4 越智博美はリンチを「黒人男性と白人女性のセクシュアリティとジェンダーの規範を産出する文化的装置」と呼び、白人男性が黒人男性と白人女性の両方をコントロールする手段であったことを論じている(『モダニズムの南部的瞬間』276-7)。

5 Maybelle はアフリカ系アメリカ人男性を性的対象として見下す人種差別主義者のイメージを付与されている。彼女の出身地が南部であるとは断定されていないが、may

belle という名前による暗示や、ワシントンという南部から比較的近い舞台設定、あからさまな人種差別主義的態度から、南部の保守的な白人社会の価値観を共有していたと考えられる。

第9章

※ 本章は、新英米文学会年次大会（平成27年8月）での口頭発表原稿「周縁化された白人女性と黒人男性—Richard Wright と Ellen Glasgow の南部白人女性像」に加筆・修正を行ったものである。また、『芦屋論叢』第68号に「アメリカ南部白人女性像の変化—エレン・グラスゴウとリチャード・ライトの対照的アプローチ」という題目で平成29年12月に掲載された。

1 グラスゴウがカナリアにエアリアルという名を付けた理由は明らかになっていないが、古典文学に精通していたグラスゴウは作品創作に古典のアイディアを取り入れることがあった。また、シェイクスピアの『テンペスト』における植民地主義的見解への批判に対しては、近年トマス・カーテリ(Thomas Cartelli)がポストコロニアリズム批評によってテキストの復権を試みている。

2 前章で指摘したとおり、メイベルの名前は“may be a belle”という意味を連想させ、アメリカ南部の裕福な白人女性がサザンベルと呼ばれていたこととの関連を暗示していると思われる。

第10章

※ 本章は、『西洋文学研究』第36号（大谷大学西洋文学研究会、平成28年9月）に掲載した「Ellen Glasgow の戦略的 sisterhood—Allen Tate と H. L. Mencken との書簡から—」に加筆・修正を行ったものである。

1 1913年10月27日、グラスゴウ宛てに書かれた。

2 女性同士の友情は風変わりだが無垢なものとして考えられていた傾向があったが、1920年代以降は、医学的見地や大衆文化の興隆により、同性愛を異常としてみなすように変化したとパメラ・R・マシューズは論じている (Matthews 153)。

3 ジェームズ・ブランチ・キャベル(James Branch Cabell, 1879-1958)を指す。

4 1932年、グラスゴウは57歳でテイトは33歳であったので、年齢的なへだたりもあった。

5 パメラ・マシューズは、ドリンダとフラヴァンナの関係が完全に不平等であることから、グラスゴウは「親切な人種差別主義者」(Matthews 161)だとエリザベス・アモンズ (Elizabeth Ammons)が非難した批評にも言及している。

6 『不毛の大地』は1925年に出版されており、注2のマシューズの指摘通り、女性間の同性愛が明白に描かれれば逸脱行為として読者に反感を抱かせる可能性が強かった。1929年に出版された『彼らは愚行に屈した』においては、グラスゴウは女性間の親密な関係をサブプロットに使う程度にとどまっている。

7 赤枝香奈子は近代日本における家父長制下での女性同士の親密な関係を、ロマンティック・ラブの 実践として考察しているが、渡部和子の19世紀アメリカにおける同性愛についての研究との比較を試みており、アメリカでは性科学がヨーロッパから入ってきた後に同性愛は性的倒錯と見なされるようになったと述べている (赤枝 75-6)。

引用・参考文献

- Baym, Nina. *Feminism and American Literary History: Essays*. New Brunswick: Rutgers UP, 1992.
- Boyd, Melba Joyce. *Discarded Legacy: Politics and Poetics in the Life of Frances E. W. Harper 1825-1911*. Detroit: Wayne State UP, 1994.
- Brantly, Will. *Feminine Sense in Southern Memoir*. Jackson: UP of Mississippi, 1993.
- Bronte, Charlotte. *Jane Eyre*. Ed. by Richard J. Dunn. 1847. New York: Norton, 2001.
- Brown, Alexis Girardin. "The Women Left Behind: Transformation of the Southern Belle, 1840-1880." *The Historian* 62(2000): 759-78.
- Brown, William Wells. *Clotel, or, The President's Daughter*. 1853. New York: Penguin, 2004.
- Bryant, Earle V. "The Sexualization of Racism in Richard Wright's 'The Man Who Killed a Shadow.'" *Black American Literature Forum* 16. 3 (1982): 119-21.
- Bullough, Vern L., and Bonnie Bullough. *Cross Dressing, Sex, and Gender*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1993.
- Carby, Hazel V. *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist*. New York: Oxford UP, 1987.
- Cartelli, Thomas. *Repositioning Shakespeare: National Formations, Postcolonial Appropriations*. London: Routledge, 2003.
- Cash, W. J. *The Mind of the South*. 1941. New York: Vintage, 1991.
- Clinton, Catherine. *The Plantation Mistress: Woman's World in the Old South*. New York: Pantheon, 1982.
- Conrad, Joseph. *Heart of Darkness and Other Tales*. Ed. Cedric Watts. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Cowley, Malcom. "'Not Men': A Natural History of American Naturalism." *The Kenyon Review*. Summer 1947: 414-35.
- Ekman, Barbro. *The End of a Legend: Ellen Glasgow's History of Southern Women*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1979.
- Fabi, M. Giulia. *Passing and the Rise of the African American Novel*. Urbana: U of Illinois P, 2004.

- Fabre, Michal. "‘The Man Who Killed a Shadow’: A Study in Compulsion."
- The World of Richard Wright*. Jackson: UP of Mississippi, 1985: 108-21.
- Foner, Philip S., ed. *Frederick Douglass on Women’s Rights*. New York: Da Capo, 1992.
- Fox-Genovese, Elizabeth. *Within the Plantation Household: Black and White Women of the Old South*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1988.
- Frederick P. W. McDowell. *Ellen Glasgow and the Ironic Art of Fiction*. Madison: U of Wisconsin P, 1963.
- Gates, Henry Louis, Jr., ed. *Three Classic African-American Novels. By William Wells Brown, Frances E. W. Harper, and Charles W. Chesnut*. New York: Vintage, 1990.
- Gilman, Charlotte Perkins. *The Yellow Wall-Paper*. 1892. New York: The Feminist P, 1973.
- Glasgow, Ellen. *Barren Ground*. 1925. San Diego: A Harvest Book, 1985.
- . *A Certain Measure: An Interpretation of Prose Fiction*. New York: Harcourt, Brace and Company, 1943.
- . *The Descendant: A Novel*. New York: Harper & Brothers Publishers, 1897.
- . *In This Our Life*. 1941. Worcestershire: Read Books Ltd, 2013.
- . *Life and Gabriella: The Story of a Woman’s Courage*. 1916. Qontro Classic Books, 2010.
- . *The Sheltered Life*. 1932. Charlottesville: UP of Virginia, 1994.
- . *Virginia*. 1913. New York: Penguin Books, 1989.
- . *The Woman Within: An Autobiography*. 1954. Charlottesville: UP of Virginia, 1994.
- . 『不毛の大地』板橋好枝、藤野早苗、羽澄直子訳 荒地出版社、1995年。
- Goodman, Susan. *Ellen Glasgow: A Biography*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1998.
- Gordon, Caroline. *Penhally*. Nashville: J. S. Sanders & Co., 1991.
- Gordon-Reed, Annette. *Thomas Jefferson and Sally Hemings: An American Controversy*. Charlottesville: U of Virginia P, 1997.
- Haardt, Sara. *Southern Souvenirs*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1999.
- Harper, Frances E. W. *A Brighter Coming Day: A Frances Ellen Watkins Harper Reader*. Ed. Frances Smith Foster. New York: Feminist, 1990.
- . *Iola Leroy, or Shadows Uplifted*. 1892. *Three Classic African-American Novels. By William Wells Brown, Frances E. W. Harper, and Charles W. Chesnut*. Ed. Henry Louis Gates Jr. New York: Vintage, 1990. 225-463.

- Harrison, Elizabeth Jane. *Female Pastoral: Women Writers Re-Visioning the American South*. Knoxville: The U of Tennessee P, 1991.
- Hartog, Hendrik. *Man and Wife in America: A History*. Cambridge: Harvard UP, 2000.
- Hobson, Fred. *But Now I See: The White Southern Racial Conversion Narrative*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1999.
- . *Serpent in Eden: H. L. Mencken and the South*. 1974. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1978.
- . *Tell About the South: The Southern Rage to Explain*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1983.
- Hodes, Martha. *White Women, Black Men: Illicit Sex in the 19th-Century South*. New Haven: Yale UP, 1997.
- Hofstadter, Richard. *Social Darwinism in American Thought*. Boston: Beacon P, 1992.
- Huggins, Nathan Irvin. *Harlem Renaissance*. New York: Oxford UP, 2007.
- Hughes, Langston. *Selected Poems of Langston Hughes*. New York: Vintage Classics, 1990.
- Jones, Howard Mumford. "Ellen Glasgow, Witty, Wise and Civilized" *Ellen Glasgow: The Contemporary Reviews*. Ed. Dorothy Scura. Knoxville: Cambridge UP, 1992: 401-4.
- . "Northern Exposure: Southern Style" *Ellen Glasgow: Centennial Essays*. Ed. M. Thomas Inge. Charlottesville: UP of Virginia, 1976.
- Jones, Jacqueline. *Labor of Love, Labor of Sorrow: Black Women, Work, and the Family from Slavery to the Present*. New York: Vintage, 1995.
- Levy, Helen Fiddymont. "Coming Home: Glasgow's Last Two Novels." *Ellen Glasgow: New Perspectives*. Ed. Dorothy M. Scura. Knoxville: U of Tennessee P, 1995: 220-34.
- Lombroso, Cesare. *Crime: Its Causes and Remedies*. Trans. Henry P. Horton. London: William Heinemann, 1911.
- Manning, Carol, S., ed. *Female Tradition in Southern Literature*. Urbana: U of Illinois P, 1993.
- Matthews, Pamela, R. *Ellen Glasgow and a Woman's Traditions*. Charlottesville: UP of Virginia, 1994.
- McDowell, Frederick P. W. *Ellen Glasgow and the Ironic Art of Fiction*. Madison: U of Wisconsin P, 1963.
- McMillen, Sally G. *Southern Women: Black and White in the Old South*. Wheeling: Harlan

- Davidson, 2002.
- Noble, David W. *The Progressive Mind, 1890-1917*. Chicago: U of Minnesota, 1970.
- Prenshaw, Peggy Whitman. "Southern Ladies and the Southern Literary Renaissance" *Female Tradition in Southern Literature*. Ed. Carol S. Manning. Urbana: U of Illinois P, 1993: 73-88.
- Procter, Adelaide A. *The Poems of Adelaide A. Procter*. Boston: J. R. Osgood, 1875.
- Raper, J. R. *Ellen Glasgow and Darwinism, 1873-1906*. (Doctoral Dissertation) Northwestern University, 1966.
- . *From the Sunken Garden: The Fiction of Ellen Glasgow, 1916-1945*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1980.
- . *Without Shelter: The Early Career of Ellen Glasgow*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1971.
- Richards, Marion K., *Ellen Glasgow's Development as a Novelist*. The Hague: Mouton, 1971.
- Rodgers, Marion Elizabeth. *Mencken and Sara A Life in Letters: The Private Correspondence of H. L. Mencken and Sara Haardt*. New York: McGraw-Hill Book Company, 1987.
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. New York: Alfred A. Knopf, 1993.
- . 『文化と帝国主義 1』 大橋洋一訳 みすず書房、2003年。
- Sawaya, Francesca. "The Problem of the South: Economic Determination, Gender Determination, and Genre in Glasgow's *Virginia*." *Ellen Glasgow: New Perspectives*. Ed. Dorothy M. Scura. Knoxville: U of Tennessee P, 1995. 132-45.
- Scott, Anne Firor. *The Southern Lady: From Pedestal to Politics 1830-1930*. Charlottesville: UP of Virginia, 1970.
- . "Women's Perspective on the Patriarchy in the 1850s." *Half Sisters of History: Southern Women and the American Past*. Ed. Catherine Clinton. Durham: Duke UP, 1994. 76-92.
- Scura, Dorothy McInnis. "Barren Ground: Ellen Glasgow's Critical Arrival (Introduction)" *Mississippi Quarterly* 32 (1979): 549-52.
- . *Ellen Glasgow: The Contemporary Reviews*. Knoxville: U of Tennessee P, 1992.
- . *Ellen Glasgow: New Perspective*. Knoxville: U of Tennessee P, 1995.
- Seidel, Kathryn Lee. *The Southern Belle in the American Novel*. Tampa: U of South Florida P, 1985.

- Slate, Claudia. "Wish You Weren't Here: African American Portrayals in Vintage Florida Postcards." *Florida Studies: Proceedings of the 2008 Annual Meeting of the Florida College English Association*. Ed. Claudia Slate and April Van Camp. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2009: 91-100.
- Strickland, Agnes. *The Life of Queen Elizabeth*. 1924. New York: E. P. Dutton, 1906.
- Taylor, William R. *Cavalier and Yankee: The Old South and American National Character*. New York: Oxford UP, 1979.
- Tuttleton, James W. "Hardy and Ellen Glasgow: *Barren Ground*." *Mississippi Quarterly* 32 (1979): 577-90.
- Wagner, Linda W. *Ellen Glasgow: Beyond Convention*. Austin: U of Texas P, 1982.
- Waldron, Ann. *Close Connections: Caroline Gordon and the Southern Renaissance*. Knoxville: The U of Tennessee P, 1989.
- Watson, Jr., Ritchie D. "Sara Haardt Mencken and the Glasgow-Mencken Literary Entente." *Ellen Glasgow Newsletter* 20 (1984): 7-18.
- . "The Ellen Glasgow-Allen Tate Correspondence: Bridging the Southern Literary Generation Gap." *Ellen Glasgow Newsletter* 23 (1985): 3-24.
- Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1820-1860." *American Quarterly* 18 (1966): 151-74.
- Westbrook, Perry D. *Free Will and Determinism in American Literature*. Cranbury: Associated UP, 1979.
- Wheeler, Marjorie Spruill. *New Women of the New South: The Leaders of the Woman Suffrage Movement in the Southern States*. New York: Oxford UP, 1993.
- Wright, Richard. "The Man Who Killed a Shadow." *Eight Men*. New York: Harper Perennial, 1996.
- . *Black Boy (American Hunger): A Record of Childhood and Youth*. 1945. New York: Perennial, 1998.
- . *Native Son and How "Bigger" Was Born*. 1940. New York: Harper Perennial, 1993.
- . 『アメリカの息子』 橋本福夫訳 早川書房、1972年。
- Yalom, Marilyn. 『〈妻〉の歴史』 林ゆう子訳 慶應義塾大学出版会、2006年。
- 相本資子 『エレン・グラスゴーの小説群—神話としてのアメリカ南部世界』 英宝社、

- 2005年。
- 赤枝香奈子『近代日本における女同士の親密な関係』 角川学芸出版、2011年。
- 飯山雅史『アメリカの宗教右派』 中公新書、2008年。
- 池上彰『そうだったのか！アメリカ』 集英社文庫、2011年。
- 上杉忍『アメリカ黒人の歴史 奴隷貿易からオバマ大統領まで』 中公新書、2013年。
- 大井浩二『アメリカ自然主義文学論』 研究社、1973年。
- 大内義一、鈴木三喜男『英米文学シリーズ22 リチャード・ライトの世界』 評論社、1981年。
- 岡本勝『禁酒法＝「酒のない時代」の実験』 講談社現代新書、1996年。
- 越智博美「農本主義者の敵たち」『現代批評理論のすべて』 大橋洋一編 新書館、2013年。35頁。
- 、『モダニズムの南部的瞬間—アメリカ南部詩人と冷戦』 研究社 2012年。
- 加藤和人「ヒトゲノム研究における人種・エスニシティ概念」『人種の表象と社会的リアリティ』 竹沢泰子編 岩波書店、2009年。216-41頁。
- 金澤智『アメリカ映画とカラーライン 映像が侵犯する人種境界線』 水声社、2014年。
- 亀井俊介『アメリカ文学史講義2—自然と文明の争い—金メッキ時代から1920年代まで』 南雲堂、1998年。
- 川島浩平「アメリカスポーツ発展期における混血アスリートの人種意識」『人種神話を解体する3「血」の政治学を越えて』 川島浩平、竹沢泰子編 東京大学出版会、2016年。191-220頁。
- 川本静子『＜新しい女たち＞の世紀末』 みすず書房、1999年。
- ギデンズ、アンソニー『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム—』 松尾精文、松川昭子訳 而立書房、2006年。
- 貴堂嘉之「アメリカ合衆国における『人種混交』幻想—セクシュアリティがつくる『人権』」『人種の表象と社会的リアリティ』 竹沢泰子編 岩波書店、2009年。
- 鴻巣友季子「ヒロインで読む世界文学4」 日本経済新聞（夕刊）、2013年4月25日、16頁。
- コースマイヤー、キャロリン『美学—ジェンダーの視点から』 長野順子・石田美紀・

- 伊藤政志訳 三秀舎、2009年。
- 後藤和彦『敗北と文学 アメリカ南部と近代日本』松柏社、2005年。
- 斉藤綾子、竹沢泰子編『人種神話を解体する1 可視性と不可視性のはざままで』東京大学出版会、2016年。
- 坂野徹、竹沢泰子編『人種神話を解体する2 科学と社会の知』東京大学出版会、2016年。
- 佐伯啓思『現代文明論(上) 人間は進歩してきたのか—「西欧近代」再考』PHP研究所、2005年。
- 猿谷要『検証 アメリカ500年の物語』平凡社、2004年。
- シュトローベル、マーガレット 『女たちは帝国を破壊したのか ヨーロッパ女性とイギリス植民地』 井野瀬久美恵訳 知泉書館、2003年。
- ゾラ、エミール 「獣人」『世界文学全集 29 ゾラ／モーパッサン集』 河内清、倉智恒夫訳 筑摩書房、1970年。
- 高橋正雄『悲劇の遍歴者—リチャード・ライトの生涯』中央大学出版部、1968年。
- 竹沢泰子「総論 人種概念の包括的理解に向けて」『人種概念の普遍性を問う 西洋的パラダイムを超えて』 竹沢泰子編 人文書院、2005年。9-109頁。
- 、「総論 表象から人種の社会的リアリティを考える」『人種の表象と社会的リアリティ』 竹沢泰子編 岩波書店、2009年。1-26頁。
- ダルモン、ピエール 『医者と殺人者—ロンブローゾと生来性犯罪学者伝説』 鈴木秀治訳 新評論、1992年。
- 丹治愛『神を殺した男 ダーウィン革命と世紀末』 講談社、1994年。
- 、『モダニズムの詩学 解体と創造』みすず書房、1994年。
- 土屋倭子『「女」という制度—トマス・ハーディの小説と女たち』 南雲堂、2000年。
- 徳井淑子『色で読む中世ヨーロッパ』 講談社選書メチエ、2006年。
- 富山太佳夫『おサル系の譜学—歴史と人種』 みすず書房、2009年。
- 、『ダーウィンの世紀末』青土社、1995年。
- 長谷川眞理子『ダーウィン 種の起源』 NHK「100分de名著」ブックス、2015年。
- バーダマン、ジェームズ M.『ふたつのアメリカ史 [南部人から見た真実のアメリカ]』 東京書籍 2003年。
- 藤野早苗「不屈の精神で挑む農場経営—エレン・グラスゴー『不毛の大地』」

- 『アメリカ文学にみる女性と仕事—ハウスキーパーからワーキングガールまで』 野口啓子・山口ヨシ子編 彩流社、2006年。177-94頁。
- 風呂本惇子「解説」『クローテル 大統領の娘』風呂本惇子訳、解説 松柏社、2015年。
- ヒューズ、ラングストン『ふりむくんじゃないよ』古川博巳・吉岡志津世訳 国文社、1996年。
- . 『ぼくは多くの河を知っている』 木島始訳 河出書房、1967年。
- 藤井仁子「ハリウッド悪女映画傑作選 DVD-BOX リーフレット」 株式会社ブローウェイ、2016年。
- ボウラー、ピーター・J. 『チャールズ・ダーウィン 生涯・学説・その影響』 横山輝雄訳 朝日選書、1997年。
- 宮下規久朗『モチーフで読む美術史』 ちくま文庫、2014年。
- 山本秀行『アジア系アメリカ演劇 マスキュリニティの演劇表象』 世界思想社、2008年。
- 米本昌平『優生学と人間社会—生命科学の世紀はどこへ向かうのか』 講談社、2000年。
- ラセット、シンシア・イーグル『女性を捏造した男たち—ヴィクトリア時代の性差の科学』 富山太佳夫解題、上野直子訳 工作舎、1994年。